
Radiancia

n.s.

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

R a d i a n c i a

【Nコード】

N 0 6 7 7 Q

【作者名】

n . s .

【あらすじ】

魔法使いと地球の少女の物語。

地球の少女レイディア。少女は崩壊したニルキナでデディゼンドという少年に助けられる。少年と二人で街を歩き、地獄のような光景を目の当たりにし、絶望の一夜を過ごす。明くる朝、少女は自ら少年に命を預ける。メカナの少年デディゼンド。少年は異世界メカナから来たカルンと呼ばれる魔法使いであり、セイレンという見えない弾丸を放つ殺人者だった。ニルキナ崩壊後、少年は少女を連

れて地球を後にする。

二人は幸せを願い、遙かな果てを目指す。終わりのある命を持つて。

そして、二つの果実を遠い未来に届けるだろう。

1. **N i r k i n a r** — **(L i m b o)** — **T h e s k y o f t**

これは少年と少女の物語。二人の疎通を描いてゆく。ゆめゆめ忘れることなかれ。

これは幸せを求める物語。目指すのは子どもたち。ゆめゆめ、忘れることなかれ。

1. **N i r k i n a r** — **(L i m b o)** — **T h e s k y o f t**

目の前に広がる、圧倒的な死と残骸。

内臓と血とそれらの臭気。都市の砂礫が死と混ざり果てていた。今はまだ生きている者たちも砂礫と血に塗れていた。血の流量と死の総数は増え続けていた。

人が黴菌か癌の様に清浄な宇宙へと増殖し始めようとしたその時から、審判が下されたかのように地球は地獄になるのだと思った。

しかしそれは自滅であり、地球人が抗うべき敵はどこにもいなかった。

閉ざされた空を見上げた。

空から飛来する敵は存在し得なかった。きっと、いつまでも。

デディゼンドは思考を遊ばせるのを止めた。

足を重く踏み出した。

空まで重なる無窮の罪を背負うため、銃把を固く握りしめ、万死の只中へと進んでいった。

崩壊した都市。大陸の片隅に噴出した地獄。先進科学によって建造された大都市の死滅。

折り重なった十の死と、積み重なった百の死、道端に打ち捨てられた千の死と、瓦礫と混ざり合って果てた万の死。崩落したビルの中に埋もれている十万の死と、亡者のように地表をさ迷い歩いている一人の命。

突如発生した十数分間もの激震。未曾有の事態と死者の数。自分

ひとりだけが生き残った現実。

異国の宇宙から飛び立とうとしていた移民宇宙船は画面の砂塵に変わり、ありとあらゆる情報端末が繋がりを断たれ、全ての機器が死んだ。

故に、まずは不可知の地獄。個人のわずかばかりの知覚が拾うのは苦痛と血と肉。

「おお、神よ」

数時間後か数日後に死者となる者たちに恐慌と悪意が与えられた。与えたのは現実。幻想への逃避を許さない絶対的な断絶。彼らは消えない無限の苦痛に取り残された。

彼らを助け得る心優しい人間たちは既に死体に変わっていた。瓦礫の下に埋まっていた。絶対に起こり得ないことが起きたと、終わりと、残された生存者たちが理解してしまった。

「逃げられない。助け来ない。皆死ぬ」

そう叫ぶ扇動者に被災者たちが巻き込まれ、最悪のかたちで本能と悪意に喰われた。弱肉強食の法則が顕わになった。

「手を挙げる」

「話し合おう」

「よこせ」

「お願い」

「助けて」

「ははは」

残忍になった少数の者たち。暴力に怯えるだけの多数の者たちはなす術もなく殺されたか犯された。

デディゼンドがその部屋に踏み入った時は既に坍塌。

黒の頭髮と靴、朱色と緋色の上下の衣服。災害発生後に都市内に入った彼だけが無傷のままだった。鮮烈な姿が汚れに塗れた部屋の中に浮かび上がった。

埃塗れの男たちは一心不乱に女たちを蹴っていたが、初めに出入り口付近の四人の男がふと彼に気付いた。その下の二人の女は虚ろな表情をしていた。

「座標点定義…フェノソルタ數位集積経路内座標空間…座標0001から0018」

へ実行R…照射座標指定…指定数4…参照…座標0001から0004.

実行Rより0. 9704秒…完了

ガン。

デディゼンドは男だけを撃って殺した。

地面を向いたままの二丁の拳銃。漆黒の銃身。

部屋にいた男たちの全てが不可思議な炸裂音を聞いて振り向き、女たちの何人かが目を向け、その全員が右手に銃を持つ彼と背から致

死量の血液を流し続ける四体の死体に釘付けになったその時。

〈実行R…照射座標指定…指定数14…参照…座標0005から0018．

実行Rより0．9704秒…完了〉

ガン。彼は残る男たちだけを皆殺しにした。

〔定義破棄…座標0001から0018〕

残響したのは肉と骨の破裂と倒壊。男たちの背が全て同時に弾けていた。

絶命。

鮮血が音を立てて撒き散らされ、そのまま四方に無言が崩れ落ちた。

硬く重い銃声。正確無比な銃撃。しかし、下に向けられたままの死の空砲。

男たちの心臓の背側半分を透明なエネルギーで打ち抜いた後、デイズェンドは改めて部屋の中を見渡した。この場の男たちはもう誰も生きていなかった。

「ありがとうございます」

助けられた女性の一人。比較的早く立ち直り、細かく震えながら彼に感謝してきた。気丈そうな若い女性だった。男たちの残した体液や悪臭に塗れていたが、なおも強い意志の光がその瞳に宿っていた。

デディゼンドは女性の言葉に反応して僅かに頷いた。そして他の女性たちに焦点を合わせていった。

女性たちは夥しい血溜りの中に手足を浸して放心し、体を折り曲げて震え、布切れを欠き抱いて疲労と恐怖を押し殺し、血と命を失った男たちを見下ろし、あるいはその殺人者である彼から目を離せないでいた。

おそらくは十代半ばから二十半ばまでの若い女性たち八人全員が彼の言葉か動きがなければ動けないでいた。

デディゼンドは九人目の女性を見つけた。

部屋の右奥の片隅で蹲る半裸の少女。水色の服を強引に引き千切られ、白い肌着も強引に摺らされていた。

幼い胸が肌蹴っていた。

細い足は青いスカートと赤い血溜りの中で行儀よく折りたたまれていた。

他の女性たちと同じように、彼女も呆然として彼を見ていた。彼だけを。

少女の傍らには一人の太った男の死骸。彼が正確に殺していた。死骸を一瞬だけ確かめてから、彼は少女に視線を注いだ。

あまりに幼く、そして美しい少女。幼く美しいために男の一人に連れ去られ、幼いが美しいために彼が心惹かれた。

つい先程、男が急いで彼女を屋内に引き入れていく様子を遠目に見つけていた。遠くからでも何が起きるのかを理解した。直後、瓦礫の海の上を疾走していた。

デディゼンドは静かに彼女に歩み寄った。

女性たちは体を引いて彼を通した。足が動かずとも、僅かでも声無く、向き合う二人を注視した。

少女の顔は、男の唾液で汚れていた。小さな唇も、口の中も。小さな舌が彼女のではない粘液に塗れていた。絶命している肥満の男を跨ぎ、少女と目線を合わせた。彼女は横倒しになった棚の上に座らされていた。目線は彼とほとんど同じ高さにあった。

銃を仕舞い、代わりに服の裏で綺麗な手巾を元素の魔法系で作り出した。

「大丈夫か」

嫌な臭いのする唾液を少女の顔から丁寧に拭き取りながら言っていた。少女はまだ表情を作れず、体も動かせず、彼にされるままになっていた。けれど彼が彼女の口をそっと開けて溜まった唾液を拭き取った時には驚いたように一度瞬きをした。

「うん」

顔から手を離れた時、かすれた声で小さく答えた。

ようやく彼は安堵した。

細く滑らかな淡い色の髪の毛が薄く埃を被っていた。細い手足も薄い衣服も同じように白く埃を被っていた。それはやがて全ての骸を覆う死の国の灰だった。ただ、幸運にも男の体液には濡れていなかった。

見つめられ、少女はやや深く見返してきた。淡い青色の瞳が彼を映していた。

何も言わず、少女の胸元に目を落とした。そして肌着を肩まで上

げ、千切れかけたボタンを合わせて少女の胸を隠した。

「ありがとう」

少女は俯き、小さく言った。

デディゼンドはその言葉と音声が消えない記憶になったのを感じた。

皆、命懸けならば歩けそうだった。そう判断した。

女性たちが言葉を作れない間に袂の少女に顔を向けて目を細め、目を閉じた。

閉じたまま、しかし何もせず。できず。できないまま、部屋の入りに引き返そうとし、体を動かした時、ごく弱く、袖を引かれた。

驚き、目を開けて動きを止め、ゆっくりと振り返った。

少女が何も言えないような表情で見えてきた。何も言えず。無垢に、純粹に、見つめ。ただ、ただ、無条件に、心を。曝し、手を動かしていた。いつの間にか、目を閉じていた間に、袖を摘んでいた。持っていた。離さないでいた。話せないでいた。

「助けたかったから助けた」

誰も動けないままの静寂が過ぎた後、小さな声で尋ねた。

「一緒に来るか？」

あまりにも少ない言葉。言葉の少ない、その少年。けれど優しい表情と声音。およそ理解のできない殺人者の振る舞いに対して、しかし少女は恐れなかった。むしろ、遠いどこかで会ったことがあるかのような不思議な懐かしさを感じた。

「うん」

だから、それは心からの頷きだった。



それから、交わされるべき言葉はあまりにも少なく、陵辱の傷跡のせいで一層少なく、皆が静かに顔を見合わせた。女性たちはデゼンドに何も聞かなかった。何も。

彼も女性たちに何も聞かなかった。何も。

少女は彼の傍で佇んでいた。彼の赤い衣服が彼女の細い体と重なっていた。赤く汚れた服と足が赤い彼と重なっていた。

一つと八つの思いを、彼は量れなかった。量らなかった。

誰がどう見ても、彼女が唯一汚されていないことと最も幼いことのどちらかが最も重要な事実であり、どちらかが二番目だった。三番目にやっと、偶然、必然、運命、対価、共時性、というような言葉が横並びで現れては消えていった。

個人的に選別した、ということの責任を彼が負うのは初めてだった。実はそうだった。今までは無差別に助けるか見捨てていた。

悲痛と絶望を隠せない、今や八人の女性の代表である気丈な女性に目を向けたまま、だから彼は義務的に告げるしかなかった。

「できるだけ早く西のゲートから逃げろ。そこからなら街から脱出できる。救援が来ている」

そのように、事前に決めていたことしか言えなかった。

「はい、そうします。助けていただき、本当にありがとうございました」

女性はすぐに頷いた。まるで決めていた言葉をそのまま言ったかのように。憔悴は隠せず、しかし変わることはない強い意思を見せた。

彼も頷く以外になかった。そして女性たちから視線を切り、少女を連れ、死者と善悪の街へと戻っていった。

その後、都市の瓦礫の谷間や嶺を二人で歩いた。二人で歩くことになった。彼の行動の当然の帰結として。責任を持たなければならなかった。話をしなければならなかった。あるいは何かを。

デディゼンドという赤い殺人者はそのことを絶えず考えながら東回りで北へと歩き続けた。そして殺し続けた。右手の銃で、地に向けたままの拳銃で、ガン、という硬く重い音と共に殺戮を生み出し

続けた。彼の視界の中で殺人か強姦か暴行を行っている男たちか女たちの心臓を弾き、街路の埃溜まりや彼ら自身の血溜まりへと沈み込ませていった。彼ら彼女らの全てが彼の姿に気付いてから間もなく撃たれた。彼が撃って殺した。一発の銃声を聞くか、仲間の背中で小さな爆弾が弾けたかのような不思議な光景を見た瞬間に周囲の加害者たちも理解不能な殺戮者の存在に気付いた。多くの者は訳も分からないまま怒り狂い、彼を攻撃しようとして、間もなく殺された。ガン。初めから彼や少女を狙って襲おうとした者たちも簡単に殺された。ガン。その光景を目撃した被害者たちは虚ろな目に彼を映していた。驚くことのできる者の方が少なかった。

「できるだけ早く西のゲートから逃げろ。そこからなら街から脱出できる。救援が来ている」

デディゼンドは繰り返し言い続けた。彼の言葉には有無を言わせない力強さが込められていたので、被害者と被災者の多くは言われた通りにすぐに行動した。助言は全員が移動を始めるまで何度も繰り返された。市民が道の傍の物陰や形を留めた屋内等の少し離れた場所に隠れていた場合も、彼は簡単に見つけ出した。助けるべき者が子どもだった場合は近くにいる加害者ではない大人を見つけ、子どもの方を指差して言った。

「できるだけ早く西のゲートから逃げろ。そこからなら町から脱出できる。救援が来ている。向こうにいる、青い服を着た子どもを連れて行け」

同じように、大人たちが子どもたちの方へと向かうまで言葉を繰り返した。彼の後ろを歩く少女は自分と同じくらいの背格好の子どもたちの悲惨な状態を見て全ての言葉を無くしてしまったようだった。彼女にかけるべき言葉を探しながら、しかしいつまでも無言の

まま、彼は子どもも襲う加害者たちを冷静に殺し続けた。ガン。ガン。暗い道の隅や瓦礫の隙間、物陰や屋内で動けないでいる子どもたちも何度か見つけた。埃だらけの子、血まみれの子、殴打の痕のある子、裸の子。彼の背後の少女よりも綺麗な女子もいた。ただ、ほとんどの子どもが声と足を亡失していた。泣くことしかできない子どもも多かった。一人で歩ける子どもは極めて少なかった。子どもを助ける場合だけはほとんど南へと逆行することもあった。彼は透明な目と耳を使って見聞きし、助けるべき者の場所も優先順位も分かっていた。歩いては通れない場所を迂回し、子どもなら通れる場所を通り、加害者を殺し、被害者や被災者を助けた。ただし、重傷を負って命の間もない者は助けず、無言で通り過ぎた。稀に、瀕死の人間の最期を看取ったこともあった。そうして、元は街の車道だった瓦礫の川を遡行した。少女を連れ、東側の内壁に沿って北へと進み続けた。

「止まれ」

「座標点定義…フエノソルダ數位集積経路内座標空間…座標00001から0004」

へ実行R…照射座標指定…指定数4…参照…座標00001から0004.

実行Rより0.9704秒…完了

ガン。屈強な男が拳銃を片手にしてデディゼンドの前に現れてそう言った一秒後にはもう撃ち殺していた。物陰に隠れていた者たちは一斉に彼の背後に躍り出そうとしていたまさにその瞬間、一人目と同時に殺された。同じ銃声で殺されていた。彼には加害者の場所

や殺すべき機会も分かっていた。

「定義破棄…座標0001から0004」

一撃複数の銃撃で終わった殺戮の後、デディゼンドは浅く溜息をついた。緩慢に下ろされたままの手にその銃は収まっていた。

全ての殺人で銃口を地面に向けたまま撃っていた。殺された者たちは狙われていたことすら知らなかった。

しかし、後ろを黙って歩いていた少女はもう知っているはずだった。彼女はいつしか彼の下向きの銃ばかりを見ていた。地面に黒い穴を見せる銃身を見つめていた。

「大丈夫か」

少女に聞いた。聞いていた。彼女の方に顔を向けていた。結局、それだけが彼女に尋ねられることだった。

「うん」

単純な返答。彼女は銃へと下ろしていた視線を緩慢に上げ、彼に焦点を合わせてから答えた。



言葉について考えた。彼の言葉について考えた。私の言葉について考えた。

行為について考えた。彼の行為について考えた。私の行為について考えた。

壊された街を二人で歩き、多くの死体と被害者を後ろに残してきた。彼は理解できない方法で犯罪者を殺し、被害者に街から逃げする方法を伝えてきた。どうしても助けられない被害者はそのままにしてきた。私は残されなかった。

「あなたは？」

そう聞いた。そうとしか聞けなかった。それくらいしか聞けることがなかった。その言葉しかなかった。

一瞬、彼は何故か辛そうな顔をした。それから表情を消した。表情を無くしてしまうその気持ちを彼女は見知っていた。小さい頃の私と同じだ、と彼女は思った。

「そうか、そうだったな」

彼は呻くように言った。

「すまない。どうかしていた」

広い車道から離れ、暗く細い瓦礫の迷路を進んだ。どんな道にも被害者や犯罪者が犇いていてもおかしくはなかった。しかし、彼が案内する道には不思議と瓦礫と死体だけが散乱していた。

死体。死者。およそ五十万の市民の内の誰か。十万以上の死はうず高い瓦礫の中に隠されていた。無数という名の不可算の死は砂塵

の向こうに隠されていた。

異臭は、感覚が麻痺していたから、濁った海の藻類だった。それに、破滅の時刻から続く、ゴゴウという鳴動。彼女をずっと揺らしていた。

少女はその頃になってやっと思い出し始めていた。記憶を取り戻しつつあった。都市は長時間の振動に襲われた時からずっと砂塵と鳴動に覆われていた。死んだ街は燃えず、死者たちをその砂礫の中に閉じ込めようとしていた。

「デディゼンドという」

だから彼に守られていると彼女は分かった。感じた。濛々と立ち込める建築物の成れの果ての海と陰に埋もれ、先程の殺戮の歩みの中よりも、一層。

彼は不特定多数の被害者の中から彼女を選んでいた。明確に。彼女と二人でいる時間が増えれば増えるほど、その分だけ彼が多くの被害者を助ける時間を失っていた。

今は、彼女だけが助けられていた。

「デディゼンド。だが、デイズでいい。そう呼んでくれ」

「うん」

「大丈夫か」

「うん」

言葉の少ない彼。少年。そして私。二人の子ども。どこまでも、あくまでも。

既にそのことを分かっていた。分かってしまった。あるいはそのように錯覚していた。発話を得意としないのは私も同じだと考えながら、先導する少年を見つめた。人を殺すか、助けるか、無視する人を。極めて稀に看取る人を。

「レイディア、イチカ」

「分かった」

彼女の名を聞き、彼は頷いた。

「お前は賢いな、レイディア」

名の確認でもあったのだろうか、名を呼ぶ許可の確認でもあったのだろうか、続けてそう言った。他意はなさそうだった。

少女、レイディアはうまく答えられず、僅かに目を伏せた。

それから、彼、デディゼンドは砂埃の充満する方向へ視線を転じる、というような動作をした。何かを躊躇しているような仕草だと思っ

「あの男に、あの場所に連れ去られる前に、何かされていたか？」
「ううん」

その問いには、レイディアは素早く答えられた。

「何も。歩いていたら後ろから掴まれて、そのまま連れて行かれただけ」

「そうか」

彼の言葉はそれで終わった。

けれど彼女にはまだ言っておかなければならないことがあった。それをその瞬間に思い出していた。

「連れて行かれる前に、外じゃ危ない、あいつらと一緒にならって独り言を言ってた。それと、途中で、背中から血を流して死んでいる

人がいた。それを見てひどく怖がってた」

「それはきつと、俺が殺した人間の一人だな」

彼は何事もなく頷き、肯定した。

嬉しいという気持ちだろうか、これは、と彼女は思った。歩きながらではなく、落ち着いて話せたらいいのと思うことは、と。

「あなたは二度も私を助けてくれた」

「蓋然的なこと、必然的な偶然だった」

そんな不自然な返答に表れていたのは無感動とは程遠い感情だった、とレイディアは独善的に感じた。これは嬉しいという気持ちだろうと彼女は思った。

なぜなら、言葉の足りない人ではあっても、語尾を、優しく発音していた。してくれていた。それはきちんとした発語だった。

「助けてくれて、ありがとう」

だから、自然に言えていた。

デディゼンドは立ち止まり、振り返ってきた。子どもが持てるものではない双眸を向けてきていた。初め、彼女に裾を引かれた時のように。

「ああ」

彼はほんの少し笑い、そう言った。子どもを相手にする大人のように。



レイディアは反応を返せないようだった。俯いて幼い謙虚さを示していた。デディゼンドはその仕草を理解して見逃さず、追求しないことで見逃した。

「すまない。初めから安全にこうして歩くべきだった」

「私は大丈夫」

「そうは見えない」

「分らなくなっているのかも」

「分からない？」

「うん。こんなことになって。今も、感覚がよく分からないような気がする。現実じゃないみたい」

「それは、そのままでもいい。大丈夫だ」

少女はくすくすと笑った。

「何がそんなにおかしいんだ？」

「あなたが、私が大丈夫って言った時にそうは見えないって言ったのに、すぐに大丈夫だって言ったから」

「ああ、そういえば、そうだな」

「これから」

「どうした？」

「ううん、なんでもない。ごめんなさい」

「いや、聞いていい。気になって当然だ。これからのことか？」

「うん」

「今は夕方の少し前だ。もう少し歩いたら休もう」

「暗くて、もう夜みたい」

「埃が舞っているから、ここまで光が届かないんだ」

「ここはどうなってしまうたんだろう。こんなことになるなんて、思ってもいなかった」

「誰もがそうだ。今は考えなくていい」

「うん」

「大丈夫か？」

「うん。大丈夫。まだ歩ける」

予告なく、彼は少女を背中に抱え上げた。

「え、と」

「いいから」



そう言われた途端、デディゼンドの背中は幼いと言ってもいい程の年齢のものになった。十二歳の自分とほとんど同じ身長の子がレイディアを背負う人だった。

もちろん、初めから彼はそうだった。子どもの姿で大人を殺していた。分かっていた。けれど、彼女はそのことの本当の意味を正しく認識できていなかった。どうしてこの人はこうなのか、ということ。彼女は混乱した。把握できなかった。

「どうして」

「聞きたいことはたくさんあるだろう。だが、今は静かに休んでいてくれ。お前は自分が思っている以上に疲労している」

大人の口調で彼は言った。子どもの声帯で。しかし無邪気さのない、低く褪せた声色が届いてきた。

少年の足取りは軽く、自分と同じくらいの体重をまるで負担に感じていないようだった。まるで大人のように、微塵の揺らぎもなく彼女を背負っていた。

レイディアは混乱した。混乱していた。あらゆることが考えられた。何も考えられなかった。

「うん」

結局、大人しく答えた。けれど、出来心で、その後すぐ、ほんの少し、反抗したくなった。

「お願い」

「何だ」

「あなたのしたいことをして。私は大丈夫だから」

「分かった。そうする」

自分の言いたいことをすぐに察してもらい、彼女は安堵した。そして、あれらの行いが彼のしたいことだという言い方を否定しなかったことに、もう一度安堵した。

「一つだけ、つまらない質問をしてもいい？」

「なんだ？」

「あなたは、天使か悪魔なの？」

「はは」

少年、デディゼンドは笑い声を零した。

定型句のような質問を聞いて怒らず、愉快に思っているようだった。

た。そうしながら、不意に空中に浮かび上がった。歩いては越えられない巨大な瓦礫の山を飛び越えた。彼女は突然重力を無くし、言葉を失った。

そんな超常的な現象についての説明はなく、彼はそのまま地面に着地して再び歩き始めた。背中の様子に気付いていないはずがなかった。

「そんな単純な生き物だったら、どれだけいいだろう」

そして、そのまま、呟くように答えた。

「人間だ。生い立ちは特殊だが、この地球の暦で十二年前の二月に地球上に生まれた人間で、天使でも悪魔でもない」

「私も。十二年前の一月生まれ」

「同い年だな」

「うん」

その頃にはもう、麻痺という安心が、絶対的な安堵があった。それは彼から伝わってくるように感じられた。闇が、闇が、闇が、彼の闇と闇と闇が。彼は決して天使ではなく、それと対立するものでもないと分かるほどの闇が。闇が、彼だった。分かっていたはずだった。分かるはずだった。十二歳の男の子の姿をした彼に最もふさわしい言葉を見つけた。

「死神の神さま？」

空気に溶かすように言葉にした。懐かしさを感じてしまうのは私が死に近づき過ぎているからかもしれないと思った。

そしていつしか闇の安堵に飲み込まれ、眠りの場所に落ちた。死神でも構わないと彼女は思った。

連れて行って、と願っていた。



レイディアが眠るように気を失った後、デディゼンドは救助と殺人を再開した。決して多くはないが少なくともない加害者たちを殺しながら歩いた。そして被害者や何もできないでいる被災者には「できるだけ早く西のゲートから逃げろ。そこからなら街から脱出できる。救援が来ている」と助言を繰り返した。片手を彼女に添え、もう一方の片手に空砲の死の銃を握り、今も高く聳える都市内壁を横目にして北を目指し続けた。一人一人殺しながら。一人一人助けながら。



小さな背と暗闇を覚えていた。無明の闇を見ていた。果てしないほどに長いまどろみの中、小さいけれど柔らかな揺れの中にいた。憶えていた。闇の中を進み続けているのを感じていた。時折闇を叩くような銃声が起こり、近くにいた誰かに同じ言葉が繰り返されるのを聞いていた。それは何度も何度も繰り返された。

果てしないほど繰り返される小さな揺れと大きな銃声と言葉を聞き、いつしか再び眠りに落ちていった。

雨の音。幕のような雨の音。サー、と地面の上に落ちる無数の雫。塵を洗っていた。砂の埃と血の煙を。

闇の眠りから目覚めたレイディアの隣にデディゼンドがいた。小さな椅子に座り、薄く目を開けた彼女を静かに見下ろしていた。

何も言わず、見つめていた。

意識が外に焦点を合わせる前に、しなければならぬことがあるような気がした。朦朧としながら思った。でなければ、破裂してしまふような感覚が、頭の根元の底に、硬くあった。

「気分はどうだ？」

それを彼がした。

聞くことで。傍にすることで。見守ることで。闇色の瞳をこの青い瞳に向けていた。それで、彼女は一度目の崩壊の危機から救われたのだった。

小さく頷いた。

彼は明らかに安堵した。だから、取り乱した方がよかったのかもしれない、と彼女は意地悪な思考をした。そう思い、自然と安心できた。



安堵した。しかし、それからどう話しかければいいのか分からな

かった。

切れ切れの表象は知覚の空漠の彼方へと消えていた。結局、何も考えていなかった。この子をどうすればいいのだろうと思った。

けれどレイディアはこの無言を気にしていないようだった。綺麗な毛布の下で安らいでいた。

その理由を考えた。考えたが答えは出ないまま、結局、そのままの無言をよしとした。するしかなかった。

その時、彼女が赤い服の袖を摘んだ。出会った時のこと、僅か半日前のことを思い出すには十分だった。



「デイズ」

「なんだ？」

初めて名を呼ばれても、デディゼンドは冷静に答えた。

「ここは、どこ？」

「街の北側の建物の中だ。倒壊する危険はない。少なくとも、この辺りで一番安全だ。当面必要なものもここで揃えられた」

「誰もいないの？」

「近くには誰もいない」

「どうして」

ふと生まれたその問いは、ある種の義務のようなものだったのだろうか。

しかし、その破滅性に気付かないまま、レイディアは自分の体を持ち上げた。そしてしばらくの時間を垣間見た。ぼんやりと、何時だろう、と。少女の表情の静寂を見る少年を見返して、本来ならどこかに人工の明かりが必要であることに気付いた。その時になってふと気付いた。けれど、見回しても二人の周囲には光源はなかった。それどころか、明るい場所は二人の周囲だけで、少し奥の方の雨が聞こえてくる辺り、恐らく窓が割れているところは真っ暗で何も見えなかった。自分のいるところがこれほど明るいのなら本当ならもっと遠くの、少なくとも窓の辺りまではものが薄明るく見えるはずだと思った。また、手元を見ると、自分の手の表も裏も光の中にあり、指の間に影がなく、どこにも、どこまでも、暗く黒い箇所がないままだった。それはとても不思議な光景だった。生まれて初めて知覚する、奇妙な光の現れ方だった。

破滅の縁で魔法を見ていた。それは魔法の光だった。

「カル、という、地球で言う魔法の力でこの光を生み出している」

掌の子細を見つめたままの少女に彼は言った。

「光という現象を周囲に限定的に生み出している。外からここを見ても暗闇があるだけだ」

そう言いながら、彼は胸元から小さな石を取り出してみせた。楕円形の、滑らかな光沢を持つ乳白色の石。トパーズのように柔らかく煌いていた。

「正確にはこの石が一定範囲の空气中にエネルギーの場を張り、同時に、そのエネルギーを外側に漏れないように光に変化させている。そのように作られている。灯火のエンテルと言う。ここでは最小限のカルしか使うことができないから、ここに来るにはこういう石が

必要だった」

「ここに？」

「ああ。俺は外からここに来た。だから、事態の推移はある程度把握している」

デディゼンドは魔法の石を仕舞い、時間を区切るように言った。辺りは変わらず明るかった。

「生き残った者は少ない」

限定的で普遍的な明かりを通して向こうの暗闇を見ていた。その言葉で少年へと視線を戻した。赤ん坊のように。

そして、思い出した。フラッシュバックのように。

あまりにも長い激震の後、ほとんど全ての建造物が倒壊した光景と、つい先程の自身の疑問と、地獄を。現実と疑問と地獄を。

「この建物は奇跡的に倒壊を免れたが、地上部分には誰もいない。生存者は。倒壊に巻き込まれなかった市民のほとんどもショック死している。揺れと共に市民を襲った、目に見えない衝撃が生き残れるはずだった人間の多くを殺したようだ。その衝撃のせいで、数少ない生存者も正常な判断を取りにくくなっている」

正午過ぎのことだった。その時まで、私は公園で何もせずに時間を過ごしていた。公園にいた人たちの半数以上が激震の中で一斉に痙攣して死んでしまったのを思い出した。そんな悪夢から逃れるために走り、街の中をさ迷い歩いたことを思い出した。

崩壊した建物と灰色の光景。この目と耳と鼻と皮膚を侵したむごたらしいもの。生き残った者たちの残虐と被虐。

血と骨と内臓と糞便と目玉。

家族を失った現実。

そして犯罪者たちの叫びや笑いを思い出した。

レイディアの場合は、心が弾けて壊れそうになった。弾けて壊れかけた。

必死に耐えた。胸の前で強く拳を固め、背を曲げて俯いた。体中から温度を奪う汗が溢れ出した。体が小刻みに震えた。逆流する胃酸のような涎が止まらなかった。

「どうか」

必死で耐えた。思った言葉がそのまま口から洩れ出た。

彼女は死の恐怖を知った。恐怖した。彼女はきっと死んでいた。きっとレイプされて殺されていた。

それはわずか数分の危機。自我の瓦解に耐え切る現実。どうか。

「どうか」

それはただ耐えることによって。それが彼女の強さだった。強さとなった。強さが示された。そして彼女も示された。

心の傷は深く開いたまま、体は崩れ落ちてしまうほど疲弊したまま、もう普通ではなくなってしまったと彼女は分かった。朦朧としながら、私は死ぬまですつとこのままだと理解した。女性たちが犯されていたあの光景が思い出された。無理やり唇をねぶられたこと

も思い出してしまった。この記憶、この喪失とこの汚れはいつまでもなくならないと知った。それもまた頭を垂らせ、存外に強く心を蝕もうとするものだった。見えるものは絶望という、底なしの泥沼に埋没させる観念だった。耐え続けなければならなかった。いつまでも。どこまでも。この地上こそ真暗闇の奈落だった。今のこの時は、いつまでもどこまでも流れ続けているようだった。そこは無に至る空虚の口腔、死を望遠する断崖だった。だから今まで以上に悪寒が体中を震わせた。何も分かっていなかった。初めて分かった。このまま、独りで、普通でないまま生き続けなければならないことこそ悪夢だった。けれど死ねないということが絶望だった。掌と頭にそれが滲んだ。死んでしまえ、という声が生まれた。耐え続けた。きつく目を閉じ、頭を垂らし、喘いだ。デディゼンドが見守っていた。黒い髪と瞳の少年が。気付き、思い出し、目を開け、彼を見た。恐怖と、恐怖と、恐怖が、彼に沈み込んだ。

「あ」

レイディアは声を洩らした。それはひどくかすれていた。闇色の瞳。空漠として不確かな光明。幼い少年の体をしたデディゼンド。

さらにもう一度助けられたのはその時だった。彼女は無罰で無償の指向性と接触した。

そして、いつの間にか、本当に耐え切っていた。

「もう大丈夫だ」

彼は言った。

「ゆっくり息を。横になっていれば大丈夫だ」

「うん」

死んでしまいそうな声が出た。言われた通りにゆっくりと息をした。横になったまま目を閉じた。

顔がもう一度拭われたのが分かった。

ゆっくりと息をついた。それを繰り返した。そうしていると、だんだんと、疲労が下の方へと沈んでいった。

しかし、もう普通ではなくなってしまったと、朦朧としながら理解していた。私はもう戻れない、と。それもまた頭を垂らせ、存外に強く心を蝕もうとするものだった。絶望という、底なしの泥沼に埋没させる観念だった。それでも、でも、と思った。

「ありがとう」

倦怠に沈みながら、呼吸を落ち着かせながら、額に滲む汗を拭ってくれる少年を見ながら、でも、でも、と心の中で繰り返し、彼と今の自分を肯定できる言葉を探し続けた。



次に、生理的な苦しみが表出した。水場は同じ階の端にあり、潰れてはいなかったが、もちろん水は流れなかった。デディゼンドは恒体の光が個室の中まで届くところで待った。夜食は彼が飲食店の中から取ってきておいた果物と飲料水だった。レイディアは林檎一つを長い時間をかけて食べた。体の汚れについては、湿らせたタオルで髪や手足を拭いて済ませることにした。

最後まで、彼女は泣き言一つ言わなかった。

「寝付けないのか？」

「うん」

沈黙が湧き、そのまま流れ続けた。

「あなたは、寝ないの？」

「ああ」

彼は沈黙を尊んでいるわけではなく、適当な言葉を付け加えてみることにした。

「お前が眠ったら寝る」

彼女は頷かなかった。毛布から頭を覗かせ、無言で彼を見ていた。

「なんだ」

「ううん、なんでもない」

落ちつかないに身じろぎして視線を外した。瞼を閉じることで。

「大丈夫だ。ここは安全だ」

「うん」

「夜が明けるまで、何も考えずに横になっていたらいいい」
「うん」

今までと比べると少し遅い返事だった。少し寂しそうな声だ、と彼は思ってしまった。即座に自惚れと欲を殺した。

何かを言おうとして目を開けてみると、彼女はこれから穏やかに

息をついて眠りの中に入るところだった。

程なくして彼女は寝入った。一時間後の夜明けまで、彼も座ったまま少しだけ眠った。

夜が明けた。

「気分はどうだ」

「大丈夫」

少女にとって必要なことと、果物と水だけの朝食を終えた。デゼンドは椅子に座って待っていた。昨夜と同じように、物を口に運ぶことすらなかった。

それから、レイディアはデゼンドの言葉と動作を大人しく待っていた。やはり賢い子だ、と彼は思った。

「何か、聞きたいことはあるか？」

そう言ってから、これはひどい言い方だったろうか、と彼は思い直した。こんな時、こんな人間に一体何を聞けばいいというのか。

「これからのこと」

「まず、今日中にこの街を出る」

少女はそれでも聞いてきた。その意志に応えなければならなかった。ならばと、伝えるべき言葉は自然と浮かび上がった。

「そうだな、昨日は何も言っていなかったが、基本的に、俺が何も言わない時でも安全だ。多少離れていても。姿が見えなくても」

先程、彼女が一人で水場に行く時に何度も不安そうに振り返っていたことを思い出し、先に言っておくべきだったか、と思いながら説明を続けた。

「見えない目で、普通とは違う見え方で周りを見ている。互いに姿を直接見られなくなっても、俺が特に何も言わなくても、危険はない」

そして、これから少しずつ彼女に話さなくてはならないことと、彼女が聞いてくるであろうことを考え、気分を憂鬱にした。

「これからも話さなくてはならないことが、たくさんある。聞きたいことがあったら、いつでも聞いてくれていい」

罅割れているであろう少女の心の内を慮り、地獄と地獄と地獄のことを思い、彼女を取り巻く事象と彼女の認識のバランスについて考えた。

俺は今、笑みをつくられているだろうか、と考えながら。優しく言えているだろうか、と考えながら。

「うん」

その声。彼の心配を覆すように、彼女は今までで一番力強く答えた。

彼は感心した。そのことに。このことに。それらのことに。これらのことに。レイディアという、一人の人間のかたちに。

「あなたはどんなことができるの？」

数十体の死体の散らばる薄暗いフロアを歩いていた。

「光の速さでの移動以外なら、ほとんど何でも。この手では動かせないものを透明な空間のエネルギーや運動エネルギーで動かすことができる。この目や耳では感じられないものを透明な感覚で感じることもできる。空気から水や硝子を作り、火や光を生む。機械のように正確に速く動き、現象を数的に計算できる。体を頑丈することも、体に大きな力を生むことも。そして、ものを完全に破壊することもできる」

「私の心も聞こえるの？」

それはいい質問だと思った。

「人の心は聞かないようにしている。しかし、そもそも人の心は簡単に聞けるものじゃない。限りなく完全な精度で観測しない限り、聞こえるのは宇宙の雑音だけだ」

正直に答えた。

「レイディアは今、俺を何だと思っている？」

今度は彼の方がふと気になったことを聞いた。

二人は数体の死体の転がる薄暗い階段を降りていた。

「違う世界から来た、死神の神さま」

なるほど、と彼は思った。

棚の商品を視線で物色しながら伝えた。

「街から出た後も安全は保証できる。メカナという世界の、イミナミアという場所に行く」

レイディアは彼の真似をするように、まるでそのような類の物を初めて見るように、左右に陳列されている女子用の衣服に視線を向けていた。

それらのどれもが今着ている服よりも比較的良好な状態なものだった。釦の千切れかけているそれは埃と皺ばかりになっていた。あの男の血にも汚れていた。

「選ばないのか？」

少女の無言に対し、振り返って聞いた。

「俺にはこういうのは分からない。好きなものを選べばいい」

このフロアに来る前、同じ説明がされていた。もう平和な社会の規則はどこにもないと理解しているだろう、と判断していた。

彼女はここに来てから急に感情の波を小さくしていた。沈んでいた。異なる世界についての説明を中止し、歩行を止めなければならぬほどに歩調が鈍っていた。

「どうした」

「ううん」

ううん、か、と心の中でその返答を繰り返した。それは初めて示した明確な否定の言葉だった。その理由を考えたが、分からなかった。いろいろなことが考えられたが、どれもが正しくどれもが間違いであるような気がした。

「こういう服は、嫌なのか？」

その後の彼女の視線を追った。男子が身に付けるような衣服の陳列棚に辿り着いた。床に折り重なっている二体の死体を隠すように皮製のズボンが整然と垂れていた。

こんなことでも少女は性について追い詰められていた。

「ん、確かに、こういう服は、実用的ではないな」

自由に体を動かせる男子の衣服とは違い、この場の女子の衣服はおよそ着飾るためのものだった。彼女が狙われた原因はこのような可愛らしさにあった、と考えるのは容易だった。事実、彼女の着ている服は質素だが可愛らしいものだった。都市内の学校の制服だろうか。

彼女の方は、尋ねられ、目を落とし、汚れたスカートに手を当てていた。

十二歳の女子。略取と強姦未遂の被害者。最悪の結果は免れたが、精神的にはほとんど手遅れと言ってもいい。殺人と強姦、夥しい暴力の目撃者。あまりに多くの犯罪を見た。男と女の裸と性器、暴力

と血と精液、変形した無数の死体。加害者の怒号と被害者の悲鳴、体液と糞便の悪臭に曝された。更には世界の終わりの生存者。想像もできない圧倒的な破壊、日常と常識の崩壊を体験した。激震が始まった時刻には学校にいたのか？ 彼女が生き残った理由は不明。家族や友人の生存は絶望的。略取されるまでの行動も不明。近しい者たちの遺体を後ろに残してきたかもしれない。絶望と地獄。そして今、一人きりで俺という。一日が経たない内に、彼女は何度でも試されてきた。そして、これから試され続けるだろう。

「どうする？」

考えれば考えるほど彼女が非常に危うい精神状態にあると理解できた。慎重に綱渡りをしていたつもりだったが、朝の会話と笑顔はどれほど危ういものだった？

十二歳の女子。略取と強姦未遂の被害者。殺人と強姦、夥しい暴力の目撃者。世界の終わりの生存者。絶望と地獄。

どうしようもなかった。どうしようもなくなり、なぜかあの女性たちを思い出した。道端で動けなくなっていた子どもたちを思い出した。殴られて震えていた女性たちを思い出した。心を殺された子どもたちの体と表情を思い出した。撃ち殺した男たちの下にいた女性たちの体と表情を思い出した。それらの表象を目の前の幼い少女に重ね合わせた。思わず、重ね合わせてしまった。

俺にも汚されたも同然だ、と思い、思考も沈んだ。

この世が地獄だと知っている。この世が地獄だと知っている。この世が地獄だと知っている。何度繰り返せばいい？

沈黙していた。二人の間の沈黙は突如として取り繕えないものになっていた。どちらともが何も言えないままだった。

やがて静寂に気付き、もう手遅れか、と仕方なく思考を浮かび上げさせた。沈黙したまま考えた。弱い少女は俯いたままだった。

そう、さらに絶望的な現実、ほとんど全て失ったとはいえ、そ

それでも彼女は被害者の一人に過ぎない、ということだった。

それがどこまでも救われない現実だった。失ったのは彼女だけではなかった。むしろ彼女は無事だった。大多数の市民は瞬く間に瓦礫に埋まり、男は殺され、女はレイプされた。

生き残ってしまった、という心の叫びは誰にも聞き届けられない嘆きだった。彼女一人の地獄は普通の地獄に埋もれていた。

年齢は十二歳。孤立した被害者。自我が保たない。

それがこれからも救われない現実だった。彼女がどれほど強くとも、その自我、精神はもう既に地球の静かな安寧から逸脱してしまっているはずだった。もうどうしようもなかった。

できるだけ早く、安全な場所で休めるようにするしかなかった。可愛らしい服の陳列の中で、少女に被さる埃の膜が異質だった。これはどういう状況だ、と思った。ああ俺のせいだったか、と気付いた。

「レイディア」

小さく言った。

「着たい服を取ってきていい。何でも」



今度こそ、私の心は壊れようとしている。レイディアは思った。でなければ、こんなことを考えるのはおかしい。こんなことを言うおうとするのは。

顔を上げた。彼の表情は寂しげで深刻なものだった。それを自分に照らし合わせると思わず笑みが生まれそうになった。

いいんだ。決める。決めよう。

決めた。

その瞬間、確かに彼女の心の大事な一部分が壊れた。けれど、あまり苦しくなかった。むしろ心が軽くなった。

「ううん。大丈夫。ここの服でいい」

昨日の夜に続き、ああもう私は、と思ったが、代わりに心が軽くなった。心の他の部分が死なずにすんだ。そして、受け入れる、ということを知った。

きっと、無意識の内に、その時点で、自分が少女であることを私は理解していた。

壊れたのは倫理。不確かなものとはいえ、私は一つ目の自由を得た。



彼女は強い、とデディゼンドは思った。泣き言を言わない彼女の強さを評価した。一方で、大丈夫だろうか、と不安になった。

微笑みと返答内容の理由が分からなかった。不謹慎にも心を動かされた。彼女の心のあり方に興味を持った。

「いいのか？」

だからそう聞いた。なぜだ、という言葉を飲み込んだ。

なぜなら、彼女は震えていた。彼は全身を戦かせるそのような立ち姿を不思議に思った。

「うん」

彼女は震えたまま、微笑んだまま答えた。確かな正気の光を青い瞳に湛えて。

その時、彼は恋に落ちた。

その後、早速服選びが始まった。それまでの塞ぎ込みようがまるで嘘だったかのように、レイディアは陳列された色とりどりの服を足取り早く品定めしていった。

結局選んだ服は三着で、全て簡素なワンピースだった。彼女なりの考えが浮かんだのか、空色、薄黄色、白色の生地綺麗な衣服を慎重に手に取った。他の場所からも下着や靴下等の必要な衣類が選び取られた。

デディゼンドはその合間に旅行鞆を探し出していた。一つだけ持って来ていた小さな無色の恒体ロミクァ エンテルを許容範囲内の重さの鞆の中に入れ、風船と同じように常に宙に浮かぶようにした。

「ものを入れすぎなければ、この重さのままだ」

「ありがとう」

簡単な説明を聞き、彼女は素直に驚き、喜んだ。

今度は地階に行き、食料品を探し回る彼女の後ろをついて回らなければならなかった。死体の他、実はその場所には数名の生存者が存在していた。

皆が男で、食料を独占するために薄暗い地下に居座っているようだった。あるいは絶望したまま暗闇から動けないでいた。デディゼンドは灯火の恒体エンテルを灯していたが、子どもの足音に気付いたのだろう、まず一人の男が背後から彼女の方に襲い掛かろうとした。

へ実行R…照射座標指定…指定数1…参照…座標0001.
実行Rより0.9704秒…完了

ガン。

一瞬後、彼女と多くの男たちが硬い銃声から真新しい死体を作られた光景を目撃し、男たちだけが目を剥いて彼から離れた。ひ、という短い声を出し、暗闇に逃げ込んだ。目撃はしなかった男たちも不可解な事態を察し、忌み嫌うように二つの足音から逃げ惑った。それからレイディアは意欲的に動いた。死体や男たちが視界に入っていないかのように怖がらずに辺りを見回し、歩き回った。彼は黙って一緒に行動した。

彼はそのことについて言語化しようかと思ったが、多くは要らないと言っておくだけに留めた。

暗闇と恐怖に囚われた男たちには何も言わなかった。レイディアという少女を選んだ彼の、それが善悪の境界となった。

雨が降り始めたのは旅行鞆を一杯にして出入り口前のホールに立った時だった。

「傘がいるな」

デディゼンドは呟き、レイディアをその場に残し、階段へと戻っていった。

彼女は少し不安そうな表情をしたが、おそらくはすぐに彼の言葉を思い出したのだろう、ホールのソファに座って大人しく待つことしたようだった。

一人になってから、彼はあの少女のことを考えた。恋に落ちた瞬間を思い出した。彼女の体温と言葉と仕草を思い出した。今までの自分を思い出した。どの自分だ？

彼は苦笑した。突如として彼女のことが好きになった後も彼は前と変わらず冷静だった、筈だった。彼女に会う前と、会った後と、恋に落ちた後の三つの自分は同じような言動を取っていた、と自己評価した。これからも同じように振舞えるだろう、とも。

だから、胸の内に秘めていよう、と決意した。簡単に。あまりに簡単に。簡単すぎるほどに。

十二歳の少女。孤立した被害者。自我が保たない。

少女レイディアについて繰り返し考えた。そしてどうしても、彼女の強さと美しさが繰り返し思い出された。

彼女が汚されようとしていたことも思い出された。その記憶は存外に彼の心を蝕んだ。彼は内心で驚いていた。慎重に行動しながらも驚きを処理し切れないままだった。

冷静に対処しよう、と意識して心を定めた。

外は雨と瓦礫の砂漠だった。

二人はその目前、一夜を過ごした建物の外に立っていた。小雨が三步向こうの外の世界に降り注いでいた。雨は一時止み、つい数十秒前から再び降り出したばかりだった。天候も狂い始めていた。

瓦礫は簡単には失えない石の渴きをその表面に残していた。レイ

ディアの手には空中の旅行鞆に結んだ紐が、デディゼンドの手には銃と大人用の傘があった。

「体を洗わないといけないな」

雨の方を見て、彼は言った。

「この雨で体を洗うといい。これからメカナに着くまで、体を洗える機会は滅多に無い。この雨は丁度よかった。拭いただけでは気持ち悪いだろう。服も着替えたらいい」

彼女は驚いていた。

「雨で体を洗うのは初めてか？」

「うん」

それもそうか、と彼は思った。地球で普通の生活をしていれば、そんなことをする機会は一度も無いはずだった。

「どうしても嫌だったら、構わないが」

無論、彼女の真新しい性的な心的外傷を忘れていたわけではなかった。誰にも見られなくとも屋外で裸になる状況は心の傷を刺激しかねないと分かっていた。

ただ、レイディアの強さを考慮に入れた、提案だった。

「ううん、あなたの言うとおりにする」

しかし、少女は明らかに無理をしていた。
冷静であるはずの人殺しの非日常的な言動が幼い被害者を揺さぶ

っていた。俺は愚かだ。彼は過ちを認め、後悔した。

「その」

「ああ、すまない。ホールの見えないところにいる」

そして、好きだからだ、と浮かんできた言葉を飲み込んだ。

「誰も近づけないようにしているから大丈夫だ。それでも、何かあったら呼んでくれ。終わった時も。小さな声でも聞こえる」

考え事をしていたのを気付かれたな、と思いながら。



瓦礫の海の雨に臨み、そっと釦に手をかけた。

気持ち落ち着かせた。思われることはなかった。何も考えずにいられた。

もう使えなくなる自分の服に手を置き、透かして自分の体温を感じ、残念に思い、このままここで脱ぐのは勿体ないと思い、服を着たまま雨の下に歩み出た。

薄明るい空を仰ぎ見た。思われることはなかった。何も考えずにいられた。

彼の言葉を思い出し、彼を信じ、服を脱いだ。靴も下着も。全て海底の嶺に捧げた。

雨が冷たかった。生まれたままの姿になり、海の底に沈み、水が冷たいと感じた。

自分の裸を見下ろし、女子であることを確かめた。

彼をあまり待たせてはいけなかった。そう考えると、彼に助けられたことが思い出された。思い出してしまうのはどうしようもないことだった。

薄明るい空を仰ぎ見た。思われることがあった。睫に雫を作るこの雨について。

全身を雫が洗うこの時、その現象について考えた。この時、その現実について。冷たい雨に打たれる、今ここ、について。今ここで冷たい雨に打たれる、私、について。

つまり、唯一つ、ということ。私は留め^とられている、ということ。おかしくなるのは仕方がなかった。誰も彼もが。どうしようもなかった。誰も彼もが。泣きたくなかった。泣こう、と思った。泣けなかった。その心は失われていた。そうだった、と思い出した。そして、彼のことを想いながら小さな体を雨に任せた。



柱の影に背を預け、彼は少女のことを考えていた。けれど新しい言葉は何も浮かばなかった。考えているとは言えなかった。思い出しているだけだった。

小さな声で呼ばれた時、レイディアはホールの一步向こうの外で静かにデディゼンドを待っていた。新しいワンピースを着ていた。清らかな白。柔らかく灰色を切り取って薄闇の中に綺麗に浮かび上がっていた。

「レイディア」

呼びかけに応えた時まで動揺が続いていた。

少女は涼やかに見返していた。デディゼンドは彼女の意志の指向性を読み取れた。その瞳は青く澄んでいた。青く澄んだ瞳で彼を見つめていた。

そして、委ねる、という意志を表わしていた。そう思われた。伝わってくるのを感じた。

彼は体を熱くした。

「お前は馬鹿だ」

思わず言っていた。

「うん」

素直に彼女は答えてきた。動揺することもなく、自然に。

「うん」

言葉は繰り返された。言外の意味が込められて。決意を読み取ってくれたことへの感謝も込められているように、浸潤に。

デディゼンドはレイディアの透き通るような淡い金色の髪に気付いた。雨の涼気に浸る体にも。認識した。手を伸ばして触れたいと思った。

「それは幼稚な諦めだ」

しかし欲を抑え込み、相手の行いを断じた。客観した。客観する言葉を先に吐き出し、主観を言葉にしなかった。

決意を受け止めない、という表明にも等しかった。お前の決意を

受け止めない、という拒絶だった。

「うん」

しかし、言葉は繰り返された。彼は驚いた。次に少し呆れた。苦笑した。

「うん、しか言えないのか？」

それには、彼女は微笑みで応えた。

彼は笑った。彼は笑った。彼女の年齢通りの幼稚さに苦笑し、年齢に似合わない細やかさに可笑しくなった。哀れだとは思いたくなかった。

「私を助けてくれてありがとう。心からあなたに感謝しています」

「俺は人殺しだ。何百も、何千も殺してきた」

「私を助けてくれました」

「人殺しは人殺しだ。どうしようもない人間だ」

「それでも、何度も私を助けてくれました」

「おまえを殺すか、捨てるか、するかもしれない」

「構いません。私はあなたに命を預けます」

そうして、一言ずつ、丁寧に言った。

「命を返されるまで。あなたに殺されるか、捨てられることも、受け入れます」

言外の拒絶をものともせず、少女は正しく言葉を失えた。終えていた。全て言えた、というような佇まいになった。

二人は長い間見つめあった。

「分かった」

彼は息をつき、幼稚な現実を肯定した。肯定した途端、それらは全て本当のことになった。その現実を受け止めた。

彼女は喜びを示した。ただ、それは幼い謙虚さではなく、沈黙したまま運命を享受する、真摯な愚者の謙虚さで示された。



二人は一本の大きな藍色の傘を差して小雨の中を歩いていた。傘は彼が持っていた。彼女は旅行鞆に括り付けた紐を引いて彼について歩いていた。紐の先の鞆は時々瓦礫に当たって風船のように跳ねていた。

衝突の音、小雨の音、そして二人が歩く小さな音がしていた。実際には、彼の歩く音はほとんどなく、彼女の歩く音もささやかなものだった。

彼の雨の傍のもう一方の手にはあの拳銃が握られていた。彼女の彼の傍のもう一方の手は二人の間に静かに下ろされていた。

彼の肩は少し濡れていた。彼女の肩はほとんど濡れていなかった。傘の外の鞆は空中で全身を雨に濡らされていた。けれどそれを彼女が気にしている様子はなかった。なにより彼女は時々彼を見ていた。彼の横顔を。黒く透明な瞳を。

彼はきっとその視線に気付いていた。けれど視線の意味を問うことはなかった。黙って前を向いて歩き続けていた。その透徹な表情から内心を窺うことはできなかった。

周りには誰もいないようだった。死んだ者しかいなかった。二人
さえもないようだった。

小雨。都市の廃墟。瓦礫の山。見える数万の死と見えない数十万
の死。

藍色の傘。軽い鞆。

二人の音が、していた。

雨の匂いも、していた。

それから、雨の中、デディゼンドは昨日と同じようにレイディア
を連れて瓦礫の海を北上した。歩いては通れない場所は空中に浮き
上がって飛び越えた。その時だけは彼女の手を握ってきて離れない
ようにした。

彼は自由に空中を移動できるようだった。そして地上も自由に歩き、
死者の傍らを通り過ぎ、ガン、道程の中で犯罪者を殺し、被害者を
助け、昨日と同じ言葉を繰り返した。ただし、最後に「できるだけ
急げ。まだ間に合う」という言葉を付け加えていた。

一夜が過ぎ、雨も降っていたので犯罪の多くは屋内で行われてい
た。彼は無造作に入っていた。犯罪者たちは皆常軌を逸し、一般
市民とは思えない凶悪な形相になっていた。集団で犯罪が行われて
いたことも多かったが、いつも同じように彼は構わず速やかに行動
した。ガン。

どうしても動けない大人と動いただけで死んでしまう者には静か
な視線を注ぐだけに留めた。稀に膝を屈めて最期を看取ることもあ
った。彼の言葉を聞いた者は皆急いで西へと向かった。彼女は黙っ
て彼と共に歩き続け、夥しい殺人と惨たらしい犯罪を見続けた。



間も無く夕刻を迎える頃に街の外れに辿り着いた。雨は小雨のまま降り続けていた。

震災の被害はここまでも無差別に及んでいた。瓦礫の山の向こうに見える内壁が斑に黒く焦げ、都市を覆う天蓋下部が大きく瓦解している箇所もあった。砕けた巨大なパネルが雨滴の隅に埋もれていた。

「ここで少し休もう」

道でなくなった道の数時間の徒歩がレイディアを困憊させているのは明らかだった。頷くこともできないほどに疲労していた。途中、彼女が弱音を吐いた時にはデディゼンドはすぐにでも休憩を取るつもりだった。しかし、彼女は懸命に足を動かし続けていた。

奇跡的に倒壊を免れた集合住宅の、死体の無い居間へと彼女を導いた。暗い陰の中、再び灯火の恒体^{エンテル}を灯すと、彼女はすぐに姿勢を不確かにした。

「あとは夜までに街を出ればいいだけだ。ゆっくり休んでいい」

ただ、休息を許す単純に流れる時間が必要とされた。

その帰結として、住居を出る時、レイディアが不意に廊下の途中の扉を開けてしまった。その無造作な行いにはデディゼンドですら虚を突かれた。もう、更なる現実を受け止めるしかなかった。

その居住空間は軽薄な合成素材で整えられていた。床も壁も天井も、窓も戸棚も。踏み歩いた絨毯も身を任せていたソファも淡白にくすんでいた。今は消えている室内の照明も淡白に光るだろう、と彼は思った。改めて見えるものを重要な表象として意識して記憶に留めた。

それから、室内の中央に並ぶ、二台のカプセル状の特殊なベッドに横たわる死者たちを見遣った。

この家の住人たちが密閉された透明なケースの中で横たわったまま絶命していた。この都市の市民の半数以上が、数十万人もの人間がこのような状態のまま即死し、その大半が崩落した建物の瓦礫に埋まっていることを彼は知っていた。

おそらく、彼女も。

おそらく、彼女の家族も。

レイディアはここまでだった。よく頑張った、と心の中で誉めながら、動かない小さな体をそっと背に負い、部屋を出た。

印象に残っていなかった廊下も玄関も灰の上に小さな足跡を残して背後に消えた。市民たちを小さな現実の中の仮想現実で生かしていた硬い揺り籠の成れの果てを見上げた。外観を留めただけの脆い箱。箱の中の箱は死者だけを乗せていた。

デディゼンドは一人きりの生者を背負って死者と瓦礫の隘路を進んだ。

小さな世界の果ては目前まで迫っていた。



結局、雨は小雨のままだった。天蓋の多機能なパネルから散布される水滴。狂ったように満遍なく都市に降り注いでいた。パネルには太陽を覗かせる青空の映像も黒い雨雲の塊の映像もなく、薄いベールのような灰色だけが全天に渡って表示され続けていた。それは雲の映像ですらなかった。

風は穏やかだった。雨が穏やかだったように。それもまた天蓋から吹き下りてくる人工の空気の流れだった。この都市は閉ざされていた。空も地平も。十二年前にそのように建造されていた。

宗教的にも経済的にも孤立する孤高の実験都市。だからこの街への速やかな救援は期待できなかった。都市内の実働の警察組織や消防機関は呆気なく瓦解したに違いなかった。あの激震は街の両方の世界を壊すものだった。

気付いていた。物質的にはもちろん、電磁的にもこの街の全ては瓦解していた。携帯端末も形を保った街角の映像機器もあの空のようになって死んでいた。だからここまで都市内のあらゆる機能が麻痺し、数少ない生き残りの一般市民は簡単に混乱して逃げ場を失い、本能を剥き出しにした生物学的強者に恐怖し、絶望し、死んでいった。それがこの街の結末になった。

そのような世界の中、何人かの市民たちが硬く閉ざされたままの北のゲートの下で小さく蹲っているのが見えた。子どもと大人が互いに身を寄せ合い、震え、雫を零し、うな垂れ、様々なものを失っていた。

それは一つの静かな果てだった。

その場所で終えていた。そこで終わっていた。彼らの希望は。絶望も。後は苦痛と静けさだけが残っていた。

命か時の終わりを待っていた。
本来なら、私もあの中の一人だった。使者を待っていただろう。



ゲートに背中を押し付けて俯いていた青年が最初に二人に気付いた。呆然としていた。もしくは初めから呆然としたまま、突然現れた二人を見つけた。

デディゼンドは片手で無音の銃を構えた。傘は傍らの空中に浮かばせた。

「座標点定義…フエノソルダ數位集積経路内座標空間…座標0001」

へ実行R…照射座標指定…指定数一…参照…座標0001.
実行Rより0.9704秒…完了

一万分の一秒単位で指定完了と同時に右手の引き金を引いた。
絶対破壊の弾丸が真球宇宙より飛来。当該球面三次元宇宙の指定座標に正確に着弾。解放された真空化エネルギーがプランク秒単位で直径4・200メートルの範囲を球形に真空化。その内部にある全ての物質とエネルギーを消滅させる。

結果、物質は素粒子すら残さず完全に破壊された。質量とエネルギーが完全に零となった。一時的には空間の揺らぎすら停止させる高次空間の圧力が働いた。

そして、最低限の外積カオンの魔法系カルを働かせ、真空への空気の流入の影響を緩和。

「定義破棄…座標0001」

よって、形而下、彼が銃の引き金を引いた直後、ただ、閉ざされていた扉に大きな風穴が開いた。

ごくわずかな空気の流れと、ガン、という硬い衝撃の残滓だけがその場の彼らを取り巻いたものだった。



ゲートの壁面が円形に消滅する瞬間を見ていた。厚い隔壁に直径数メートルもの大きな穴が開き、文字通り一瞬で外への出口が作られた。

デディゼンドの行いだと分かった。

彼は銃を撃った。これまで人にしてきたように扉にも空洞を作った。彼は今行ったように犯罪者の体に穴を作ってきた。恐らく、正確に心臓を狙って。

銃は普遍的な効果を持っている。レイディアは思い至り、少しだけ理解し、感嘆した。

横で物音がした。青年が驚愕の表情で立ち上がった。壁に穴が開く瞬間を見てしまったんだろうと他人事のように彼女は思った。青年が立ち上がったままにいるせいで、周りにいた市民の何人かが緩慢に青年を見上げ始めた。次に、その視線の向く先へと視線を移し、そして子どもを背負う子どもと扉の大きな空洞に気付いていた。空中に浮かぶ傘と鞆にも。

彼らは驚き、言葉を失い、まだ下を向く者に声をかけていった。

「おい」

「見ろ」

「あれを」

次々と持ち上げられていく顔。視線。

動揺と、恐怖。

それは、信じられないものを見てしまった者の、現実を喪失することへの恐れ。現実を代償として未来を得てしまいつつある一六個の瞳。

彼はといえば、今までと同じように静かに被害者を見ているようだった。逃げろ、という、これまで何度も繰り返されてきた言葉はまだなかった。

レイディアはいつもより少し長く続く沈黙を背中越しに受け取っていた。無力に。彼らに先立って現実を失った者として、否、自ら現実を渡し、現実を知った者として、無力に。



八人いた。五歳位の男児、十代後半位の少年と少女、二十代前半位の青年、三十代半ばの男性、四十代位の女性、五十代位の男性と女性。閉ざされていたゲートで希望を失い、身を寄せ合って震えていた。水滴と血と涙を流し。災害前は無関係だっただろう人間たちのそれぞれが小さまざまな怪我を負い、疲弊し、その場所から動けないでいた。外に通じるはずのなかった扉の傍から。

それらに汚された彼ら。人間たち。もう、それら、としか言いた

くないもの。繰り返したくない言葉。絶望とか、悪夢とか、地獄とか、もう言い飽きたもの。もういい。この世が地獄だと知っている。この世が地獄だと知っている。この世が地獄だと知っている。何度繰り返せばいい？ この世が地獄だと知っている。この世が地獄だと知っている。この世が地獄だと知っている。この世が地獄だと知っている。

しかし、俺にとっては地獄ではない。知っているだけだ。彼らが地獄にいることを。これが地獄だと。見聞きしているだけだ。体験しているわけではない。俺は地獄を通過しているだけ。傷ついた彼らを見下ろしている。だから感情移入はしない。できない。同情もしない。できない。ほとんど何も感じない。少年の頭が弾けても、少女が犯されても、そうか、としか感じない。被害者が増えた、としか感想を持たない。

無関係だから。無関係だから、どうでもいい。どうでも。どこでも。誰でも。いつでも。何でも。どのようにでも。心が痛むが、それだけだ。本当はどうでもいい。そもそも、どこにある。どこにもない。どこもない。他者を殺せる地獄はどこにもない。俺を殺せる他者の地獄はどこにもない。

そして、さらに絶望的な現実とは、ほとんど全て失ったとはいえ、それでも彼らは単なる被害者の一部に過ぎないということだった。それがどこまでも救われない現実だった。失ったのは彼らだけではなかった。むしろ彼らは無事だった。多くの男は殺され、女はレイプされた。生き残ってしまった、という心の叫びは誰にも聞き届けられない嘆きだった。彼らの地獄は普通の地獄に埋もれていた。

だから、彼らの外観には興味がない。特徴にも。物事の外観や特徴には興味がない。形容、修飾は不可欠なものではなく、単にわからしいもの。ここまで来れば。果てでは。些事は要らず、状態が分かりさえすればいい。人か、物か。生きているか、死んでいるか。疎通が可能か、不可能か。関与すべきか、否か。

「ここから外に行ける。ついて来い」

委ねるか、否か。



隔壁内、非常灯の点いた長い連絡通路を進み、デディゼンドが何度も銃を撃って多くの隔壁に穴を開け、遂にレイディアは都市の外
の光を見た。

荒野。赤茶けた大地。

雨が降っていた。都市の中と同じように。都市の人工雨とは違って本当に自然に、しかし全く同じように弱々しく。

それが都市の外の世界だった。生まれて初めての外気。生まれて初めて見る地球の地表。大陸の北西部。

上手く言葉を作り出せなかった。彼女は暗い景色を眺めるしかなかった。生きて動いているものは、見つけられなかった。

生まれ育った街から、出られたただだった。

それが感想だった。

身に降りかかる現象は変化しなかった。新しい言葉を作ることとはできなかった。感動はどこにもなかった。

外の世界に、救いはなかった。求めていたわけではなかったが、赤い荒野はあまりにも寒々しかった。

けれど、都市の出口から数十歩も離れた時、デディゼンドは足を止め、後ろに振り返った。あまりに巨大な殻の、彼が開けた小さな穴へと体を向け、彼は、待っていた。

静かに時が過ぎた。小雨が降り続けた。

青年を先頭にして、八人の市民たちが壁の空洞から出てくるのがレイディアにはっきりと見えた。

デディゼンドは静かに息をついた。背中を通して、それを彼女は確かに感じた。

「よかった」

だから彼女の方がそう言っていた。口についてそのような言葉が出ていた。

「ああ」

まるで自然に彼が言って応えてきた。吐息のような声だった。そして、彼は小さな手を向こうへと差し出した。

手の平を開いた直後、宝石のように青く透き通る、一片の蝶が宙

に舞った。

蝶は音もなく煌きながら八人の方に舞って行った。雨に溺れることなく、ひらひらと。

市民たちはまだ蝶にも二人に気付いていないようだった。警戒した様子で周囲を見回し、こちらにも何度か目を向けてはいたが、二人の姿に焦点を合わせることは一度もなかった。

「外に出た時から、体の周りに透明化のカルをかけている。ここからメカナに着くまで、誰かに見つけられることはない」

心の中で抱いたはずの疑問に答えるように。もう、無言でその言葉を受け止めた。

やがて、最初に男の子が蝶に気付いて声をあげた。

その時、蝶を中心にして薄い青色の光が八人を包んだ。

次の瞬間、彼らはその場所からいなくなった。蝶と共に空気に溶け消えた。

雨の帳が八人のいた場所を包み直した。

「あの蝶は俺のカルじゃない。自分のために一つだけ渡されていたものを使った。だから、これは偽善だ。これまでのこともそうだ。自分のためではなく、助けたかったから助けただけだ。そもそも、俺はこの街が崩壊した原因を確かめるためにここに来ていた。それが最優先の目的だった。それ以外の行いは偽善と悪だ。レイディアはそのことを忘れないでいてほしい」

「それでも、あなたは助けてくれた」

「助けたかったから助けただけだ」

デイズェンドはまるで子どものように話していた。見た目通りの少年になっていた。八人もの市民を助けられたことを喜ばず、不機嫌になり、脈絡なく言葉を繋げ、痛々しく独白していた。

この人を新しい言葉で肯定したい、とレイディアは思った。けれどその時の彼女にはそのような概念を生み出すことは不可能だった。自分自身を単純な言葉で断定する彼に対して、彼女も単純な事実を言うことしかできないでいた。

それに、私を連れて行ってくれたのは、と聞きたかった。どうしても聞けなかった。

命に直結するその問題について、それがその時の少女の精神の限界だった。



デディゼンドはレイディアを横に降ろし、傘を畳んだ。小雨に構わず、予備動作なく、背にしている空間に翼を形作った。それは無音の内に行われたので彼女が息を吞んで言葉を失った様子がよく分かった。

ウィルグ
翼翼。

メカナの代表的な魔法系の一つ。

それは彼の肩甲骨の辺りを支点にして空中に浮かぶ六枚三対の金属の翼だった。薄く細長い虫の一枚羽根の翅。一個の魔法系式として定式化された飛行方式。元来は高度な技術が数千年間の最適化を経て普遍的な奇跡になったもの。

肩甲骨の量子領域に構成されている翅翼魔法系式の集積経路を起動させれば、後は自動的に翼が物質化し、後方の空間に展開する。

彼の翅翼は蜻蛉の翅をより硬く、より鋭利に作り直したもののように見えるはずだった。流線型の輪郭と幾重かの幾何線形、鋭い白銀の金属光沢。単純であっても悪趣味ではないはずだったが、それ

が地球育ちの少女にどのように見えるのかは分からなかった。

「翼があつて背負えないから、前に抱える。いいか？」

少女はまだ声を失っていた。月色の柔らかな髪に少しずつ雨滴が重なっていった。

「レイディア」

「はい」

名を呼ばれ、彼女は意識を取り戻したかのように返事をした。

「前に抱えて飛んでいく。こっちに」

大人しく従った彼女を抱え、無色ロミクアの魔法系カルで力場を形成した。

レイディアは薄く目を閉じていた。そのような彼女について、軽いな、とふと思つてしまった。そう言いそうになり、強く自制を働かせて口を閉じた。

「どうした」

代わりに、無難な質問を口にした。

「綺麗だから」

そう答えてきた。無難ではない答えだった。

「虫の翅だ。メカナには花の羽がある。その翼の方が一般的で、綺麗だ」

レイディアは心地良さそうに目を開け、デディゼンドを見て言った。

「あなたの翼は、彗星みたい。とても綺麗」

ここでそのような言葉を口にされ、彼は自分でも意外なほど強く驚いてしまった。感動されているのだと分かり、思いもしないほど動揺した。

「飛ぶぞ」

そう告げ、感情を飲み込んで飛んだ。

彼女は声を上げなかった。息を止めてはいたが、彼の肩越しに眺めの変わりゆく地上の光景を落ち着いて眺めてすらいた。次第に小さくなっていく背後の都市を見ていた。

雨ですら音を立てなかった。鞆も傘も大人しく彼を追った。

銀の翼は薄く重なるように開いていた。鋭い形と光沢が刃のように空を切り裂き、二人と二つを上昇させる力を真っ直ぐに生んでいた。

一塊の力は空と雨の海の中にいた。楕円の力場に包まれ、溺れることなく天空を目指して飛んだ。雨で瞳が濡れないことが不思議であるかのように彼女は瞬きを繰り返していた。

やがて雨を湧かす雲に迫り、上昇気流と水滴の集積の巨大さに翻弄されず、彼は落ち着いて雲の波間に滞空した。彼女は轟々とする逆さの海原を見上げていた。

そして、小さく身じろぎをして地上に視線を戻した。都市の骸はきつと暗い海底の底に沈んでいた。それを見つけようと、じつと息を潜めているようだった。

「私が悪いの？」

それは破滅の時が訪れる直前の問い掛けだった。

「デイズ、ずっと辛そうにしてる」

言葉は重ねられた。何のことだ、と彼が聞き返す前に。

「いつから、そう思っていた？」

彼は否定せず、聞き返した。

「今日の、朝から」

彼女は答えた。

「辛そうだった。なんだか、ずっと、急ぎたくないみたいだった」

「レイディアは落ちて着いていたな。よく見ていた」

初めて攻撃されていると彼は思った。内心で深く苦笑いをした。

「そして俺を疑っていた。自分の手伝いをしたり、休ませたりしたのは、時間を先延ばしにする口実だったと？」

「そんなことは」

「どうして、自分が悪いと思うんだ？」

「分からない。でも、不安だった。あなたは、どうして」

「俺を疑うのは当然で、間違ってもいない。おまえは悪くない。悪いのは俺だ」

「何の、こと」

「その不安も、正しい」

デディゼンドはそれだけを言い、口を引き結んだ。
彼自身が認識するべきその時が、訪れた。

「デイズ」

絶望的な声を意志の力で無視し、滞空したまま後方を向き、真下の水底にある都市の残骸を簡単に見付け、見定めた。

目標、拡張型仮想空間実験都市、ニルキナ。

その観測は、ただ、絶対に目を逸らさないために。
脳内の數位集積経路フエノソルタを励起し、携帯型の數位恒体フエノエンテルを集積情報網アルグスタに接続。特定対象との相互通信を開始。

「デディゼンドです。ニルキナを脱出し、安全域までの退避を完了しました」

「確認しました。これより、炉心の凍結を解除します」

恒体エンテルの擬似的な集積経路ソルタに彼の言葉が表示され、簡潔な返信が0.1秒未満で返ってきた。

もう逃げ出せたのだろうか、と彼は思った。つまり、今日と昨日に助けた被害者たちのことを思い出した。女性たちや子どもたちのことを思い出した。

そして、胸に抱く少女のことを思い出した。

それまで忘れていた。忘れていた。一日程度とはいえ、数秒程度とはいえ、彼は数々の被害者と被災者、そして守るべき脆弱なこの少女の存在を忘れていた。それが、彼にとっては十分過ぎるこの場での答えだった。

「レイディア」

それでも言葉は出てきた。感情と羽翼ウィルダを制御しながら彼女に言っ

た。

「これから、あの都市は完全に崩壊する。決められていたことだ。そして、決めていたことだ。俺はその決断に従うと」

もう一度都市の残骸を見下ろした。楕円の形をしたそれは、恒星間を旅する宇宙船の試作品だった。それは外界からの干渉を拒む堅い殻に包まれていた。それは独りきりで宇宙を旅する、地上に造られた巨大な移民船だった。

「ニルキナは完成していた。あの崩壊現象はあの街の人間には予測できないものだった。不測の事態が起こり、都市を支える電子炉が街中の回路網を巻き込んで暴走したんだ」

視線をさらに落とした。彼女は現実を失った表情で箱庭の名残を見ていた。

「炉心の暴走にメカナが介入し、融解の直前でその反応を止めた。あの激震や電磁的な衝撃は、介入が行われるまでの崩壊現象の余波だった。」

しかし、ニルキナは最後には崩壊する。本来はそうであったように。今も電子路は危うい状態にあり、もう、自然崩壊以外にエネルギーの均衡状態が消え去る結果はない。魔法も、全能ではない。ニルキナは後戻りできない状況に陥り、様々な要因が積み重なり、限界は刻一刻と迫っていた。そして、今がその時になる」

デディゼンドはそこまで言い、何かを補おうとし、浮かぶ全ての言葉を自ら消し去り、口を閉ざした。

沈黙の海に沈んだ。

やがて。

二人は滅びの光に照らされた。

轟音も届いた。

大気を揺るがす振動が雨雲の海まで伝わってきた。

レイディアは何も言わずに空白であるかのような光を見ていた。

デディゼンドも見た。

見続けた。見続けた。見続けた。

しかし、彼は彼女のように震えられなかった。彼女は揺らぐ大気の中で微かに震えていた。それが彼を揺るがした。

光と都市の殻が消えた後、デディゼンドは無言で視線を切り、さらに北へと針路を向けた。北に向かって飛ぶことを思い出した。レイディアはなお微かに震えながら沈黙し続けた。

海原の真際の月のように、時と場所が過ぎるのをただ静かに待っていた。

灰色に滲む空を飛んでいた。雨を落とす暗雲の領域を越えてはいたが、空はいまだに大きな水滴のうねりの海に閉ざされていた。彼

女はいまだ小さく震えていた。

彼女を凍えさせる海を抜けた。地上に舞い降り、柔らかな草地を見つけ、元素の魔法系セミンを使って草から肌理細やかな敷布を作り、彼女をそっとその上に降ろし、横たわらせた。

レイディアは顔を青白くさせていた。

「ここは、どこ」

「ニルキナの北の平原だ。寒くないか」

「うん」

彼女は薄く吐息をついた。

「今、夜じゃないの？」

「ああ。日が沈むのは何時間も後だ」

「不思議。どうして？」

ここでは、青空が見えていた。

ニルキナでは、その時刻が過ぎていた。

街の時間が加速していた。何日も過ぎ去っていた。何日も地獄が続いた。

地下に存在する電子炉炉心の凍結と同時に、その時間の流れそのものが減速させられていた。炉心反応の凍結を極限まで引き延ばすための措置だった。それを可能とする魔法系^{カル}が使われた。

そして、逆に地上の時間を加速させ、時間とエネルギーの均衡を取った。街が崩壊するまでの猶予を作り、デディゼンドが動ける時間を増やす目的もあった。結果的に、地獄が長く続いた。そして、均衡を長く保つため、彼は影響の大きな魔法系^{カル}の使用を極力避けていた。その分、地獄はさらに長く続いた。地球では数刻しか過ぎていなかった。

しかしその過去はもう無意味だった。未来は無価値に成り果てようとしていた。デディゼンドは何も言えなかった。レイディアに触れさせていた手をそのままに、これからいつまでも彼女の目を見続けることしかできないのではないかと思った。

「どうしよう」

眩きが生まれた。目が静かに閉じられた。
その言葉と動作に、デディゼンドは光を失う絶望を見た。

「どうしてほしいんだ？」

彼にとって、彼女のその表情はあまりに明白な表明だった。彼女が投影している彼の役割が、彼女自身に対して全うされることを受け入れる、という姿だった。

「殺せと言うのか？　このまま、ここで不条理に殺されてもいいと言うのか？」

「俺が悪いのか？　あまりに多くの死を見せてしまったことが。あの街の終わりを見せたことが。それで、もう全てを諦めさせてしまったのか？　生きていくことが無意味になったのか？」
「ううん」

彼女は瞼を開け、彼を見上げた。薄くくすむ陽の下、明らかな事実を否定した。

死神に、慈悲を与えた。

「あなたは悪くない。あなたは、私を助けてくれた優しい人」

それは弱々しい微笑みだった。体を失った者が見せる、途方もない悲しさに染められた笑顔だった。子どものするような表情ではな

かった。

「あの時、私は公園にいたの。家を出てから黙って学校を休んで。だから、私だけ。悪いのは私。だから」

それから、時が流れた。ただ、時が。そして空が。刹那の永遠の後、彼は青空を覗かせ始めた外界へと視線を逃した。

考えた。彼女の覚悟について。幼いが真摯な覚悟について。この場所で彼女が示した覚悟が無かったことと同じになるのは正しくないと思った。故郷と共に消えようとする悲しさが掬われなければならなかった。このまま連れ帰っても、きっと、もう。

考えた。彼女の意志について。幼いが真摯な意志について。あの場所で彼女が示した意志が無かったことと同じになるのは正しくないと思った。預かった命をこんなにも早く返すのは嫌だった。しかし、彼女を生かす方法が分からなかった。

絶望的だった。絶望しつつあった。死は目の前だった。彼が死だった。死神として殺すという不条理が現実になろうとしていた。

目を閉じて横たわったままのレイディア。デディゼンドはまだ何もできなかった。何も言えなかった。

彼女を生かすことも死なせることもできない時間が流れた。



言葉を生み出せない飽和が彼女を溶かしていた。死の湖の中、疲労と麻痺がその時の彼女の心だった。なんだろう、と彼女は思った。悲しみは指先に。魔法の毛布の外、指先の触れる北の大地の草原に。

絶望は瞳に。人を形作る全てを映す、見えない半透明の鏡に。意味は無限に。彼女ではない余事象に。彼の面立ちに。

「ニルキナで実験運用されていた電子炉。電子の生成とその制御を同時に行う、ニルキナの心臓であり、頭脳。拡張された仮想現実を支えていた、エネルギー生成と情報組成の融合機関。

その小さな世界の回路が、地球人が独自に造り出せた完全なエンジンだった。空が暗黒に凍えても、大陸が白い海に沈んでも、外の生命が死に絶えたとしても、あの街だけは夜が明けるまで生き延びることができたはずだった」

拡散してゆく。拡散してゆく。

「ニルキナは地球上で初めて造られた宇宙船だった。薄い電子の大气も持ち、地球に頼っていたのは重力だけで、地球に乗って宇宙を旅していた。それだけでもう、人類の存在は果たされ、示されていた。意義も証明も、輝きも。地球に対して、宇宙に対して。ニルキナを見捨てた俺たちこそ骨と皮の死者だ。後は汚し汚されていくだけの」

それら全ては沈黙に。青い夜空に。



選んだのは、今の覚悟ではなく、過去の意志だった。それがデゼンドの秩序となった。

彼女が示した意志が無かったことと同じになるのは正しくないと思った。彼女という存在がここで死を受け入れたまま消えてしまうのはどうしようもなく間違っていた。

手を差し伸べた。レイディアはその手を取り、命を振り絞って体を空へと持ち上げた。

言葉にせずに額を合わせた。一度目を閉じ、少ししてから目を開けた。

目を合わせた。彼女は何も抵抗しなかった。体の傾きを彼に委ねていた。

彼女の手の上に手を置いた。額と同じように冷たさに浸されていた。善悪と偽善、そして偽悪の渦が小さな手と心を否定しようとしていた。しかし彼の手は熱く、心は堅く、そしてどちらもが愚かだった。だから何もかもを肯定した。それがつまり、デゼンドという人間だった。

そして、彼女が示した覚悟が無かったことと同じになるのも正し

くなくと思った。それが彼の意志であり、我俣だった。

デディゼンドはそつと体を傾け、レイディアにキスをした。
彼女の意志と覚悟と、彼の願いの証を作った。

「生きろ」

生まれて初めて、心から願った。



1—2.

レイディアにとっての朝が訪れた。あまりにも暗い朝。けれど目覚めた場所には小さな明かりが灯っていた。灯火のエンテル。

そして暖かった。デディゼンドがすぐ傍に座り、目を細めて温度を紡いでいた。そうなのだと分かった。

「おはよう」

だから、言葉を小さく伝えた時、自分の心も伝えていた。無意識の内に。経験した死と絶望を声に乗せ、彼に委ねた。



おはよう、という死と絶望。彼は聞いた。

「おはよう」

ニルキナから持ってきた日持ちのする食料と飲料水、赤い林檎がささやかな食事だった。林檎は彼が無色のナイフで瞬く間に切り分けた。

二つの目が彼の食事を不思議そうに見ていた。

「俺も、ものくらい食べる」

そう言われた時、彼女は少し顔を柔らかくした。

再びウィルグ翅翼を背負い、夜空を駆けた。

空の中で朝を迎えた。東の端から昇る太陽があまりにも眩しかった。

命を抱えて飛び続けた。石と岩と斑な草地が遠い地平線まで続いていた。静かな朝の鳥の光景だった。時折、わずかな草を食む動物たちが胡麻のように黒く斜面や谷間に置かれていた。その在り様は普遍的なものだった。数万年後の地球のあるべきかたちが見渡す限りに表れていた。表象されていた。

いつしか、見渡していた。何かがあり、希望のない光景が鳥の眼下に広がっていた。そして後ろに流れていった。あの地球上の宇宙船のすぐ傍に広がる内陸の荒野。知っていたのだろうかと思っ

た。

「これから俺が」

そう口にし始めたが、躊躇い、途中で言葉を飲み込んだ。

死の上空に浮かぶ柔らかな視線が彼を見上げた。

微笑みを見た。

彼の視線を受け、頬を合わせてきた。甘えるように肌を当て、すぐ近くで嬉しそうに見てきた。そしてまた頬に擦り寄ってきた。

胸の中の命は彼の中に混濁していた。意識が白濁しているせいもあり、彼を本当に死神だと思い始めているに違いなかった。それも仕方のないことだと思っていた。このか細い命は弱り果てていた。

飲み込んでしまってもいいか、と一瞬考えた。それが強者の特権であるなら。それは理想的な関係ではないにしても、悲劇的な関係ではないはずだった。信頼され、生きるために身と心を委ねられていた。そして彼は決して身内に無体な行いをする人間ではなく、その選択は間違いではなかった。

もう一度ここで口付けをすれば、と客観的な心が言った。今でも服従しているようなものだ、抗おうとも思わないだろう、と。

だからこそ、その時は唇を合わせなかった。額を合わせたまま、そこまではしなかった。抗えないのならば、と逆に思い。

「俺が守る」

透明な瞳を覗き込み、真摯に伝えた。



きっと、自分自身の感情を考慮に入れないことが彼の一番大きな欠点だった。だからその言葉が一体どのように伝わるのか、その瞬間まで全く考えもしなかったはずだった。彼には言葉と意思が伝わるならそれでいいと思ってしまう悪癖があるに違いなかった。

優しく、彼は言った。

だから、レイディアをひどく泣かせてしまった。

弧を描く大地。

白雲の流下と積層。

普遍的に青い光を散らす空。

地球の空は果てしなく広がっていた。



円い地平。

雲の川と湖。

どこまでも青い空。

地球の空は果てしなく広がっていた。



2. **I m i n a m i a**

2. I m i n a m i a

2—1.

二人は空を潜り抜け、白い広場を視界に収めた。

「お帰り」

次に、間もなく、力強くも可憐な声を聞いた。
デディゼンドは仕方なく頭上を見上げて声の主を確認し、観念して溜息交じりに頷いた。

白い衣装と鮮明な輝きを身に着けた金髪金眼の十代中程の少女。白い広場から出るための大きく緩やかな階段の終点で二人を出迎えていた。

笑みを湛え、腰に手を当て、階段の中央に立ち、明らかに進行妨害をしていた。

幼いレイディアを抱えて進む彼を見ていた。その視線は蔑みではなく、とても微笑ましいものを見ているような柔和なものだった。

そして、少女の横には同じくらいの背格好をした、やはり金髪金眼の少年が静かに立っているのが見えていた。少年も微笑んで彼らを見ていた。

デディゼンドは黙ったまま広場を横切り、階段を上った。

しかしそのまま無言で横を通り過ぎることはできず、待ち構えていたことに対する乱暴な意見を押し殺し、少年少女の横で足を止めた。

つまり、彼はどうしても十二歳の体の子どもだったので、黄金の少女より頭一つ分低い位置で視線を受けるしかなかった。その、金色の瞳。強く煌びやかな力が宿っていた。胸元の彼女にも煌く視線は投げかけられ、彼は少し不安になった。

「お帰り、シズ」

その時、少女の隣にいた少年が労いの言葉をかけてきた。最初の言葉とは違い、それは純粹に優しいものだった。

だから少し安心して頷き、続けてレイディアへと向けられる金色の優しい視線に静かに追従した。

「君を知ってる（ウィノウユー）」

優しい、地球の言葉。祝福のように彼女に伝えた。

「はじめまして（ナイストゥミーチュー）。メカナへようこそ（ウエルカムトゥメカナ）。僕はオリオン（アイムオリオン）、この人はエクシ（デイズエクシ）」

「はじめまして（ナイストゥミーチュー）」

二人の言葉を聞き、月と地球の少女は二人を見つめ返していた。どれほど衰弱していたとしても、その青い瞳には理解の光が灯っていた。夜と暗闇の彼は黙って彼女を抱きかかえたままだった。

すると、エクシが突然に黒い方の頭に手を置き、慈母の笑みを浮かばせ、そっと優しく硬い髪を撫でてきた。

無論、両手を使えなかったので、物理的に抵抗するのは無理があった。

「手を置くな」

そのまま抗議した。

「あはは」

次は明るく笑われた。オリオンも笑っていた。もう何も言えなかった。励まされているのだと分かっていた。

「あ、笑った」

エクシが喜んで彼女を見た。

「いい子いい子」

そう言い、今度は月色の細やかな髪を撫でた。彼女はずっと大人しくしていて、そして確かに小さな笑みを作っていた。



その後、デディゼンドが未知の言葉で黄金の少年と少女と別れを交わした後も、レイディアはよく見ていた。薄れた意識と視界で、異世界の街の光景を。

デディゼンドが連れて来た街は、星型の地面が十数も重なる幻想的で巨大な白い都市だった。

側面の窪んだ多角錐のような立体都市。少しずつ半径を減らしながら、建築物を乗せる床が階層となって上下に重なっていた。それぞれの階層から階層までの高さはニルキナの建造物の十階分ほどもあった。彼は階層の外縁に造られた大きな階段をそのまま上り続けていた。何百段もの大階段。緩やかな曲線を描きつつ、上れば上るほど傾斜は急になっていった。

レイディアは階下を見下ろしてみた。地球の空と繋がる円形の真っ白な広間が星の地面の向こうで浮き島のように小さく浮き上がっているのが見えた。一階の白い星の床の先端は街を包む大きな藍色の空間と接していた。空のようでも海のものであるその空間はさらに下に続いているようで、深い部分はさらに深い色をしていた。

ふと、なぜか、あの街に似ていると思った。

デディゼンドは大階段の終点、数えて十一番目の階層まで上り続け、円周を描く外縁の通路へと足を向けた。

空と円形の街並みの狭間に、人通りはなかった。

灰白色の石畳。黒い軸と橙の明かりの街灯。光に溢れて見えない天井。そして、左右の、透明な硝子の層に覆われた白亜の壁。

壁の表面には遙かな天井から続く壮大な幾何模様。何種類もの線形の集合が一定の間隔の規則の元に複雑に絡まり合って白亜に薄く掘り込まれ、その全てが平らな硝子の層に薄く保護されていた。

彼の家の扉は地層のような規則を持った模様の足元に隠されていた。その場所まで彼が近づいた時に二層の壁が消え去るように長方形に開き、褐色の扉を自動的に曝け出したようだった。

彼を出迎えたものはいなかった。暗く、静かだった。

暗い廊下を進み、螺旋階段を上がり、その途中の扉が開き、長い廊下をまた進み、奥の部屋に入った。

そこが寝室だった。何の模様もないと思われる床と壁。最低限の家具が備えられた場所が開けていた。

暗闇の中、寝台に横たえられた。彼の体温の傍で、ほどなく深い眠りに落ちた。

(I n t o t h e d r e a m ; r e c o l l e c t i o
n)

夢だと、初めから分かっていた。

煌びやかな街。あの街の、向こう側の世界。

毎日のように行われていたパレード。

電子の光。電子の私。電子の、母。

それでも、本当の、現実。本当の母。

拡張されたのは、原子世界ではなく、電子世界。

発展のためではなく、生存のために。選ばれたのは仮想現実。

つまり夢。苦痛を和らげるための偽りの楽園。

これは夢だと、初めから分かっていた。

このパレードも、母の笑顔も、今しか見られない幻だと。

それでも、これは現実だ、と認識しなければならないから。

できなければ、心が壊れてしまうから。

「ママ」

私は迷子。

「ママ」

罰が当たり、私は夢でも迷子になり、電子のヒトゴミに埋まる。

私もやがてゴミになるだろう。行く先はゴミ箱。デリート。母に
触れられることなく消える。

それなのに、こんなにも簡単に私の手を握る、硬い手の人は誰？

「ロボットさん？」

見上げると、ヒトではなく、それは無口なロボット。パレードの入り口の無愛想な受付ロボットのヒトリ。実は逆に人気者。

「お仕事は？」

無表情で無骨なロボット。そういえば、どうしてこのヒトリだけがあんな態度が許されているのだろう。怒られないのだろうか。笑わないし、無礼だし。ずっとあのままでいいなんて、羨ましい。

「なに？」

接客用の無音声の定型文を書いたウィンドウは開かれない。もちろん、定型でない言葉がその口から表示されたこともない。

代わりに無言で私の手を引いてくる。背を向け、肩越しにこちらに振り返り、どこかに連れて行くこうとする意図を見せる。

私は、拒めない。

ロボットは歩き始める。私はその細長い背中を見つめる。そのままヒトゴミの隙間を縫うように進んでいく。ジグザグ。止まったり進んだり。喧しいヒトと電飾と音楽の流れに逆らい、交わり、混ざり、分かれる。

やがて、ロボットたちと妖精たちのパレードが始まる。

「ママ」

その時訪れた、短い冒険のゴールは、ママ。恐くなんてなかったけれど、少し意外でありきたりで、幸せな結末。

代わりに無くしてしまうのは、そう、硬いけれど優しい手。

「プラスマイナスゼロ？ 最初と同じ？」

なのに、口にされたのは、ありがたいも言えない馬鹿な私の、あまりに馬鹿な言葉。

でも、そんなことを気にもしないロボットは、もう片方の手を差し出してきた、そっと私に開いてみせる。

それはコトバの時計。そうだと分かるもの。機械のコトバを刻むもの。

私は恐る恐る手を伸ばす。私は開かれたワタシになる。

とてもキレイで、宝石のように煌くヒカリ。

代わりに、ヒトリのロボットはワタシと繋いでいた手を離す。

そして、夢を終わらせるために、語り出す――。

(Back to the peace ; mind)



目を覚ました時には早朝だった。すぐ横でレイディアが目を覚ましていた。二人は同じベッドで横になっていた。

デディゼンドは室内用の簡素な白の上下を身に着けていた。一方

で、彼女は。

意識はすぐに覚醒したが、眠ってしまった、という理解と諦めまでに数瞬もかかった。硬直し、息をつくまで数秒もかかった。その状況を鑑み、なんということだ、と嘆いた。

「おはよう」

彼女は恥ずかしそうだった。当たり前だった。

「おはよう」

彼は嘆きながら答えた。

「起きるか？」

沈黙に耐えられず、仕方なく言った。それでも、ベッドの上で見合ったままの姿勢から動けないでいた。

「今日はこのまま休んでいたほうがいい」

視線を外しながら、無理に体を動かして起き上がった。

「鞆をここに置いてあるから、着替えておいてくれ」
「うん」

彼女は弱々しくも丁寧に頷いたようだった。



デディゼンドが部屋を出てからレイディアは体を持ち上げた。その時になって初めて、自分が裸であることに赤面した。

痩せた体は洗われていた。きっと昨日の夜の内に。何も言われなかったから、彼女も何も聞かなかった。ただ、恥ずかしさと申し訳なさ感謝があった。

そんな気持ちのまま、半ば夢心地で鞆を空け、下着と寝具を身に付け始めた。鞆の重量は元に戻っていた。思われることはたくさんあった。しかし、いつまでも漠然としたままだった。

黒い髪と瞳の少年の言葉と行いと表情が思い出された。全てが彼女のものと違っていた。あまりに違っていた。

どうしても覚えていることはあった。思い出してしまうことがある。長い激震、崩れ落ちた建物、人体と死体、そしてあの一瞬。しかし途端に恐ろしくなるわけではなかった。恐慌をきたさなかった。まるで見えない綿が心の毒を吸い取ってしまったようなうたた。漠然としたまま思い返しながら、前の釦を留めながら、自分も

う狂ってしまったというのを思い出していた。



「顔が青い」

デディゼンドはメカナの飲物と果物を机に置いてからベッドの傍

に立ち、冷たい汗の浮かんだレイディアの額に手を触れさせた。

「大丈夫か」

それ以外、何も言えなかった。

「うん」

それ以外、言える言葉があるはずもなかった。

だから、半ば無意識の内に彼女を抱擁していた。背中に手を回して抱きしめた。

「今は、俺は誰でもない。目を閉じて、楽にしてくれたらいい」

ひと時の間、彼は誰でもない者になることにした。でなければこんなことはできなかった。先に目を閉じた。

そして、その行いをどう思ったにせよ、彼女の体から強張りが消えた。

「うん」

彼女も誰でもない者になったのだろうか、それはそれでいいことだろう、と彼は思った。

衣服を間に挟み、呼吸や体温が伝わり続けていた。それらは次第に落ち着いていった。

ひと時が過ぎた。

地球の青い瞳。この黒い瞳はどのように見えているのだろう。

果物は前と同じようにデディゼンドが切り分けた。レイディアは時間をかけて全て口の中に入れた。その後、手渡された白い錠剤を何の警戒も無く飲み込んだ。

手洗いについては、彼が彼女を背負って一階のその場所まで連れて行った。抵抗は全くなかった。

落ち着いた頃、朝はもう早朝ではなくなっていた。睡魔が再び彼女を誘おうとしていた。

促されるまま横になり、彼女はすぐに安らかな眠りに落ちた。

携帯型の数位恒体^{フェノエンテル}の私的機密区分に、文字情報だけの一つの文書が直接届いていた。

メカナの最高責任者からの通告だった。

「お前の要望は承認された。被保護者を連れて私の部屋に来い」

時間指定すらないあまりに乱暴な物言いと権限の行使。苦い思いを抑え切れなかった。

静かな寝台を横目に見た。穏やかな眠りの光景。被保護者である少女の安息を願う自分を再確認した。

気を取り直し、恒体エンテルを集積情報網に繋ぎ、ここ数日の世界中の時事を確認することにした。

メカナではさして変わりはないようだった。彼が責任を負っている地上の軍管区は平常に機能を維持していた。

地球は、彼の予想通りの事態となっていた。

世界の半数以上の地域が人類史上で最大級の歴史的事業について大々的に報じていた。

「移民宇宙船の旅立ち」

「宇宙史の始まり」

「ついに銀河のステージへ」

地球の時間で今から二十二時間ほど前、欧米圏の全土から選抜された移民希望者を乗せた大型宇宙船の第一号が地球圏から宇宙に向けて発進した。正確には搭乗した四百八十人の内的大半が冷凍保存されたまま恒星間航行船に載り、太陽とは異なる恒星系の惑星へと送り出されたのだった。

未だ火星にも入植していない今の地球人類にはあまりに無謀な計画。しかし、銀河の海へと船出する人類の強さと英知を自画自賛してはならない理由はどこにもないようだった。まるで人類がこのまま宇宙を飛び回る新人類へと進化できるかのような妄信が生まれ始めているように思われた。

キリスト教圏や中道圏では未来に対する無批判の希望、栄光と賛歌が。イスラム教圏や共産圏では押し並べて冷ややかな無視が。独裁国や貧困国では無関心が。そしておそらくは羨望と嫉妬の怨嗟が。大陸辺境の一都市がその歴史的出航の数時間前に消滅していた事件については、未だどのような機関も報じてはいなかった。その実験都市を抱えていた当事国でさえ。

地上の宇宙船は天空に旅立った宇宙船の影で人知れず消滅し、地球史で証明された箱舟は永遠に闇に葬られた。

電子炉の大釜は無という地獄の底に沈められた。蓋は閉じられ、二度と光を取り戻すことはない。

宇宙へと発進した船は従来通りの核融合炉を利用したもの。地球人はエネルギーと情報を分離させたままの文明水準で光速を超える魔法を目指し続けなければならない。

人類が黴菌か癌細胞の様に星の海へと増殖し始めようとしたその時から、あるいは人類の存在意義を終わらせる最後の予言から逃れようとしたその瞬間から、審判が下されたかのように地球は倦怠と衰退の地獄になるのだと思った。

母星にこびりつく、他の細々とした政治や経済の時事、殺伐とした貧困やテロの記事を見ながら、デディゼンドは深く、これからの暗黒と混沌の時代について思索し続けた。

何事もなく一日が過ぎ、次の日の朝が訪れた。デディゼンドは一日中彼女の傍にいた。メカナの惑星社会から送られてくる公式文書に目を通し、情報官から提供される情報と自身の見解の二方向からそれらを検証し、文書に誤りがないことを確認し、承認した。その仕事を繰り返した。

その後も地球とメカナの多数の惑星で生まれる最新の時事を常にデジタル数位恒体が自動的に収集し続けていた。

彼はただ彼の部屋に在り、広大な世界を必要とせず、いくつかの小さな窓を通じて無言のまま他世界を眺めていた。冬眠しているように深く眠る彼女の様子を時々伺いつつ、時が過ぎるのを静かに待っていた。

「今日一日はいつでも大丈夫だから」

そう伝えてくる一つの文書を除き、デディゼンドが相対するものは時間だけであるようだった。

「おはよう、ディア」

そして、レイディアが目を覚ました。

「これからそう呼ぼうと思う。駄目か」
「ううん」

彼女は首を振った。

「気分はどうだ？」

彼はそのような愛称を使う理由を言わなかった。時機が来ればそうしようと思っていたことであり、明確な理由を言うべきことではないと理解していた。

「大丈夫」

彼女もその理由を聞かなかった。

「ありがとう」

構わず、そのまま無垢な感謝を表した。仕草には無条件の安堵が表れていた。



地上を離れ、訪れたのは、清水の時代。清らかな水分がこの体に入ってくるのを感じていた。

そして、世界について、彼の言葉が浸透する。

「並列宇宙層^{パラレルスペースレイヤー}。それが、この宇宙の構造だ。

地球人を祖先にする文明が広がる、地球宇宙やこの宇宙を含む宇宙の層の名前は、フンクト。

事象の平行な世界というわけではない。地球宇宙と同じ物理法則を持つ、無数の球面状の三次元宇宙の並列宇宙^{パラレルスペース}がさらに球面状の四次元空間上に並んでいる、という意味での並列になる。

違う可能性やイフの世界という意味の平行世界^{パラレルワールド}は過去世界、未来世界と同じものだ。四次元の空間には存在しない。

フンクトの人類のほとんどは複数の並列宇宙にまたがって文明圏を形成している。このメカナもその文明の一つだ。

俺は、メカナのカルンの一人。

カルを英語に直訳するなら、魔法系^{マジックシステム}。そしてその行使者、魔法使い（メイジ）を、カルンという。

人間にはソラという体内の量子領域^{クオンタムドメイン}が存在している。それは生命の半直線。そのソラの中で並列宇宙層の直線樹^{ラインツリー}の一端を紐解き、恒久のエネルギーを取り出して利用する技術体系がフンクトにはあり、それをカルと総称している。

直線樹はイミルと呼ばれる。仮想的なエネルギー体でもあり、カルを実在させるために存在してはならない五次元以上の天体でもある。古くはカーが魔法^{マジック}を、ルーが系^{システム}を意味していた。つまり、カルとは高次から得られる力の法則を体系化させたものだ。

パラレルスペースレイヤー、マジックシステム、メイジ、クオン

タムドメイン、ラインツリー。

フンクト、カル、カルン、ソラ、イミル。

そして、ビース。

人は精神とソラだけではイミルには触れられない。カルを使えない。そのためには、ビースという複写符号コピングコードが必要になる。

メカナでは、単純な有機物から生命が生まれたように、原始的な生命がDNAを獲得したように、それは極めて低い確率で自然発生した生物学的な組織だと考えられている。

ただ、フェノと呼ばれる数的物質の中の、さらに未知の物質から作られている符号だということ以外、その正体や起源は人間の意識と同じように今でもほとんど解明されていない。最古のもので一万五千年前。それ以来、地球上の各地の人間に断続的に発生したビースがDNAのようにフンクトの人類に受け継がれている。

ビースは複写される。多くの場合、親から子へと遺伝する。人の、体内の量子領域、細胞の狭間、粒子の隙間、電位の間隙を巡る、量子領域クオの背景宇宙に。

ビースは人体の宇宙に宿る可能無限。

無数の球面三次元宇宙の積み重なる、この一塊の球面四次元空間を遙かに越えて流れる大樹から質点を取り出すための可能無限。力の果実であり、魔法の源だ。

ソラに宿るビースからイミルに至り、カルを用いカルンになる。それが、フンクトの人間の生き方になる」



「デイズは？」

「俺か？」

俺はここで暮らすようになって一年になる。メカナに来たのは六年前だ。地球で生まれた人間で、元々はこちら側の人間じゃない。今は、英語でそのまま騎士^{ナイト}と呼べる、軍人として働いている」

「騎士^{ナイト}？」

「ああ。騎士^{イウス}という。色々なことがあり、こんな滑稽な場所に落ち着いた。」

「荒唐無稽な上、少し長くなるが、自分のことを話していいか？」

「うん。教えてほしい」

「そうだな、俺は、物心がついた頃には人間としてはもう手遅れだった。自分でその頃の俺を殺したくなるほどだ。そして、結局、自分から殺されるようなことをした。」

行けるはずのない遠い宇宙に行こうとして、自暴自棄になって、抵抗もせずに自分から体を捨てたんだ。もちろん、望んでいたような宇宙には行けなかった。辿り着いた先に広がっていたのは、絶望するしかないほどに光輝く風景だった。

耐えられなかった。だからすぐにその場所からも逃げた。その次は、數位^{デジタル}宇宙。元素^{エレメント}宇宙のこのフンクトとは物理法則が異なる、全く別の並列宇宙層。もう、どうしようもなかった。

違う宇宙に辿り着いてしまっただけでどうしようもないほどの時間を過ごした。

主観時間で、およそ千八百一年。

本当だ。馬鹿みたいな話だが。

そして、この宇宙に戻った後もただひたすら迷っていた。そうしていたら、メカナの一つの惑星でカルンという魔法使いに捕まった。俺のことを、物珍しいから調べてみようと思ったんだそうだ。それが俺の教師だ。魔法使い（カルン）から魔法系^{カル}を正式に教わったのはそれが初めてだった。

カルンはどうしようもない人殺しだった。ああ、彼の名もカルンだ。初めにそう言われ、俺が勘違いをしてそう言い、向こうもその

ままでいいと言ったんだ。

カルンは何の躊躇も無く敵対者を皆殺しにしていた。慈悲を乞わせる時間も与えず、一度に数百人を殺す魔法を使い、生涯の内に間違ひ無く百万人以上を殺していた。俺は彼に従事し、この世界の常識や歴史、カルンの基礎を教わり、最後に遺言を聞いた。彼は千年の壁を越えられなかった。

そして、カルンの遺言に従い、戦うためにここに來た。騎士になり、殺人にしか使えないような銃を撃ち、敵を殺している。

まあ、俺のこの口調からも分かると思うが、それでも、人間としての精神年齢は十八歳程度に過ぎない。千年の時間を過ごしても大人や賢人になれるわけじゃない。ただ、もうどうしようもなく子どもでもない。大人として生きている。

俺はどうしようもない人殺しだ。今までに何千人も殺している」



「本当の名前を教えてください。」

「エンデ エンジェル。エンデの方が名前だ。エンジェルが家名」
ファミリーネーム

偽名だとよく気付いたな、と言っているような穏やかな声と表情で彼は言った。

「両親は俺に名前をつける前に戦災で死んでしまっていたから、エンデという名前が施設の年長の子どもから名付けられた。この名前は彼女が好きな作家の名前だった。ただ、これがその作家の家名の方だと知らなかったらしい」

そう言い、懐かしそうに小さく苦笑した。

「教えてくれて、ありがとう」

彼は小さく頷いた。

その時、彼女は命のかたちを見たように感じた。それは彼の姿をしていた。彼は黒い髪と瞳を持ち、子どもの顔で父の表情をしていた。そして彼は白い服を着る少年でありながら赤い姿で人を無残に殺す者だった。彼女は自分が少女であることを瞬きの内に見直し、あの残虐な光景を思い出し、かつての平和なあの頃に自分が無邪気な子どもであったことを認めた。

優しく扱われていた性と無理やり暴かれた性があり、彼は暴くものを殺すものであり、同時に優しい少年であり、暴かれた彼女はそのような彼という存在に依存していた。彼女の命のかたちはそれを是とした。それを彼女は認め、大切なことだと思い、大事に胸の内に秘めておくことにした。

恐れを持たず、命を預けた彼に従うことを改めて自ら認めた。

破滅と死と悪意に襲われ、光景と記憶を破壊され、死神のような魔法使いに助けられ、心は普遍性から逸脱するものとなっていた。

彼のように。

そのように、半ば意識された望みを持って。

玄関が開き、街中に溢れる白い光が差し込んできた。

「一緒に来て欲しい。直接会って許可をもらう必要があるんだ。いいか？」

レイディアの答えは決まっていた。しかし、それでもすぐに頷きを示すのが申し訳なくなるような表情をデイズンドはしていた。命令することに慣れていないのかもしれない、と思った。

初めて自分の足で歩くメカナの街並み。これが異世界。

街路に吹いているのが不思議なくらいに爽やかな風を感じた。左右の壁と模様に囲まれた道は不思議な明るさを湛えていた。明るい光が天井や街灯から零れ落ちていた。壁の透明な層は白い壁と模様を保護するだけではなく、二つの色の半分ずつを一度取り込んで模様に当ててから街路の空間に優しく投げ返していた。

同時に、少しばかりの寂しさを感じた。それは寂寥でもあり、静寂でもあった。天上はこのように寂しいのかもしれないと、光の空洞の向こうにある大きな木の緑を見ながらレイディアは思った。

「ここに来た時に、十五歳位の男女に会ったんだが」

もちろん彼女は憶えていた。少し年上の人たちの輝き。とても鮮明なものだった。

「オリオンとエクシ。地球の言葉が今の名前になっているのは、二人の趣味が地球文化の模倣だからだ。メカナにはそういう人間がかなり多い」

彼は少し笑って言った。

「二人は俺の上官に当たる。ニルイウスという最上級の軍人で、見た目通り、御伽噺の住人だ」

「あの人たちも？」

「ああ。ここ、イミナミアはそういう人間が住む場所になっている」
「ここは、基地のようなもの？」

「そう。魔法を使う異世界の官僚と軍人の本拠地。ここはメカナの全てじゃない。それどころかここは支配者たちが住む天上の小さな城で、メカナの文化のほとんどは地上にある。地上は、そう、エネルギーに満ちている。豪華で綺麗な世界だ」

「地球とは違うの？」

「主に流通している資本は、エネルギーそのものだ。エネルギーや資源の恒久生産が達成されていて、個人や企業が使用できる多様なエネルギーと、資金化されたその数量が生活水準を決める。恒久ではあっても有限だから、そういう資本経済が成り立っている。

ただ、メカナでも犯罪や抗争は無くなっていない。エネルギー分配の問題も残っている」

目覚めた時からレイディアは傾聴していた。彼の言葉を全霊で記憶の空間に刻み続けていた。なぜなら、そのような言葉の全てが今ここで記憶すべきことだった。とめどなく空気に散る、しかし明瞭に彼女へと与えられているこの世界についての事柄だった。

それは、彼女自身の利益のために。条理から逸脱した者として、人格のひどく冷静な一面をつくり、敬愛する人の言葉を呑み込み続けた。

敬愛する彼の言葉を。

それを、人格のひどく冷静な一面が、ここで初めて認識した。自身の人格を俯瞰する彼女は、それを、胸の内に秘め持つことを是とした。

「政治も男女平等の民主主義を維持しているが、有力な家系に役職を独占される傾向は地球の大国以上だ。深刻なところでは、家名がそのまま地位を表している。腐敗もある。

致命的な宗教対立が存在しないことが平和維持の大きな救いにな

っているところが大きい。幸い、大規模な内戦は千年以上起きていない。治安も良く、一般市民の安全は保障されている。仕事や娯楽が充実していて、生きていく上で退屈することはないだろう」

前を見て話していた彼は少女の様子に気付かなかったようだった。意図して、気付かないように、前を見てくれていたのかもしれないかった。

レイディアが街路の端まで辿り着いたのは、そのような喜びの中で感受性が高まっていた時だった。

その帰結として、彼女の中で極めて純粋な表象が新しく生まれた。それもまた、あるいは奇跡的なことだった。

「あれに乗って上に行く」

何本もの大木に囲まれたそれは、天国の階段だった。

空中に浮かぶ何十枚もの白い結晶板が二重螺旋を描いて天に向かって伸びていた。螺旋の一本が上空へ、もう一本が階下へと、ゆっくりと自ら回転しながら動いていた。

「あれを初めて見た時には俺も驚いた。あまりに幻想的だな」
「うん」

螺旋階段が貫く大きな縦の空洞の周りに広々とした公園が造られていた。芝生の緑と木々の緑。小さな泉と小川もあった。

そして、公園内や螺旋階段の段上に人の姿が見えていた。初めての他者たち。彼と同じような青い服を着た人間たちが普通に石畳を歩いていた。

デディゼンドは空のように青く澄んだ衣装を身に着けていた。他者を認めて、彼女はその事実も改めて認識した。あの街での赤や自室での簡素な白ではなく、高貴さも漂わせる青いローブ。彼女は彼に合わせて空色のワンピースを選んでいた。色という表象はこんな場所でも共有できる価値観であるようだった。

ふと、まるで透明な言葉が彼女の耳を通り過ぎた。メカナの、イミナミアの人間たちが彼女の知らない言葉で話し合いながら、公園に足を踏み入れた二人の横をまるで無関心に通り過ぎていった。

彼らが二人に気付いた時、彼女に対してはもちろん、そして彼に對しても無色で静かな視線を向けてきた。

デディゼンドも気にせず通り過ぎた。一人一人にレイディアを紹介することもなく、無言のまま進み続けた。

理解した。異世界にあってもなお、天国のような場所でもなお、地球と同じような社会が形作られているのだと。このように見てくる彼ら、このように見えている彼らとはこれからずっとこのままなのだろう、と思い、静かに見返し、見遣ることにした。

このような人たちの中から彼だけが地球のあの街に来てくれたのだと分かった。それはとても大きな不思議だった。見逃してはならない、とても大きな事実だった。

無作為がありえないのなら。それに気付いた。

「黒い髪と赤い服の少年に助けられましたか？　西へ逃げろと言われましたか？」

果たして、その時、女性の声が白い石畳の上に放たれた。ソプラノの声が大きく響き、彼女の足を止めた。

「黒い髪と赤い服の少年に助けられましたか？　西へ逃げろと言われましたか？」

美しい女性。二人と対面して立つ大人の女性。長い髪は夜空で、瞳は満月の傍の深く澄んだ藍の色。銀の刺繍の純白のドレス。そして、両手で胸に持つ、一輪の白い花。

一片の宝石のような青い蝶が女性の傍でひらひらと舞っていた。英語で質問されているという状況それ自体に気付いた。

「はい。私は彼に助けられました。そしてそのまま彼について行きました。他の人たちは彼に言われた通りに西へ行きました」

「分かりました。では、私の助けはいらないようですね」

同じ言葉のまま、女性は言った。

「これで私の役目は果たされました」

レイディアはあの八人の市民が青い蝶と共に消えた光景を思い出していた。つまり、それが答えだった。

「彼女のことについて、あなたには詳しく報告するべきでした。申し訳ありません」

それまで黙っていたデディゼンドが言った。とても丁寧な口調が彼女の耳をくすぐった。

「構いません、正規の任務ではなかったのですから。これは私が勝手に確認したかったことです。こちらこそ済みません。あなたたちの邪魔をしてしまいました」

女性は優しい口調で応じ、くすりと笑って話を続けた。

「私の方は少し大変でした。どうやら、街の反対側から来た人たち

が大勢の市民を引き連れて来ていたようです。あなたたちがこちらに來なかつたのは幸いでした。最悪の場合、安全を優先するために彼らの自由を奪わなければならなくなっていたでしょう」

「そうでしたか」

「安心して下さい。あなたからの連絡までに、ゲートまで辿り着いていた市民全員を無事に救助しました。脱出できた市民は地上で治療を受けています。状態が落ち着き次第、順にナクリスに移されて正式な登録を受けるでしょう」

デディゼンドに助けられた時のことを思い出した。彼が助けた人たちのことを思い出した。なぜなら、思考するべき機会がこんなにも明白に与えられていた。

今ここで、分からなければならなかつた。そう要請されていた。時空に、世界に。言外に、目の前の女性に。

彼女は理解した。理解できた。

少なくとも、自分のせいで彼が本当に貴重な時間を失っていたと分かつた。

そうだと分かつた。言葉にならないものが胸で生まれた。もう、理屈ではなかつた。感情の海に落ちて解け消えた。しかし無くなることなく言葉を生んだ。

「ありがとう。ごめんなさい」

傍から、心からの言葉を受け、デディゼンドは驚いた。

「ありがとう」

レイディアは感謝を繰り返した。その時にはもう、俯いて胸に手を当てて我慢していた。多くのことが一度に理解され、感情がどうにかなくなってしまいそうだった。

向こうで美しい女性が笑っていた。彼はまだ戸惑っているようだった。

命懸けで自分の気持ちを落ち着かせ、顔を上げて女性に向かって丁寧^{テイニング}に頭を下げた。

「教えて頂いて、ありがとうございます」

「構いません、このくらい。あなたは賢い子ですね」

女性は優しい笑顔で言った。

「私はサファイア メカナ。騎士^{ナイト}の最高位を預かる者です。ニルキナでは炉心と市民の救援を担いました」

「レイディア イチカといいます」

女性に応えて名乗りながら、今度は彼女も驚きを隠せなかった。

「今日は、あなたに会いたくて来ました」

サファイアは言った。

「そして、できるならあなたに謝りたい。しかし、それは許されないことです。だから、せめて、あなたに」

差し出されたのは、両手に挟む白い花。応え、そっと片手を伸ばした。

「ありがとう」

対面する女性の深い青の瞳に大切なものを受け取ったレイディアの姿が映っていた。

「あなたの幸せを心から願っています」

答えられなかった。理解した時からずっと、もう片方の手で胸を強く押さえていた。

青い蝶と共にサファイアが静かに去った後も、ずっと。前を向いて俯き、受け取ったもののかたちを胸に抱き続けていた。

二人は螺旋を描いて自転する白い階段を見て立っていた。上昇する螺旋は縦穴の向こう側に逃げていた。時間が二人に与えられていた。

「そもそも、俺は根本的に見捨てすぎた」

彼は言った。

「脱出できた者は、ごく僅かだ」

それは、懺悔のようにではなく、告示のように語られた。

緩やかに回転する真っ白な螺旋。時間をかけて二人の元に戻ってきた。

宙に浮かぶ一枚の半透明の石板は大きく、二人を乗せる時に速度を緩めたため、彼女は簡単にその流れに乗れた。螺旋は簡単に二人

を持ち上げた。

回転し、上昇した。公園が眼下になった。大樹の樹冠の隙間から放射線状に築かれた六本の街路が見えた。青白い空が見えていた。恐ろしくはなかった。高いところにいるのは苦手ではなかった。ただ、彼への感情があまりに高まるのが、少しだけ怖かった。

「俺はあまりに傲慢だ」

彼は言った。

「あまりに殺しすぎた。今はもう、手を繋ぐこともできない」

彼は呟いた。自分の手を見て言っていた。

「手を繋いで欲しい。そうしてくれると、嬉しいから」

彼女は願った。その願いと言葉に彼女自身も驚きながら、しかし言葉は止まらなかった。連なる階層を越えながら、あの雨の中の記憶を思い出しながら伝えた。

「メカナはずっとニルキナを見守っていた。地上の宇宙船を」

彼は続けた。悔い改めるように言った。

「俺も見守っていた。それなのに、危機に気付けなかった。その可能性に気付けなかった。見守っていただけだった。本当の危機から救えなかった。それが、どうしようもなく、悔しい。悪いのは、俺なんだ」

二人とも、もう何も言えなかった。

短くはない時が過ぎた。

少女のささやかな願いは聞き届けられた。

二人は手を繋ぎ、緩やかな上昇を共にした。

「見て欲しいものがある」

二人は手を繋いだまま螺旋階段から降り、細く尖る空中の渡り廊下に足を踏み入れた。燐光を抱く眼下の階層が見下ろせた。巨大な吹き抜けの中、星型の床が何重にも積み重なっていた。青い服の間たちが回廊や階段を行き交っていた。

つまり、それ以上、見るべきものは何もなかった。

レイディアを見る他者はいた。回廊の只中で手を繋いで歩いている二人と彼女の持つ白い花に目を止め、何も言わないまま足を止めずに過ぎ去っていく大人たちだった。

それを彼女は気にしなかった。繋がれている手に感覚を置いた。

網の目のように張り巡らされた回廊の一つの先端を抜け、白い巨大な壁面を潜り抜けると、花の咲き誇る庭園があった。

遮るもののない大きな球形の空間の中、何十段もの花壇が同心円状に形作られていた。赤煉瓦の通路や水の流れが色とりどりの花や芝生を繋げていた。

最上段の花壇の外縁に沿う扉は幾つもあった。しかし、花を観賞する大人たちはいなかった。花の色と水の光が輝くだけで、二人を除いて、天国の庭園は無人だった。

煉瓦の坂を下り、アーチ状の小さな橋を渡り、見たこともない美しい花の園の只中を通り過ぎた。

花園の向こう側にも直線状の空中回廊はあり、やがて、大きな半円形の扉の一つに辿り着いた。

半円の扉が左右へと消えるように開いた時、同調するように二人の手も自然と離れた。

「展望室だ。イミナミアが停留している星がよく見える」

青く輝く星が見えた。

薄暗い部屋の透明な壁と床と天井の向こう。大きな青い惑星。その全球。両手に抱えられないほどの巨大な青い天体が漆黒の宇宙空間を背景にして浮かんでいた。丸い海がレイディアを飲み込んだ。突如として光と闇の空間に立ち、彼女は自身の姿を無くしてしまっそうになった。

「キキス。地球によく似た環境の惑星で、メカナの惑星の一つ。人口は六億ほど。居住区は大陸沿岸の都市群に集中していて、他の地域の自然環境を保全している。入植から五十年が経過した、典型的な慰安型の植民星」

デディゼンドが彼女の背後から説明した。

「メカナは地球文明の理想的な未来図に近い。基本的に、こうした地球型惑星に生活圏を造っている」

波打つように広がる青い海と白い雲、緑の大地。暗い地表部分で

炯々として連なる都市の明かり。

「カルンは並列宇宙を渡る技術を持っている。それがカルの本来の用途でもあり、本質でもある。」

一万五千年前、地球で生まれた最初のカルンが宇宙層を越えて地球とは異なる惑星に辿り着き、それから数多くの文明が興隆と衰亡を繰り返した。

メカナが発祥したのは地球時間で二千二百九十一年前。他文明の吸収と殖民を繰り返し、現在の人口は一兆五百三十億まで増大している。人間の平均寿命は、約三百二十年。老化もほとんどない不老長寿の人類社会。四十一の惑星と七十五の衛星、九つの小惑星群、そして千億近くの人間を抱える恒惑星を七つ携え、巨大な文明圏を形成している」

「私も、いつかあんな星に行ける？」

「ああ。必ず」

「楽しみ」

「こんな世界が、遙か昔から造られていた。何千年も前から。フンクト全体では推定で十兆七千億を越える。それだけの人間が星の世界に散らばっている。もう誰もその全貌を正確に把握できていない。人間の数はこれからも増え続ける。宇宙は無数にあり、星はさらに無数にある」

「戦争も？」

レイディアは背後へと振り向いて尋ねた。デディゼンドは体を淡い青の燐光に染めていた。

「戦争も。何度も大きな戦争があった。今でも、何度も繰り返されている。そして、壊されてきた。何百もの惑星が。殺されてきた。今の全人類を滅亡させるほどの数の人間が。」

何千年の年月とカルの力が人間のかたちを変えた。今ではもう、

異なる文明には異なる人類しかない。戦争以外の交流はほぼ不可能になっている。人のかたちをそのまま保っているのは、メカナの人間くらいだ」

星は光り続けていた。回り続けていた。丸い大陸や海の上で綿のような雲が流れていた。暗い海の傍で街の明かりが瞬いていた。

「こんなどうしようもない世界を、知っていかないといけない。それでも、少しずついい、この世界を、知ってほしい」

「うん」

二人は宇宙に浮かぶ星と立ち並んだ。時の経過を忘れるほど、静かに青い星に見入っていた。

そして、時の果ての試練の時。

「メカナの言葉の意味を伝えるから大丈夫だ」

展望室を出てから、彼は口数を少なくしていた。

だから、大樹の幾何模様が描かれた白亜の扉を見た時、そうなのだと彼女は理解した。あの女性に続き、しかし予定された異世界の他者との面会が迫っていた。

「この先に、メカナの長がいる。ユグライグノという。神話の時代から一万年以上を生きているカルンだ」

そして、扉の向こうで小さな二人を待っていたのは、まるで皺がないだけの老人のような、石のような青年だった。

「来たか」

年若い老人は黒く荘厳な机の向こうで厳かに告げた。

硝子の下で蛇のような模様が渦巻く白亜の部屋で、老人が唯一つ黒い机の向こうにあり、室内の小階段の上から二人の入室の様子を注視していた。

デディゼンドが一步前に歩いて段を進んだ。二人の手は入室前に再び離されていた。離れないようにレイディアも足を進めた。言葉の数々は無事に胸の中に抱かれていた。白い花も。

遅れずに足を踏み出せた瞬間から、言葉が自然と心の中に浮かび上がっていた。

カル。カルン。イミル。ソラ。ビラス。

デディゼンド。オリオン。エクシ。サファイア。

ニルキナ。イミナミア。イシャ。メカナ。フンクト。

三百二十。二千二百九十一。一万五千。一兆五百三十億。十兆七千億。

エンデ エンジェル。千八百一。見えない力。見えない銃弾。

故郷の街での出来事。地球での飛行と天国での休息。彼と私の言葉と行動。

「分かるか」

それはまるで儀式のように。老いた青年が彼女に向かって厳かに尋ねた。

「はい」

レイディアは明瞭に自分の言葉で答えた。老人から放たれた言葉の翻訳が彼女の中に伝わっていた。言語という非心象の意味理解が老人の音声に重なり、なおかつ未知の言語の発音と混濁することなく彼女に対して啓かれていた。

「終局で知恵の実を得たか」

老人は彼女が胸に抱く白い花を一瞥し、厳かな表情のまま頷いた。

「デディゼンドの保護の下、思うままに生きるといい。責任者である私が認めよう。これに手をかざせ」

老人の手元から差し出されたものは、長方形の薄い板。

全くの、黒色。室内の明かりを四角に切り取り、闇を硬く投げかけていた。

「登録のため、保護者による命名が必要だ。まず、家名は、リアリオンとする」

レイディアが前に歩み出て手をかざした時、老人は言った。

「レイディアンシア」

手を差し出したままの彼女にその声は届いた。彼女の名を含む、この世界の言葉。

「レイディアンシア リアリオン。これで、お前はメカナの人間として生きる権利を得る。正式な認可を待て。私も、おまえの幸せを願っている」

老人は深く溜息をつくように言った。

退室時、扉が自ら閉まろうとしていた直前に振り返ると、老人が腰を深く下ろしたまま二人に厳粛な一瞥を投げかけているのが見えていた。

「大丈夫だったか？」

「うん」

レイディアは様々な驚きを持ち続けていた。離さないでいた。

与えられ続ける、このあまりに不思議なものを無くさないようにすることが改めての試練だった。片方の手に彼の手のかたちを、もう片方にこの世界の不思議のかたちを、その間の心に今見聞きしているものと今まで見聞きしたものの象りを感じていた。

それは喜びだった。幸せだった。

レイディアはどうしようもなく狂いながら、ささやかにおかしみながら、あの瞬間からずっと彼に善がり続けていると自覚しながら、優しいデディゼンドに愛を求めている。

そして、彼女は自分が彼に愛されていると分かっていた。それをきちんと理解できていた。それが嬉しかった。

彼女が背負うべき罪も彼女に下るべき罰もないことを彼がいつも教えてくれていた。無力であることが罪であると、無力なものが悪を生かすと知った彼女は、だから余計に嬉しかった。より深く感謝した。

「レイディアンシア リアリオン」

「ああ。それがこれからのディアの名前になる。勝手に決めてしまつて、すまない」

「ううん、いいの。ありがとう、私の名前から作ってくれて」

「リアリオンは俺の今の家名だ。デディゼンド リアリオンがここでの正式な名前になっている。それと」

「それと？」

「いや、後で話す。もう少し驚かせたい」

驚き、喜んだ。何より、彼と同じ名であることと、彼が笑っているのがとても嬉しかった。

「最初の名前を忘れる必要はない。俺も覚えている」

穏やかな笑顔のまま、横顔のまま、少し俯いて、目を閉じて、彼は言った。

「うん」

「レイディアンシア」

「うん」

「どうか、その名と共に、幸せが訪れますように」

たとえ彼が否定したとしても、それはきっと、愛以外のなにものでもなかった。

その直後の、邂逅。二人が渦巻く階段に足を乗せようとしていた時の、僅かな時空の隙間。

天の階段の終端よりも高い階層にあるテラスから美しい女性が二人を見下ろしていた。最初にデディゼンドが気付いた。高く遠いところにいるその女性は二人の視線に静かな笑みで答えた。

女性の髪は夜空で、瞳は満月の傍の深く澄んだ藍の色。

サフィア メカナ。この世界と同じ名を持つ人。彼と一緒にニルキナを。

言葉を止め、女性を見つめるだけにした。見つめずにはいられなかった。二度目の表象はとても強く心の奥に焼きついた。

「ディア」

名を呼ばれ、彼を追って階段へと足を踏み出した後も、とても強く、心に残っていた。



(1st clear revolution ; you)



螺旋階段の公園と繋がる街路の内の一つ、その道のほぼ中央、銀河が生まれようとしている模様の下。

「この先にオリオンとエキシの家がある。寄っていこう。招かれているから大丈夫だ」

現れた扉の向こうには、まず、新緑。公園の緑とも違う若々しい色が土と芝生の上で小さな繁みを作っていた。

そして、その色の向こうには、室内とは思えないほど広大な白い空間。今までのどんな場所よりも大きく開けた場所だった。

「俺は一人用の家の分しか使っていないが、イウスに与えられる家屋の空間はかなり大きい。普通はこうして箱庭のような場所を内部

に作り、その中に宮殿か城のような家を立てる」

扉を囲む緑を潜り、空中を横切る広い通路に出た。天井は空のように頭上の遥か上にあった。縦に長い円筒だとかろうじて視認できる光源が列を作って天井から下がっているのが見えた。それらは太陽のような純白の光を放出していた。だから、彼の光の魔法が自然と彼女の中で思い出された。

「ただ、オリオンとエクシは変わり者で、小さな家と森で満足しているみたいだ」

広い通路の先には、入り口と同じ新しい緑の茂みを両手に抱えた一戸建ての家が見えていた。白亜の壁が正方形に取り囲むこの大きな空間の中、家は二人が入ってきた扉とは対角線上に位置しているようで、まさにその線上の通路によって一直線に結ばれていた。

もう一つの対角線上には短い通路があり、その左右に森と言うべき木々の集まりを載せた白い基部がせり出してきた。森は向こう側にも大きく広がっていて、庭を通じて家の敷地と陸続きになっているようだった。

対角線の中央、二本の通路が直交する場所は円形の踊り場になっていた。そこから四本の白い階段が下に向かって伸び、それぞれが緩やかな曲線を描いて眼下の空間を目指していた。

空中の通路と基部の下は全て湖だった。綺麗に透き通る水が正方形の底面に湛えられていた。宝石のように煌く黄色や水色の砂粒が水底の多くの範囲に敷き詰められ、鮮やかな赤色や青色をした熱帯魚のような美しい魚が悠々と泳いでいた。

そして、下へと伸びる階段は途中の湖の水中に空洞を作り、空中の湖の透明な底を越え、さらに下へと続いていた。

四本の下降曲線のそれぞれの終点で新しい踊り場が設けられ、そこでまた数本の階段が分岐して下に向かい、それぞれの先にまた踊

り場があり、また階段が分岐し、下へ下へと続いていた。

数え切れない程の数の階段が曲線を描き、ずっと下の方で白い円柱形の建造物を囲み、青い服とは違う色彩豊かな衣装に包まれた多くの人間たちを乗せているのが見えた。

円柱の建造物はその幹からいくつもの枝を伸ばし、座席と机を備えた台座を掲げていた。人々は階段を伝って自由に台座の行き来をしていた。建造物の中に入っていく者もいた。

白い表面と服装の色彩だけの光景ではなかった。七色以上の光が階段や建造物を彩っていた。それらは眼下の人々が手元に生み出す細やかな光だった。それらは人の手元や建造物の傍に浮かぶ厚みのない枠の中で点灯や点滅を繰り返していた。向こうの街のウィンドウと同じようなものだ、とディアはすぐに気付いた。

魔法の光は星のように瞬いて白い地底を美しく彩っていた。そのような白さと眩さが遥か底まで続いていた。二人がいる上空を見上げてくる者はいなかった。

どこか、不思議と日常的な光景に見えた。天使の職場みたい、と素直に思えた。

「オリオンとエクシが作った個人的な研究所で、働いているのは二人に雇われた研究員だ。下の階からこうして繋がっている」

下を覗き込んでいる彼女に、ディズが優しい口調でそう教えた。

三度、手は繋がれていた。ただ、手と指以外が触れ合うことも、またなかった。

だから、手と指以外の多くの部分が触れ合っていた時のことが連想的に思い出された。

今は違っていた。これが彼の決めた私との距離なのだろうと思っ

た。これからはもうこれ以上はないのかもしれないと思うと少し寂しくなった。それが正直な気持ちだった。

この人はどう思っているのだろう。

その思いはつまり、今までの一方的な感謝と敬愛とは異なり、教示を望む思慕だった。話を聞きたいと思った。保護の下、どのような関係で過ごしているのかを知りたいと思った。

極端に言えば、私を好きにできるということを彼がどのように考えているのか、私は知りたいのだ、と気付いた。

しかし、それを声にすることはできなかった。心の中でしか言葉にできない不文律であり、生前の原因だった。私、という存在が存在するための条件だった。

だからこそ、不文律の過去を前提とし、これからどのように接していけばいいのか、ということ、つまり、彼への従い方について、彼に教えて欲しいと願った。



新緑の木立に囲まれた、地球の西洋風の上品な家屋。正面の扉が開いたのは、その庭先に足を踏み入れた時だった。

「いらっしゃい。待ってたよ」

少年の姿。オリオン。

ディズは頷きで答え、そのまま少年が待つ玄関へと向かった。手を繋いでいるディアも自然に彼に続いた。少年は柔らかな笑みを浮かべ、そんな二人の到着を玄関先で眺めて待っていた。

「手を繋いでる！」

甲高い声が突然響いた。

家の中から小さな男児が出てきてオリオンの足元で止まった。目の前に垂れている裾をかじり、驚いた顔で二人を見てきた。その子どもはオリオンと同じ金色の髪をしていた。顔立ちもよく似ていた。デイズは何も言わずに子どもの頭の上に手を置いた。そしてそのままやや乱雑に小さな頭を撫でた。

「世話になる」

子どもの抗議の声を無視してオリオンに言った。

「遠慮せずに、どうぞ」

少年オリオンは笑顔で二人を家の中に導いた。まだ何も言えないでいる彼女は少し緊張した様子で、対面した少年と男児を交互に見ていた。

「シズ、ガールフレンド？」

手元の子どもの方は遠慮なく聞いてきた。子どもは頭の上に置かれたままの手をもう気にする様子はなく、オリオンからデイズに移り、彼の体越しに彼女を伺っていた。

屋内に入った時、二人の手が三度離れた。

パタパタという軽い足音。廊下の向こうから聞こえてきた。

その角から姿を見せたのも、金色の髪をした子どもだった。彼にかじり付く男児よりも少しだけ小さな、女児。長い髪とスカートを
はためかせ、元氣よく向こうから駆けてきた。

そしてこちらを確認してすぐ、出てきた方に首を向けた。

「ママー、シズが女の子連れてきたよー」

それは告げ口だった。彼は内心で苦笑した。

「知ってるよ。可愛いでしょ」

返されたのは軽口だった。もう一度苦笑した。

なおも男児の視線を一身に受けていたディアは聞こえてきた声に少し驚いてしまったようだった。それも無理はないことだった。

女兒に続いて廊下の角から姿を見せたのは、少女の姿をしたエクシだった。

少女エクシ。相似のオリオンと同じように柔らかな笑顔を二人に向けた。

「いらっしやい。ゆっくりしてって」

ひとまずの挨拶をし、エクシは戸惑いを隠せないでいるディアに笑顔を向けた。

「シズによくしてもらっているようでよかった。私たちのこと、憶えてる？」

そう聞かれ、ディアは手を重ねて小さく頷いた。すると、男児の方の子どもが不思議そうな顔をした。

「お姉ちゃん、話せないの？」

「まだこの言葉を話せないだけだ。こっちの言っていることは伝わっている」

「どうして」

無垢な疑問の表情は消えなかった。エクシの腰に抱きついている女兒も不思議そうにディアを見ていた。

怯えや警戒は見られなかった。多くのものを映す大きな目。興味と好奇心、そして気遣い。見えるものは善性の発露。ディズは黙って成り行きを見守ることにした。エクシとその横に並んだオリオンも様子を見ることにしたようだった。

「お姉ちゃん、お名前は？ 私のアリア」

「僕はアクア。アリアは妹」

「ディア」

彼女は子どもたちを真っ直ぐに見て、一人でそう答えた。

「ディア？」

子どもたちは揃ってその名を口にして確認した。

うん、と彼女は頷いた。小さな笑みをつけて。

子どもたちが笑顔になった。

「ディアお姉ちゃん、こっち。座れるところ」

「こっち、こっち」

アリアが嬉しそうにディアの手を取って案内をしようとした。アクアも続いてもう片方の手を取って前に引っ張った。

ここで、この家に来て初めて、ディアはディズを窺ってきた。彼は頷いてみせた。この顔は少しでも笑えているだろうかと思いがら、彼女に大丈夫だという意志を伝えた。

「じゃあ、ちゃんとお姉ちゃんを居間まで案内してくれる？　こら、引っ張っちゃ駄目」

「はい」

エクシの言葉に対し、子どもたちの元気のいい返事が響いた。
ディアは、少し困ったような笑顔を見せていた。

「いい子ね」

「ああ」

甲高い声が遠ざかってから、ディズはオリオンとエクシに目を向けた。

いや、違う、と思った。二人の方も彼を見てきていた。今度は、彼が二人に見られていた。

「あなたもね、シズ。あの子にちゃんと優しくしてるか、心配してたのよ」

「子ども扱いするか、大人扱いするか、どっちかにしてほしい」

「うん。シズは大人だって、僕もエクシも分かってる」

オリオンは言った。

「ただ、一步踏み込むのは、これまで遠慮してた」

「でも、もう願いごとを決めたの。どうか、私たちがあの子も迎えて家族になれますようにって。シズさえよければ、いつでも。前にも少し言っただけど、私もオリオンも、子どもたちも、あなたにここで暮らして欲しいから」

二人はディズのことも見守っていた。彼の様子も見ていた。彼はそれを知っていた。

ディズがあゝの街から戻り、一人の少女を連れてきた今日という日に、遂に彼の方へと踏み込んできた。

いつかそういうことになるとは予想していた。だが、予想以上に直截的だった。正直に言うなら、不意を突かれた。

敵わないなと思い、小さく吐息について廊下の向こうに視線を逃した。

「あの子が、リアリオンの名を貰った」

「そう」

祝福の笑顔。無論、承知していたのだろう。

「一緒に暮らす家族になるかどうかは、まだ答えられない。ただ、自分にも親が欲しいと思ったことはある。もう少し、待っていてほしい」

心の奥の気持ちを吐露し、窺うと、二人は優しく笑っていた。それは人の親の笑顔だった。

「うん。分かった。待ってるから」

ディズは憧憬を覚えた。望むべき未来が見えた。そして、未来のディアの姿も。

もう一度、廊下の向こうに目を転じた。彼女が子どもたちと一緒に楽しく待っているはずだった。

全員が居間に着いてからも、子どもたちはディアから離れようとしなかった。懷かれすぎて困っているようにも見えた。

ディズは隣のアリアの小さな頭に手を置いて言った。

「こういうふうに適当に構っていてやればいい。俺も、この二人に何かを言うことはあまりない」

「シズはぶあいそだから」

そのアリアが言った。頭を触られる感触には無関心であるかのように見上げてきた。

「僕とリアは慣れたけど、お姉ちゃんは大変だね」

ディズの手が届かない、ディアの向こう側のアクアはこの上なく上機嫌だった。

「クア」

オリオンとエクシが温かい飲み物と茶菓子を運んでくるところだった。何も言えないまま畏まって座るディアに何度目かになる笑みを見せ、丁寧皿を並べてから机を挟んで向こう側のソファに腰を下ろした。

皆が揃い、エクシとオリオンが四人の子どもたちと向かい合う状況になった。

「改めて、はじめまして。私とオリオンは夫婦で、アクアとアリアは私たちの子どもよ。体がこうなのは、私たちにとってはこれが一番安定する姿だから。ディズが言ってなかったみたいね。驚かせてごめんなさい」

「長い間この姿と命を保っているという以外、僕たちは人間と変わらない。それは、どれだけ生きても。自分の生活の中で、僕たちは親であることを選んだんだ」

「私はね、二十六番目なんだよ。末っ子なの。五歳」

「僕は二十五番目。六歳。ママは、ええと」

「年齢は、ごめんなさい、今は秘密にさせて。いつか、ちゃんと教えるから」

一度に押し寄せてくる金色の言葉。ディアは静かに受け止めていた。言葉にならないようだった。たとえ言葉を使っても、彼女は何も言わずにいただろうとデイズは思った。

「家名は、リアリオン」

最後に、彼が引き継いだ。

「オリオンとエクシは俺の一応の保護者なんだ。名前を与えられた子どもとして、時々こうしてここに来ている」

「その割に、シズはいつまでも他人行儀だけどね。子どもらしくないし」

「シズね、初めてあいさつした時もこんな感じだったんだよ」

「かわいくないってママが言ってた」

「こら、もう。クアはこっち」

そうして、金色の和やかな声が満ちていった。

ディアはアリアに抱きつかれて触れ合いの相手をしていた。とても優しい笑顔をしていた。

温かな紅茶を口に含みながら、十分だ、とデイズは思った。十分過ぎるくらいだ、と満足した。

「ことば、教えてあげる」

アクアが言った。向こう側でエクシに抱きかかえられたまま、いいことを思いついた、と言いたげな満面の笑みを見せた。

母親の抱擁から抜け出してディアの方に身を乗り出した。注目を浴びる中、ディアの胸元に飾られていた白い花を慎重に手に取り、言った。

「これは、はな。花」

「花？」

それは、彼女が初めてこの世界の言葉で会話をした瞬間だった。

「そう、花！」

アクアは本当に嬉しそうだった。彼女も嬉しそうにした。

「絵本があるよ。こっち」

すると、一歳違いの兄に対抗心を燃やしたのか、今度はアリアが勢いよく立ち上がってディアの手を引き始めた。

「いいと思う」

困り始めた彼女に、ディズが言った。

「絵本なら簡単な言葉から順序良く覚えられる。メカナのアルファベットの絵本もあったと思う」

「あるよ。こっち！」

「行こうか」

「うん、だよ。ディアお姉ちゃん」

「うん」

ディアは教えられた通りに言った。一度目はアクアに。

「じゃあ、ディア」

「うん」

二度目はデイズに。綻んだような笑顔を見せた。

彼は胸を突かれた。ああ、この子のことが本当に好きだ、と思った。

「こっち」

デイズは瞼を少し下ろした。子ども二人が彼女を先程と同じように連れて行くのを見ながら、ゆっくりと後を追いつ、後ろの大人たちの方に振り返った時もまだ、胸の中に生まれた衝撃に耐えていた。

「ゆっくりしてって。泊まっていってもいいから」

「そうさせてもらって、いいか」

その返答は、彼らを少なからず驚かせたようだった。

「ええ」

エクシは言った。こちらの意志を汲み取ったてくれた、と思って
もいいような表情だった。

「本当に、あの子のことが大切なのね」

「ああ」

彼は正直に答えた。

「すまない。面倒をかける」

「いいのよ。いいことなんだから」

「いいこと、か」

「シズ」

部屋を出る前に呼び止められ、ディズは無言で振り向き、無言で聞き返した。

「気付いてる？ あなた、今、幸せそう」

そうか、と無言で答えた。それから少し俯き、苦笑した。

二人はディズのことも見守っていた。彼の様子も見ていた。彼はそれを知っていた。それを何度も確認できることもまた、幸せなことだった。

もう一度、廊下の向こうに目を転じた。彼女が子どもたちと一緒に楽しく待っているはずだった。それを何度も確認できることもまた、幸せなことだった。

「うみ」

「海」

絨毯の上に絵本を広げ、ディアがアクアに続いて発音を繰り返していた時、ディズの携帯端末の公的機密区分にその文書が届いた。

最高指令通達。

サフィアから送られたものとすぐに分かった。

文書を開いた。情報は全て彼の内側で処理された。

「92・09・14・22・10時、第一軍議局に出向して下さい。
最高位騎士の名において、イスニ？への出撃を命じます」
フイニルイウス

そうして、直ちに把握した。正確には脳内の量子領域に構築されている數位集積経路フエノソルタを携帯型の數位恒体フエノエンデルに繋ぎ、瞬時にそれらの文字情報を理解した。

ディアは子どもたちと一緒にメカナの言葉を口にしていた。その光景が彼の脳内に展開された。脳神経という、言わば元素物質セミノシアンの集積経路ソルタが彼女の姿を彼の意識に認識させた。その認識こそが意識となった。

認識が意識と合一した時、永遠は現れた。

デディゼンドはレイディアンシアを認識した。

自分に寄りかかってきているアリアの腰に手を回し、足を畳んで座っていた。高く澄んだ声を出し、アリアに笑顔を見せ、大きく広げられた絵本に目を落としていた。反対側から声を上げるアクアの方にも微笑みかけていた。よく笑う子どもたちにつられて何度も表情を明るくしていた。

「ディア」

その声に、ディアはすぐに絵本から顔を上げてきた。その時の彼女が、一瞬、まるで言葉を上手く話せない子どものように、彼には見えた。この幼い兄妹と初めて会った時のことを思い出した。そして、ほんの数日前の彼女を思い出した。

「なに、だよ、ディアお姉ちゃん」

「うん。ありがとう」

助け舟を出され、ディアは丁寧にアリアに感謝の言葉を伝えた。

もうここまで話せるようになっていた。

「なに？」

それから、教えられた通りに、デイズの方を見て落ち着いて聞き返してきた。

その言葉を聞き、穏やかな顔を前にして、彼はすぐには何も言えなかった。

「今日は泊まっていこう」

そして、万感の思いで、言った。

「ほんと？」

「いいの？」

派手に喜ぶ子どもたちを左右にして、彼女も純粹に嬉しそうにした。

きっと幸せになれる、と思った。

瞬く間に時間が過ぎた。ディズにとっては文字通りに無いに等しい時の流れも、その時だけは特別に確かに存在していた。暗くなるまで子どもたちと家中の言葉を追い、夜には豪華な夕餉のもてなしを受けた。

ディアは子どもたちとの入浴を終え、意識していなかった疲労と緊張で瞼を重くしていた。もう休むように言われて従順に頷いた。興奮して元気になり過ぎていた兄妹は寝る時も一緒がいいと主張したが、母親であるエクシが注意し、彼女は一人で静かに横になれることになった。

「ディズ」

そう呼びかけられたのは、ディアの様子を見るために、用意された居室に入った時のことだった。

明日までに言うべきことはとても少なくなっていた。とても。まだあまり話をしていないのに、とどこか不思議に感じた。

「眠れないのか」

「うん」

「どうした」

「話をしたくて」

「どんな？」

「何でもいいの。例えば、この家のこととか」

そう言い、ディアは古めかしい意匠の凝らされたベッドの上で薄明かりの中の部屋を見渡した。彼女が今いる場所から見えるものが

彼女の新しい世界だった。

中世のヨーロッパに似ている、異世界の夜。

「そうだな」

デイズは窓辺に置かれていた丸椅子に腰掛けた。そこから外の明かりが入ってきていた。花瓶に注された一輪の白い花に月明かりのような柔らかな光が注がれていた。

「この世界は、本当に地球に似ている」

彼女の方を見て言った。

「地球宇宙を取り囲む唯一の文明だから、フンクトの多くの文明圏の中でも最も地球と似ている。この家のように、特に西洋文明の影響を強く受けている。文化様式も、言語も、人間も。もちろん、家の間取りも。料理も。花も。意図的に模倣しているところも多い。懐古主義というか、故郷への憧れがあるんだろう。」

ディアが理解できないことは少ないはずだ。今の地球よりも数百年程度分、上手く科学技術が発達した世界だと考えもあっていい。ただ、宇宙船ではなく、カルの力で星々を渡るところが違っているだけだ」

「星の上で、メカナの人はどんな暮らしをしているの？」

「朝起きて、仕事をし、夜に寝る。服を着て、食事をし、娯楽に耽る。生まれ、成長し、恋をし、子どもを生み、やがて死を迎える。かつての地球人のように生きている。電力もある。規模と動力が違うだけだ。車も飛行機も、携帯端末もある」

「私も、どこかの星で暮らせるかな」

「ああ、大丈夫だ。アクアもアリアも大人になればどこかの星の下りて自立する」

そこまで言い、デイズは自分の手を見つめた。この自分がとても歪な存在だということを、ディアはもう嫌というくらい分かっているだろう、と思いを巡らせた。

イミナミアを自由に歩ける子どもは自分しかない。家屋の空間の外は優秀すぎる青い天使ばかりだ。

「ここはどこでもないような場所だ。星々の上で生きる一兆の人間を見下ろし、地上の情報を徹底的に管理し、他文明の人類と千年以上に渡って殺し合っている。それでいて静かで穏やかな、天上の白い世界。

理想的過ぎて、苛烈すぎて、これ以上のない、終わってしまった場所。だから、いつかは星で暮らすのが、普通なんだ」

「いつか、私がどこかの星に行く時、案内してくれる？」

彼女は笑っていた。彼の今や未来を問わず、穏やかに、寂しそうに、辛そうに、独りでそっと笑っていた。

どうしようもないと思い知っていた。デイズは自分自身の絶望を持ってはいたが、その絶望はディアのものではなく、彼女は彼女の絶望を持っていた。

救済者として彼女を慰めるのは愚行だった。自分はどうしようもない殺害者であり、助けることしかできない人間だった。そのことは既に伝えていた。

「ああ。分かった」

だから、小さな声と言葉で答えることしかできなかった。



気付いた。気付いてしまった。気づきたくなかった。

彼は私を従えるつもりはないのだと。あの時のことは、全部、私の一方的な愚行だった。そういうことだったんだ、と分かった。

そして、彼はきつと、もう、満足している。彼は、きつと。

彼はきつと、私をこの家族に引き合わせたことで、もう満足している。今日のことはあまりに明らかな意図があった。

彼は、きつと。

考えたら駄目。咄嗟に考えを遮った。心がその考えを拒絶した。

「私は、何もしてあげられないの？」

代わりに、そんな愚かな言葉が、出てきてしまった。



「どうして、そう思うんだ？」

「ううん。そう思っただけ。思った、だけ」

デイズは動揺していた。予想していなかったことだった。

ディアは突然取り乱したように言葉を連ね、不安定になってしまっていた。

だから、立ち上がって彼女の傍に行った。それからもう、その

場から遠ざかることはできなくなっていた。

彼女が儚げに見上げてきた。さらに動揺した。そして、心を、奪われた。

「私は、あなたに命を預けたから」

彼女は言った。

「私がこうして生きているのは、全てあなたのおかげ。あなたが助けてくれなかったら私はあのまま犯されてた。どこにも逃げられなくて、きっと死んでた。殺されたかもしれない。それなのに、あなたは私の命の恩人なのに、私はまだ何も出来ないまま」

「感謝を、受け取っている。十分すぎるくらいだ」

「駄目。私はまだ何も出来ていない。何も。私は自分の命をあなたに預けた。私が死なないために。わけの分からないことが起きて、みんな死んで、それでも助けられて。私は、自分のために、私はあなたのものになると誓ったの。あなたに守ってもらうために」

涙が流れていた。ディアは顔を隠すように俯き、それでも手で覆うことはせず、流れるままに流していた。

「それなのに、あなたは私を守ってくれただけじゃなかった。優しくしてくれて、気遣ってくれて、でも、私に、なにかしたい、なんて、思っていないみたいで。本当に同年の男の子みたいに思ってしまうくらいに、優しくしてくれて。でも、私、私は、そう思ったら、駄目なの。勘違い、したくない。このまま、お礼ができないなんて、私は、嫌」

この時、正しく理解できた、とディアは自分を信じられた。今、自分は彼女と同じ表情をしているのかもしれない。そう思った。

ディアは囚われていた。あの街での惨事は過去のものではなく、今も彼女を苦しめていた。そして暗い夜も彼女を捕えていた。彼女に逃げられる場所はなかった。

保護をしたいという衝動に耐え、この家の子どもにしたように彼女の頭に手を乗せた。もしくは、自分がそうされたように。

「恩返しをしないと気が済まないのか？」

優しく、月の髪を撫でた。内心の吐露を終えたのか、彼女はとも静かになっていた。そのまま撫で続けた。

しばらくそうしてから膝を屈めて地球の瞳を覗き込んだ。円らな瞳で覗き返された。ディズを見ていた。

信頼と敬慕の情を受け取った。彼は自己を卑下せず、正面から受け止めた。

「個人的なことだが」

覚悟を決め、やや唐突に軽く溜息をつき、彼女の隣に腰を降ろした。視線も夜光の滲む床に落とした。

「確かに、俺の心はもう自分が勘違いできないくらい、どうしようもなく子どものものじゃなくなっている。でも、体がまだ子どもなもの、見ての通りだ。ディアより背が低くて平均より少し成長の遅い十二歳の体だ。精通も、まだだ」

こんな告白をすることになるとは、と逆に可笑しく思いながら告げた。

「だから、そういうことだ。年を取っていても、大人として生きていても、ディアになにかをする、なんて思えない。体がそういう時

期なんだ。意図的にそうしているところもある。でも、ちゃんと、無垢な頃だ。だから、そういうことだ」

ここまで言うと、さすがに羞恥心が出てきていた。自分の口が苦笑するのを止められなかった。

「平等ではない関係で交わされるものや生まれるものを否定しない。こうしているだけでも、とても多くのことを生んでいると、俺は思う。これ以上のことは、今は、気持ちだけで十分だ。ありがとう」

それが、彼に言えることの全てだった。正しく言葉を失えた。後にはもう、何もせずに待つしかなかった。

「うん」

やがて、ディアは答えた。

「よかった」

デイズは大きく安堵の息をついた。

「だから、まあ、そういうことだ」

大きな声を出し、彼女を抱えて、大げさに横に倒れこんだ。音を立てて二人でベッドに寝転がった。

突然のことに彼女が驚いていた。

そのままの姿勢で、笑って言った。

「俺に何かされないと気が済まないというのなら。俺が望むのは、ディアと一緒に寝ることくらいだ。いいか？」



ディアの答えは決まっていた。あまりに心が揺さぶられ、止めどなく涙した。

ディズは笑っていた。あの時のあの人の笑顔に似ている、と彼女は思った。

思っていたら、また抱きしめられた。涙した。彼の胸に顔を埋めた。誰かにこんなにも強く抱きしめられたのは生まれて初めてだった。

少しだけ抱き返した。さらに涙が溢れてきた。

その後。

その後、ディアは彼の傍で安らかに眠った。

彼に何かされないと気が済まないのなら。自分自身の言葉が温かな夢の中で生まれ、残響した。それが私という人間の真実だろうと考えた。預けた命のことについては、まだ上手く話せていないけれど、と心残りも覚えながら。

明くる日。

明くる日、目覚めた時にはもう、傍に彼はいなかった。

パパとママと一緒に行ったの、と子どもたちから教えられた。

そして、あの人が家に来ていた。昔からの約束なんです、と静かに言った。驚いて取り乱すべきだった。考え付く限りのことを尋ねるべきだった。しかし、結局は切れ切れの感謝しかできなかった。

白い花と共に奥の居室に残された。

朝を過ぎる頃には子どもたちの言葉が分からなくなっていた。彼の魔法が消えた理由を考えるのも嫌だった。すると、男の子も女の子も、もうほとんど何も言わずに温かく寄り添ってきてくれた。笑顔と身振りで元気付けてくれた。熱いくらいの体温が私を支えてくれた。いつしか三人で眠りに落ちてさえた。

手を合わさず、十字を切らず、両手を重ね、窓の外を見て彼の無事を祈り続けた。

両親の無事を祈る兄妹たちと一緒に、静かな家の中で、夜が再び訪れるまで、ずっと。



3. I s n i 3

3. I s n i 3

3
—
1.

(I n t o t h e n e t w o r k ; A r k s t a r)

「第421全球戦争。

戦場はイスニ?。イスニ星系第3番惑星。メカナ宇宙層の外縁空
域。原始的な植物と両生類が繁栄する緑豊かな星。

イスニ?以遠のメカナ彩色圏ミカンダ圏外より飛来し、イスニ?への降下
侵攻を行ったシジャ文明との軍事衝突。領域拡大を阻害し合う、異

なる人類たちの全面戦争。

開戦より16時間80分00秒現在、戦火によって惑星地表の24%が蒸発、熔解。炸裂する光熱の余波を受け、森林の35%は焦土。大陸沿岸の海洋は蒸発、沸騰。激戦地は西北大陸東沿岸部へと移動。

シジャは現在までに巨兵約1,450,000体、鬼兵約310,000体を投入。内、巨兵880,000、鬼兵110,000体が戦死。

メカナは機兵約12,310,000体、空中戦艦2,317隻に加え、騎士^{イウス}124名を投入。内、機兵3,200,000超が大破、戦艦229隻が轟沈。戦艦搭乗員263名が戦死。

シジャの主戦力は、まず巨躯と光熱を誇る多数の巨兵たち。地上から高空まで幾重もの隊列を組み、怒涛の掃射を行う。

そして、上位巨兵と上位鬼兵。上位巨兵は下位の巨兵よりもさらに高く聳え、空を占め、山河を融解させる強力な爆雷を放つ。1,450,000の内、既に38,924体を確認。それらの光だけでメカナ機兵のおよそ1,100,000が大破。

メカナの主戦力は機動と圧倒的物量を誇る機兵たち。七つの惑星の工場群で製造される、メカナ文明そのものとも言える金剛の武力。

さらに、上位機兵は使者^{カルン}の手によって個別製造される上位種。12,310,000の内、74,441体の投入を数える。

機兵を操る者は、射手^{キシト}と呼ばれる機甲の操り手。機兵操作特化の數位使用者^{フエノカルン}。各前線の旗手を勤める空中母艦に座し、逐次投入される機兵を精密操作する。その騎士^{イウス}階級は20名を数え、各一名が数百名の部下を揃え、各々の大隊が最大で上位機兵数千体、機兵数十万

体の一括遠隔操作を行う。

しかし、シジャ上位鬼兵がメカナ上位機兵を狙う。3,917体を確認。配下の鬼兵を伴い戦場を疾駆。遊撃を行う。上位機兵大破の半数は上位鬼兵によるもの。

さらにシジャは開戦11時間後と13時間後にそれぞれ最上位巨兵88体を投入。それは単体で大陸の地殻を剥がし得る、シジャの最大戦力の一種。赤黒い彗星。宇宙真空より無限に墜ち続ける者。山脈を崩す光を容赦なく幾重にも瞬かせ、聖天使の彩色圏ミカンダをも溶かし、核と彩色ミクアの光熱で機兵の布陣を壊滅させる。現在までに機兵840,000体、上位機兵5,300体を破壊。それらのほとんどが蒸発という消滅。

絶望的な火力に対し、100名のメカナの騎士イウスが最前線で破壊を振るう。騎士は異界人類の殺戮者にしてメカナの天上に君臨する地上兵力の統括者。絢爛たる花翼フアルグで天空を裂き裂く戦士。小さきヒトのかたちを保ちながら、大陸を砕く巨人を貫く。

彼らを守護するのは333体の最上位機兵。女神サフィアが造り出す、天使兵とも呼ばれる護りの力。騎士にのみ制御を許す、天上の輝かしき機甲。守護する騎士の命となり、大火と光熱に耐えてなお光り輝く。

120の外に、真に高位の戦士が3名。聖天使エクシ、賢王オリオン、英雄タイナクトー。高位騎士ニルイウス。メカナに七人のみ存在する頂点。惑星を砕きうる者たち。三名以上の投入は決戦を意味する。それぞれが盾と翼、弓矢と砲、剣と槍を司る戦神。盾と翼を成す彩色ミカ圏ンダは黄金の光が鎮座する高空母艦を中心として大気圏の68,09%を保持。極大の威力を持つ鋸と刃は先陣を切って巨兵の幕を裁断する。多くの天使を従えるその姿は、もはや光の彼方。

100の騎士と総じて、およそ450,000の巨兵と76,0

00の鬼兵、22、297の上位巨兵と3、191の上位鬼兵を殺戮。さらに最上位巨兵116体を殲滅。守護者たる最上位機兵の124体を失うも、開戦時より未だ戦死者なし。

最後に数えられる者は、死の騎士^{イウス}、デディゼンド。

開戦当初より最前線に並び立ち、二丁の拳銃と二体の天使兵、二枚の翹翼^{ウィルグ}、そして独自の強力な電磁透過の魔法系式^{カロン}を用い、無色の銃弾によって上位巨兵761体と上位鬼兵101体、最上位巨兵39体を殺害。176の悪夢の内の39が彼の破碎。

主武装は対をなす2丁の拳銃。繰り出されるのは死の魔法。射撃対象の質量もエネルギーも零にする。防御不可。口径、距離、方位、射撃数、全て自在。着弾座標上の存在を中心部から球状に絶対的に消滅させる。無色の大気の中から殺戮する。巨人たちでさえ一瞬で殺す。引き金が一度引かれる度に、異界人類たちの神経中枢と動力中枢が全く同時に破壊される。

解析不可」

(Back to the subject ; Death
send)

血肉の地獄。戦場。死骸の混じる土砂。肉の土砂。血の海。敵兵の死体と機械の残骸。敵も味方もなく、臓物もパーツも、大も小も無意味。それらを混ぜて沸騰する大地。灼熱する大気。焼かれた血と肉が赤く濁った空に千々に舞う。

迫り来るものは幾万の死骸を跨いで破滅の光を吐き出す巨人の隊

列。灼熱と黒の鎧をまとった万死の行進。彼の敵であるもの。同じ起源を持ち、決定的に異なる文明を持つ人類。ヒトという生物種。シジャという異世界、異なる文明圏に生きる者たち。数千年の断絶により、戦争以外の疎通は不可。侵攻される以上、関与は不可避。後は、委ねるか、否か。

否。互いに殺し尽くすしかないと決定している。

シジャは人が人を喰らう魔人世界。侵略は地獄の噴出を意味する。幼稚で悪夢的な光景。

ああ、早く帰りたい、と彼は思った。

ああ、早く帰りたいのか、と彼は気付いた。

翅の翼を背負い大陸上空を舞台に乱舞。天を衝く巨人の頭部と胸部を虚にする。巨兵の小隊列を率いる七百六十二体目の上位巨兵を撃破。躊躇なく射撃。外装肉体の巨大な血飛沫を噴き上げさせる。

天険の高峰を溶岩に変える爆雷を察知し、左のセイレンでその中心部に小さな穴を開け、七百六十三体目の敵の目前で破裂させ、足を止めた空中隊列の中央に位置する上位巨兵の頭蓋と心臓を右のセイレンで打ち抜き、そのさらに後方上空に三十体の上位巨兵と一体の最上位巨兵よりなる高空殲滅隊列を捉え、巨兵たちの隊列を置き去りにして後方の機兵に任せ、背後に二体の最上位機兵を伴い、空を馳せる。

赤黒い汚泥の上空を飛び続ける。

電磁透過の迷彩を纏い、シジャ彩色圏圏内の北極圏へと侵入。立ち上がる上位巨兵の殲滅隊列へと突入。

銀の翅翼で飛翔しながら無色の視覚と最上位機兵の數位恒体、戦

時集積情報網の情報を総合、解析し、全方位を緻密に俯瞰。

最上位機兵の自律防護と後方からの支援砲撃を盾にし、さらに単騎進軍。光速の0・365%で戦場を鋭角に疾駆。引き金を引く。真球宇宙に浮かぶセイレン宇宙から当該球面三次元空間に対して破壊の圧力を照射させる。六秒の内に三十一の内の六を殺害。

殺戮する。

言葉なく、空を切り裂き、空を穿ち、硬い音を残す。そして光なく、光を越える死を呼ぶ。

開闢を見下ろす時空から破壊の槍を照射する。空を裂く。空を穿つ。敵を殺す。それを繰り返す。宙を飛ぶ。虚を穿つ。敵を殺す。敵の砲火と鮮血を防ぐ必要すらなく、慣性を制御し、宇宙空間をも見据えて空高く飛ぶ。

隊列中央の最上位巨兵は両翼を伴って中間圏まで上昇。デディゼンドの予測位置へと絨毯爆撃を行い、多重の光線砲撃を放つ。

同時、突如として宇宙空間に接する高高度から七体の鬼兵が飛来。漆黒の槍を携えてデディゼンドに迫る。

最上位鬼兵。背丈三メートルの彼らが有するエネルギー量は最上位巨兵と同等。漆黒の鋼の肉体と凝縮された破壊の力。

極めて強力に隠蔽されているはずの彼の位置座標をほぼ正確に襲う。未知の索敵手段により位置を看破したと推測。

警告。最上位巨兵が大地を蹂躪する巨体と爆撃の能力のために機動性を犠牲にしているのに対し、鬼兵の最上位種は薄く強固な無色ロミクアの鎧による超高速戦闘駆動を可能とし、さらには數位フェノと内積アイルに特化。その兵数はシジャにおいても希少。近接戦闘能力は騎士イウスを凌駕。

おそらくはデディゼンド抹殺のために投入された切り札。シジャは単騎戦力こそメカナに劣るが、最上位種の兵数は圧倒。一度に切られた、七枚もの切り札。エース。加えて最上位巨兵の圧倒的な砲火がメカナの後方支援を沈黙させる。

〔定義破棄…座標0001から2261〕

死地。敵対象を空間に束縛する無色ロミクアの圧力も最上位鬼兵には一秒以上の時間を得られず。鬼兵殲滅隊列は空に刻まれる精密な鋭角駆動と爆発的な機動でデディゼンドをシジャ圏内の奥深くへと押しやりながら肉薄。

全方位へと最大出力の無色圧力を撒く。未だ伏せていたデディゼンドのエースの1st。

7
「座標点定義…數位集積経路内座標空間…座標0001から0007」

〈実行R…照射座標指定…指定数七…参照…座標0001から0007。〉

実行Rより0.9704秒…完了〈

反応の遅れた鬼兵に対して0.9704秒以上を得る。一体の上半身が潰れ、消滅。

圧力から逃れた鬼兵たちの猛攻に応じ、左の銃を掲げ、銃口から無色のエネルギーを放つ。セイレンではなく純粹な無色ロミクアの直線破壊力線。外積カオンによって空間エネルギーヤーテイの放出を直線状に制御。彼のエースの2nd。迫り来る一体の左腕を間一髪で破壊。敵の無色ロミクアの鎧の貫通に成功。

しかしここで、生き残っていた二十四体の上位巨兵と一体の最上位巨兵が集中砲撃。十三の閃光がデディゼンドの足元に集まる。天空を焦がす大火。地平の此方に夕日が生まれる。焦点から逃れつつ最上位機兵一体を防護展開。無色障壁を合わせてこの身の蒸発を防ぐ。

〈実行R…照射座標指定…指定数64…参照…座標0008から0071〉

今までにない精度。無色力線の使用により射撃位置が特定されたと断定。電磁透過の優位性は完全に失われたと判断し、広範囲の無^{ミカンダ}色圏の展開に切り替える。半径八十キロメートルの空間圧搾。敵の彩色圏^{ミカンダ}を削り取り、光速空間転移による至近距離への敵の増援を防ぐ。

直後、未だ灼熱に燃える空間と最上位機兵を破り、六体の最上位鬼兵が包囲攻撃。四方に体躯を展開していた機兵は大破。四肢断裂。胸部破碎。

〈実行L…照射座標指定…指定数64…参照…座標0072から0135〉

〈実行Rより0.9704…完了。〉

実行R?…照射座標選別…選別数1…座標0010〉

機兵の最後の力による防護と隠蔽の中、デディゼンドは既に八方へと置いていたセイレン照射指定座標に対して右の引き金を引く。最大指定数と座標選別によるセイレンの空中地雷。有効範囲に入っていた一体の殲滅に成功。エースの3rd。

風穴の開いた包囲網を突破。態勢を整えながら追跡する隊列に対し、その到達予測空域にさらに六十四の座標指定。

〈実行Lより0.9704秒…完了。〉

実行L?…照射座標選別…選別数2…座標0099・0113〉

左の銃の引き金を引く。

有効範囲内の二体も含め、敵五体は射撃の一瞬前に照射空域から散開、離脱。恐らくは中空に曝された左手、引き金を引く指の動作を見て射撃を回避。恐るべき看破と機動。

デディゼンドは即座に両腕を伸ばし、二つの銃口の周囲に数千も
の無色の凝縮点を並列展開する。引き金を引き、一千本の力線を輻
射状に同時発射。無色力線の多重射撃。一体の殺害と二体の部分損
壊に成功。残り四体。

デディゼンドは光速1・183%で離脱。十六時間に渡る戦闘と
連続照射のため、両腕にあるセイレン制御の集積経路ソルタが焼き付き始
めている。戦闘続行は危険。

しかし生き残った最上位鬼兵が予測を上回る速度で猛追。万全の
二体が回り込み、大気を裂く暴風で衝撃を与える。加え、片腕の一
体と片腕片足の一体が背後から急襲。二本の長槍が無色の防壁を突
き破り、残り一体の最上位機兵を刺し貫く。頭部爆砕。体勢を崩し
て地上に墜ちてゆく。デディゼンドは地表へ駆け下り交戦空域を一
時離脱。

その時、さらにもう七体の最上位鬼兵が高空より襲来。無色圏ロミカンダの
外側から射出され、大気圏を突き抜けて飛来。直上から数百の光線
を放ち、空域と赤土の荒野を千々に焼く。

死線。

応戦。単騎にて敵十一体を迎え撃つ。拳銃を空へ向け、左右の無
色力線を空に置く。先の一十の弾幕は不可。十に百に散らし、胸部
の無色集積経路ロミクアソルタを温存。上空から放たれる致死の光線は無色障壁で
辛うじて屈折させて逸らしつつ、赤い地表を背に擦らせるようにし
て疾駆。

無色力線の射撃はせず、空砲のまま引き金を引く。しかし敵は回
避運動を取らない。おそらくは両腕にある集積経路ソルタの微小なエネ
ルギーの発生を見破り、死の弾丸の制御部として特定している。手に
持つこの拳銃が絶対の因果装置として機能していることは、無論初
めから気付いている。

迫り来る絶望に抗い、左右の腕を交差させ、左右から襲い掛かる
二体を射撃。回避運動を取らせ、致死の刺突を掻い潜る。

〈実行R…照射座標指定…指定数11…参照…座標0136から0146.

実行Rより0.9704秒…完了.

実行R?…照射座標選別…選別数0…指定座標破棄〉

構わず、力線射撃の狭間で右のセイレンの引き金を引く。

上空の敵十一体が一齐に散開。

牽制に成功。敵は指定破棄の魔法系式カロンは識別できていない。貴重な時間を稼ぐ。

デイズンドの切断を狙う二体とその後方から追撃しようとする二体に無色縛鎖。4th。鎖状に極限まで硬く凝縮させた無色のエネルギー。蛇の大群。対象の輪郭という界面を空間ごと押さえつける無色圧力とは違い、絞殺も可能。敵の頭部や手足を捕え、固く縛りつける。

止めよりも高速離脱を優先。しかし上空の七体は依然として健在。放たれる光線がデイズンドを襲う。

〈実行L…照射座標指定…指定数64…参照…座標0147から0210〉

全方位最大出力圧力放射。包囲を狭める七体への応手。対応され効力は薄い。体を回転させながら力線を連射。天地を逆にし、地平を回し、縦横無尽に直線を置く。

〈実行R…照射座標指定…指定数1…参照…座標0211〉

〈実行Lより0.9704秒…完了〉

左の座標指定が完了。

回避運動と力線射撃で敵隊列をその座標に誘導する。あるいは決

定されていたかのように、彼を追っていた敵七体の内の三体がその座標群に飛び込む。

〈実行L?…照射座標選別…選別数3…座標0153・0189・0204〉

一瞬だけ無色圧力で押さえつけ、左のセイレンを照射。三体を消滅させる。5th。脳内に構築された数位^{フェノ} 集積経路^{ソルタ}による超高速演算は鬼兵殲滅隊列の機動を凌駕。計六体。

そして光速の5・008%の飛翔。6th。上空へ。光線を放った最後の者たちの至近から無色力線を撃つ。七、八、九体目を撃墜。十体目の頭部を全力の内積^{アイル}の臂力で蹴りつけ、爆砕させる。反動を利用し反転。後方へと飛び、メカナ彩色圈^{ミカンダ}への退避を目指す。

しかし、亜光速飛行の限界。早くも集積経路^{ソルタ}と体が軋む。更なる離脱行為は不可。減速。応戦しなければ死。

残る四体が驚くべき加速を行い、同時に四方から迫る。長槍の円弧。応じ、デディゼンドは力線を連射。弾かれる四本の長槍。数位^{フェノ} 集積経路^{ソルタ}の演算は体内の内積^{アイル}の精密制御にも有効。最も大きく反れた一本の横を抜け、四体全てに無色縛鎖を与えながら包囲から逃れる。

〈実行Rより0・9704秒…完了〉

右のセイレンを照射。目標は間際まで自身がいた空域。亜光速飛行の遙か前、左のセイレン照射よりも前から指定していた座標。誘導に成功。0・9704秒が経過。

最大口径のセイレンで当該空間の物質とエネルギーを消し潰す。半径約百三十六メートル。7th。隙間なく空間を埋める巨大虚空。一体の離脱が間に合わず、首から下を失う。残る頭部を即座に力線で蒸発させ、止めを刺す。そしてもう一度距離を置いて敵戦力と対

峙。

〈実行L…照射座標指定…指定数64…参照…座標0212から0275〉

〈実行R…照射座標指定…指定数64…参照…座標0276から0339〉

動作停止。滞空継続。

生き残った三体から戦慄の感覚が伝わってくる。デディゼンドは無言。

戦闘の中の沈黙と停滞。一秒未満のそれはしかし、確実に時間を進め、彼らの死を呼ぶ。

〈実行Lより0.9704秒…完了〉

〈実行Rより0.9704秒…完了〉

三体が一斉に馳せる。幾度かは彼を驚かせた戦速で迫る。

回避後、デディゼンドは無色の圧力を放射。特にその内の一体、右上方から迫る鬼兵へと圧力の密度を増し、一瞬間、動きを完全に封じる。

〈実行L?…照射座標選別…選別数1…座標0255〉

〈実行R?…照射座標選別…選別数0…指定座標破棄〉

完了していた座標指定の内の一つを選別し、左の引き金を引き、頭部と心臓部を破壊の虚に落とす。予測攻撃はなおも有効。

圧力から逃れた二体はデディゼンドの目前で交差。前方に出た一

体が正面からの突撃を敢行。力線を回避し身を捻りながら切り掛かる。そして無色の障壁に触れる直前に上空へ離脱。敵の牽制。前者の背に隠れていた残る一体の迫撃。

片腕片足のそれは、初めに左腕を穿たれ、続けて右足も失わされていた鬼兵。下方からの切り上げ。デディゼンドは力線を上下に置きながら後退。敵二体は彩色によって力線を屈折減衰させ、回避に成功。上下から高速の回転を加えて躍りかかる。更に交差。首や両手、銃にも多くの死線を引く。多重の牽制と幾重もの鋭角軌道。幾つもの残像を重ね、力線と縛鎖を掻い潜る。

空を切り刻む軌跡と力線。激突を繰り返す螺旋。

三本のベクトル（ファクス）と無数の衝撃が戦場の空間を駆け巡り、天と地の物質を刻む。メカナ彩色圏まであと千五百メートル。しかし二体の鬼兵がデディゼンドの眼前に死線を引き続ける。セイレンの牽制を用い突破口を探るも、敵の執念は狂気すら生温い。

メカナとシジャの境界に沿い、三者が絡み合って南下。シジャ彩色圏内の戦場を通過する。巨兵の隊列の最中に衝撃波を残す。敵の陣地へと進軍する機兵の大隊を掻き乱す。戦線を刺し貫く。乱れ合う破壊線は今や一体。

そして、セイレン。

〈実行L?…照射座標選別…選別数1…座標0952〉

數位集積経路の演算網が遂に鬼兵の一人の下腹部を捉える。

下半身をなくした敵は彼の敵の目前へと迷わず飛び込み、自爆。自ら破裂し、莫大な熱と光と呪いを残す。デディゼンドは咄嗟に最大出力の無色障壁で防御。しかし、一瞬間、動きを封じられる。

片腕と片足のない、最後の一体。背後に回り込み長槍を投じる。渾身一擲。絶対的不可避。槍はデディゼンドを追尾する外積をも宿している。

頭部を失い墜落していた最上位機兵が鬼兵の死角から飛び込んで

くる。光速27・651%。不屈の機甲を自壊させる捨て身の跳躍は主を殺すものを目標とし、主の代わりに正しく槍の一撃を受ける。大破。

デディゼンドは身を振り、天使を貫いて威力を落とした槍を回避。槍が至近で爆発。薄皮一枚の最終障壁で防御。

最後の鬼兵が貫き手で突き進む。デディゼンドも渾身の力線射撃で応戦。

敵の右腕も力線に貫かれ破碎。しかし敵はそのまま額からデイズに突貫。あまりに熾烈なエネルギーを散らし、額部分の最終障壁と拮抗する。

へ実行R…照射座標指定…指定数1…参照…座標1003.

実行Rより0・9704秒…完了

『ここまでか』

やがて、左足だけとなった鬼兵はシジャの言葉で独白した。デイズはその言葉を理解していた。しかし彼は答えず、口を閉ざし、敵をただ見ていた。

『死神め。これほど小さな身で、どこまでの死を与えるというのか』

死は十分に満ちていた。彼らは額を合わせ、目を合わせていた。瞳の见えない敵の目はどこまでも黒かった。デイズはセイレンの引き金を引き、自爆される前に頭部と心臓部を潰した。

ガン。

至近で照射の余波が鳴り響き、彼の眼前で黒い目が消滅した。

鬼兵の残る体軀が光となった。破壊されなかった腹部に巨大な光体^{ミヒ}が現れたのを彼は見た。シジャの彩色光体^{ミクアミヒエル}。鬼兵の死の直後に転移されてきたと分かった。

一瞬でその場所に出現した。生まれたばかりの鬼兵の骸に。命の火が絶えたばかりの、死せる量子領域^{ソラ}への物体転移。デイズが張り巡らせる無色圏^{ロミカンド}の中への彩色の空間転移を可能とした未知の現象。

未知の魔法系式^{カロン}。

その帰結は、膨大な光熱の破裂。

即座に懷から一個の無色光体^{ロミクアミヒエル}を投じた。8th。

二極の光体^{ミヒエル}の炸裂。だが、あまりに大きな光彩の圧力が透明な光を圧倒した。瞬く間に空に溢れた。空を彩った。

空間を埋める色彩。開放熱量は最上位巨兵の大火の数倍。それだけではなく、空間を彩るほどの高密度なシジャ彩色圏^{ミカンド}を撒いた。

デイズの光体^{ミヒエル}は降りかかる光熱と彩色^{ミクア}を無効化して彼の命を守ったが、強烈な空間エネルギー^{ヤーディ}が彼の力を消し去り、全てを染めた。

「警告。位置3298・4792・0003を中心とした大型光体^{ミヒエル}の炸裂、及び3298・4792・0532での大規模な核融合反応前駆状態を計測。

核融合反応無効化魔法系式に対する未知の防壁が構築されているため、反応無効化は困難。高い確率でシジャ彩色圏^{ミカンド}を内包した惑星規模の小型恒星が大気圏内で発生すると予測されます。

臨界まで、およそ00・00・09」

デイズは3298・4792・0003にいた。光の爆発の中心にいた彼は無色^{ロミクア}のほとんど全てのエネルギーを失っていた。度重なる戦闘で両腕と脳の集積経路^{ソルタ}も過負荷状態に陥っていた。辛うじて翹翼^{ウィルグ}と電磁迷彩を働かせる力は残されていた。

無色圏^{ロミカンド}を閉じ、赤い空間の狭間に姿を溶かし、頭を振り絞り、高

度0532地点への攻撃とメカナ彩色圏^{ミカンド}への離脱の成功度について演算した。

完遂はどちらも不可。届かない。長距離を誇るセイレンの射程圏を持ってしても、今の状態と状況では。明らかだった。

爆心地の周囲に六十四体の上位巨兵が出現していた。地平線に沿って全方位から遠く彼を取り囲んでいた。

彩色圏^{ミカンド}への光速空間転移。迅速な勢力配置。デイズのいる空域を光で焼かないのは包囲を万全とするためか、浮遊するだけの彼の位置を看破できないためか。

ただ、少しでもエネルギーの動きを見れば大火が襲ってくるのは容易に予想できた。そして、その大火から逃れるだけの速度を持ってないことも分かっていた。無論、火を防ぐだけの力はどこにも残されていなかった。

「ここまで、か」

独白し、赤い天上を仰ぎ見た。小さな太陽が生まれようとしているのが見えた。望遠。陽子の揺り籠を取り囲む、鬼兵よりも小さな三つの人影。

シジャの僧兵。最前線の巨兵や鬼兵とは異なり、後方で機略と尖兵を操る権力者たち。死神を滅ぼすために遂に現れ、彩色^{ミクア}を宿す小型恒星生成の魔法系式^{カロン}を実行。非常識なほどに高速。十秒未満というのはいえなかった。

どのような秘術を使ったのか。しかしそれでも、恒星が完成すると同時に転移できるとしても、上位の僧兵が三名であっても、肉体と精神、集積経路^{ソルタ}が持たないはずだった。

彼らも死ぬ気だろう。デイズは思った。核融合反応の無効化は間に合わないだろう。メカナが有する魔法系式^{カロン}を以ってしても無効化できないということは、その防壁はシジャが保有していた切り札ということだ。

本来ならば恒惑星攻略まで温存されていたかもしれない。無色の
迷彩やセイレン集積経路を看破する解析力、無色圏内部への空間転
移も含め、魔法系式の応用においてシジャは全く侮れない。彼らと
天使たちとの戦いが楽しみだ。

[00.00.03]

オリオンの砲弾とタイナクトーの投擲は間に合わない。エクシは
自分が支える彩色圏に全力を注いで味方を守らなければならない。
騎士や射手は星の破滅からの離脱が最優先。打開策はない。時間が
あまりに足りない。

太陽で星の過半を融かしたとしても、幾つもの切り札を失ったシ
ジャはこのまま敗走するだろう。メカナは最終的に勝利できる。

しかし、俺はここで死ぬ。

こういう終わりは予想していた。十分にありえる死に方だった。
このように戦死するだろうと想像できていた。

「シズ！ ディアが待ってる！」

オリオンとエクシの声。途切れかけた集積情報網を通じて、音声
情報で、そのまま、重なって聞こえた。

[00.00.01]

ここまで来たのは。

生きるためではなく、殺すためだった。

ああ、そうか、とディズは理解した。初めて、ディアの地獄の一端に触れられたような気がした。

「定義破棄…座標0001から1003」

「座標点定義…フェノソルタ數位集積経路内座標空間…座標0001・0002」

〈実行L…照射座標指定…指定数1…参照…座標0001〉

〈実行R…照射座標指定…指定数1…参照…座標0002〉

〈実行Lより0・9704秒…完了〉

〈実行Rより0・9704秒…完了〉

セイレン照射座標指定。

同時に^{フェノソルタ}大腦の數位集積経路と胸部の^{ロミクアソルタ}無色集積経路を限界まで稼動。両手と二丁の拳銃の挙動を完全制御。

十のマイナス四十三乗秒のプランク秒単位の同時で両手の引き金を引く。二つのセイレンを同時照射。

目標座標は手の届くほどすぐ傍の空中の二点。0・001メートルも離れていない。セイレン半径は0・68メートルと0・69メートルに指定。髪と足先が内側のセイレンに接する。自分を二重に殺すように、同心円状に二つのセイレンを置く。

異なる二つの銃口から全くの同時に放たれて重なり合ったセイレンの発現は無効化される。破壊の破壊。それは矛盾。この次元では

発生しない現象。そのため、本来は一つの銃口で破壊範囲が重なるような座標と口径の指定はできない。

生まれる空白は概念の矛盾による現象の破綻に近い。

それをこの時空に置き続ける。一瞬の照射ではなく、銃の引き金を引き続け、矛盾の空白と絶対破壊の圧力を放ち続ける。不断の連続照射。限界は両腕の集積^{ソルタ}経路が焼き切れるまで。

故に、セイレン結界。9th。高次圧力の殻に身を包み、あらゆる物質とエネルギーに対して不可侵の空間を創る。拒絶境界。全ての事象から遮断される。

予測持続可能時間、およそ、8.38秒。

8.38秒が経過。限界を超える。

10.00秒が経過。赤熱。

20.00秒が経過。発火。

25.76秒、両腕が同時に破裂。

その一瞬前に、両腕のセイレン集積^{ソルタ}経路を同時に停止。それは可能。破裂の予兆を捉え、プランク秒単位で二つの照射を同時に止める。そうしなければ死。それは可能。真正銘の最後の力。

成功。セイレン結界消失。意識は残存。白い視界。後は。

委ねるか、否か。

3
—
2.

生きて、と故郷で言われた。

生きなさい、と宇宙で言われた。

生きてほしい、と天上で言われた。

皆、生きろ、と言ってきた。

やっと、生きたい、と自分で思えた。

あの子にも、そう思わせたい。



(2nd clear revolution ; I)



4. A nameless room — The words world

4. A nameless room — The words
world — Realions home

4 — 1.

目を覚ました。意識は不鮮明だった。自分が横たわっていること
はかろうじて把握できた。

「デイズ」

横からあの子の声が聞こえてきた。

「デイズ」

もう一度聞こえた。それは自分の名だった。

ディアの顔を見ることができた。彼女はこちらへと身を乗り出してきた。レイディア。レイディアンシア。地球の少女。

「ディア」

呼びかけに答え、反応を返そうとして、体が動かないことを認知した。両腕がないことも。次第に意識が鮮明になってきた。苦痛はなかった。

「よかった」

ディアに頭を抱きかえられた。優しく。とても優しく。涼やかで柔らかな感触がした。

白い天井。清潔で簡素な白い部屋。地球にもありふれているように、地球ではありえない、恒常的な漂白。

きっと、病室ですらない一室。窓も機器も照明器具も一切なく、そして、二人きりだった。

「すまない」

自然とそのような言葉が出た。出せた。本心だった。

「ここは」

言いながら、無意識の内に數位集積経路フエノソルダを集積情報網アルグスタに接続しようとし、そのための魔法系式カロンの一つも動かせないことを認識した。一瞬で全て思い出した。あの戦争と、生まれようとしていた太陽について。

「そうか」

認識の遅れを認める、そんな言葉を口にした。過去と現在について把握した。戦闘中に意識を失い、ほとんど全ての機能を失い、こうして負傷兵として臥床している。あれから一体何日が経過したのか、その判断もできなかった。

無理に起き上がろうとした。それは衝動的な動作だった。突然のことに驚いたディアが押しとどめようとしてきた。

「大丈夫」

そう言った。優しく言えた。

「起こしてほしい」

力を借り、半身を起こした。

簡素な白衣を身につけていた。外傷の跡も包帯もなく、治療は完了していた。ただ、肘と上腕部を失っていた。

ディアはこの小さな背中を支え、この小さな肩に額を乗せるように、自分と同じ角度で体を傾けていた。
一緒にいたいと思った。

「ディア」

子どものように呼んだ。優しく言えた。

呼ばれ、ディアは顔を上げた。涙の跡が見えた。
少し体をずらし、そっと彼女にキスをした。

「生きて帰ってこられた」

唇を離し、恥ずかしさをごまかすように笑った。

「生きて帰れない覚悟をしていた。本当に、すまない」

彼女にもたれるような姿勢のまま、心から謝った。

「ううん。いいの。もう」

賢い彼女は察してくれた。勝手な行いのどちらについても。

問いただされても怒られてもよかった。しかし彼女は無償で許してくれた。許された。許されて、しまった。

「ディアのことを軽く考えているわけじゃない」

だからこそ、彼女に甘えなかった。そうでなければ、死地から生きて帰ってきた意味はないと思った。

「君が教えてくれたこと、願ってくれたことをずっと考えていた。それと、俺ができることも」



「本心と言うなら、俺の気持ちはとても簡単だ。君を好きにしたい」
「私はそれでいいの」

それは心からの本心だった。

「ありがとう。それが確かにディアの本心なんだろう。でも、それだけじゃないはずだ。そのことについて話し合いたいんだ」

「私はあなたに命を投げ出したの。あの時の私を、私はなかったことにできない。私もずっと考えてた。私は途切れることなく続いていて、あの時の私と今の私は同じ私だから。私はあなたに助けられて、ここにいるから。いい、悪いじゃないことだから」

「でも、それだけじゃない。ディアは自分を抑え込んでいる」

諭すようにディズは告げた。

「普通なら、あの街でのことを思い出さないように心安らかに暮らすのがいいんだろう。ここを出て行くまでは、ディアをあの家に残けようとしていた時までは、そう思っていた。でも、見て見ない振りをすることはもう、できない。」

このままだと、ディアはそれを心の奥底に隠して、捨てられずに育ててしまう。今は忘れているのかもしれない。言葉にできていないのかもしれない。このまま忘れられるのかもしれない。このまま言葉にならずに消え去るのかもしれない。でもどうしても、このままそっとしておけない。ディアを傷つけることになっても」

「どうして」

「気付いたから。自分もそうだったと分かったから。ディアを冒涇するとしても、分かったと言わないといけない」

「私は」

「死を、願うこと。それは、誰も殺せなかった絶望から」

それは、どこまでも優しく、どこまでも温かな言葉だった。

「俺のせいだ。俺が余りに簡単に人を殺したから。異常なやり方で殺し続けて、見ていたディアの心を壊してしまった」

目を閉じ、祈るように顔を伏せた。

ああ、そうか、と理解した。

そうだ、と認知した。自分の記憶と感情を。

それは、壊れる、壊れる、という叫びだった。

死ぬ、死ね、という絶叫だった。私の場合は、しかし、初めから誰かを殺そうとも思わなかった優しさによるものではなく、自分で殺したくても殺せなかった無念さによるものだった。

あまりにもあっけなく殺されていく大人たちを見続けた。彼らを殺す彼の隣で。

彼らは一瞬で背中に穴を開けられていた。心臓を潰されていた。即死。どうやって殺されたのかも分からず絶命しただろう。私にも分からない。分かっているのは、彼が引き金を引いた、という原因と、彼らが背中中に穴を開けて死んだ、という結果だけ。

非人間的な方法で殺された彼ら。その死体は非人間的なもののように感じられた。彼らは壊れた、と思った。

そう、決定的だったのは、あの地下での出来事。

死体の他に、ビルの地下には生きた男たちもいた。食べ物のあるところから離れられないようだった。向こうから突然襲い掛かってきた。彼はその一人を殺した。その結果を見て他の男たちはすぐに逃げ出した。ひ、という声。それから私が自由に動いた。暗闇も男たちも怖がらず歩き回った。彼は私の後を付いてきてくれた。

自分はそのことについて言葉にできる状態ではなかった。

しかし、今なら言葉にできる。

彼はこんなにもあっけなく人を殺せるのだと。そして、そんな彼の隣にいる私は絶対に安全だと。男たちは死ねばいい、と。危険なものは無くなれ、と。

私は彼であるようなものだ、と。

そして、彼に命を投げ出したあの時に繋がる。生きてきた世界を失い、身をも投げ出したあの夜に繋がる。連続している。

つまり、今の私も。
なんという、傲慢。

「私は、あなたを利用するために？ それも足りなくて、体を捨てて、あなたになりたいと？ 私の代わりに、あなたに人を殺してもらうために」

「同一化を望むのは原始的な欲求だ。罪じゃない」

「でも、許されることじゃない。私は人殺しになりたいと思ったの。最後には、自分を殺してでも」

「殺人を否定しないことも原始的なあり方だ。極限の状況では、許される」

「私が、子どもだから？」

「そう。君は十二歳の子どもだ」

言われ、自分の体を見下ろした。男でも女でもない、子どもの姿をしていた。性別は関係がなかった。そのことを改めて知った。

「俺が子どもの姿をしているのも悪かった。子どもが簡単に大人を殺すという光景がディアの世界を歪めた。俺は大人の姿で君を助けるべきだった」

裸で雨に打たれた時のことを思い出した。

おかしくなるのは仕方がなかった。誰も彼もが。どうしようもなかった。誰も彼もが。泣きたくなった。泣こう、と思った。泣けなかった。その心は失われていた。そうだった、と思い出した。

そうだった、と思い出した。

おかしくなったのは私だった。どうしようもなかったのも私だった。

「私は、何もできなかった。大人たちを殺したくても、その力がな

かった」

心は失われたのではなく、自分で捨てていた。何度も響いた銃弾のない銃声へと、死と一緒に投げ捨てていた。

しかも、それは初めから、そうだった。

初め、肥満の男に連れ込まれ、女性たちがレイプされている光景を見た。

もうすぐ、私もこの中の一人になるのだと、理解した。

それが、最初からあった、真実だった。

「私たちを苦しめた男たちを殺すには、あなたについて行くしかないかった」

「それを非難しない。結果として、正当な判断だった。生き残るための」

「でも、生きるためじゃなく、殺すためだった。あなたに助けられた時からずっと。私はあなたに殺されてもいいと思ってた。そうではないとあなたについて行くことはできなかった。生き残りたいだけなら、恐怖があるなら、女の人たちと一緒に逃げた。命を預けたのに、最後にはあなたに殺されてあなたになりたいなんて、ひどいことを思わなかった」

「ディアは悪くない。その選択と意志に罪はない。俺は、尊重する。あの時の覚悟も」

彼の声が強く響いた。

「俺が最も歪な存在だ。こんな人間は本来ありえない。俺が最悪なんだ。ディアも犠牲者だ。俺に殺されたようなものだ」
「それは」

応えるように、強く声を響かせた。

「うん。私はあなたに殺された」

それが新しい真実だった。認知した。この記憶と感情を。

「でも、あなたが、生き返らせてくれた」

だから一瞬で肯定できた。瞬く間に認識が裏返るのを強く感じた。

「私は、力があれば、大人だったら、あの男たちを殺していたことを、認めます」

彼はその言葉を聞いた。そして頷いた。その認識を受け入れる、というように、はっきりと。

私は救われた。

救われていた。今までに、何度も。何度も。

「大人だったら、むしろそういう言い方はしない。あくまで正当防衛を主張して、明確な殺意は否定する」

でも、最後に、彼は現実に苦笑いを見せた。

「暴力を否定するのに殺人は否定しないというのは子どもの考え方だ。生きるために殺す、動物の世界に近い」

「うん。私は暴力はいや」

「俺も、暴力を否定する」

「ディズも、子どもなんだね」

だから、私も笑って言った。

「そう。見ての通りの子どもだ。大人じゃない。年を取った子どもが、俺だ。でも、ディアが考えていることとは違うことが、一つある」

「なに？」

「俺は殺人の正当性も否定している。暴力も殺人も悪だ。少なくとも、その罪悪を認知した上で、人を殺してきた」

「それは、どうして？」

「理由は、守るために。立場は、大人として」

「それができるのは、強いから？」

「強さは必要だ。でも、それだけじゃない」

「それは、なに？」

「矛盾を抱えられる心を持っていること。それが、人を殺して人を守るための条件だと思っている」

「矛盾」

「善悪の矛盾。その彼岸にあるものをあえて目指そうとせず、ここで、苦しみながら生き続けること。生かし続けること。それは、そのまま、大人の条件でもあるかもしれない」

考えた。矛盾と、彼が大人であることと、死の希求と、自分のその衝動について。ここで話されていることを振り返り、彼に応えられる言葉を探した。

「私は、これから、どうすればいいの？」

結局、それが、始めから発せられている、どうしようもない問いであるかのようにだった。

「ディアは意志を示してくれている。後は、俺の問題だ。君の態度と認識に応えないといけない」

けれど、申し訳なさそうな顔をしたのも彼だった。

「悪いのは俺だ」

小さな吐息。俯いて言った。

「すまない」

「ううん。迷惑をかけているのは、私だから」

口から出た、その言葉の真実性を、その時その瞬間に認識した。

私は彼にどうしようもないほどの迷惑をかけていた。

どうして今まで気にもしなかったんだろう。愕然とした。

次いで、恥ずかしさで顔が熱くなった。なんという厚顔無恥。無知。私は自分を何だと思っていた？

悲劇のヒロインか、お姫様？

「ごめんなさい」

消え入るような声で言った。顔を見せることができなくなった。認識するべきことが多すぎる、という言い訳と、どうしてこんな時に気付いたのか、という思いが溢れてきた。溢れ、関連し、彼との触れ合いの記憶が津波のように押し寄せてきた。

私は、今まで、何を？

「ディア？」

「ごめんなさい」

言葉を繰り返した後に、彼はそつと顔を寄せてきた。様子を深刻に受け取ってしまったのか、とても優しく丁寧な動作だった。勘違いではなかったけれど、そのせいで余計に恥ずかしくなった。

「正直、ディアをどうしようか、まだ迷っている。いろいろな選択肢がある。そして、どれもがディアの将来を決定的に左右する。それぞれの選択の先にある未来図は不可換で、取り返しは付かない。本心は単純だが、その通りに出来るわけがない」

まだ言葉を返せない状態だった。顔を伏せ、彼の言葉に聞いていた。本心の通りにしてくれても構わない、と本心が囁いた。それは確かに幼い覚悟だった。薄く目を閉じて認めた。

「ディアの衝動を受け止めたい」

ああ、そうか、と理解した。ここに至る、と。

それが、ディズの願うことだった。きっと初めから、彼はここを目指していた。

なら、私は。

「私も」

それはきつと素敵なこと。そう思った時には顔を上げて言い放っていた。強く言えた。驚く彼の顔を見られた。恥ずかしさの余熱を持ったまま、次は丁寧に言えた。

「受け止めたい。あなたの気持ちを教えて」



問われ、ああ、そうか、と理解した。元氣さを取り戻したディアがこう応えてくるのは自然なことだと。

自分自身の気持ちを顧みた。

とてつもなく大きな衝動があった。自明なことだった。それを持っているから彼女の衝動を理解できたと言ってもよかった。

言いたかった。伝えたかった。

ディアは気付いているだろうか、俺の気持ちを。予想しているだろうか、信じられないようなことを言われる事態を。立場の弱い自分を縛る、呪いにも似た言葉を。

「デイズ」

彼女の言葉、彼女の声。柔らかさ、温かさ。軽さと細さ。そして、優しさと強さ。体と心のかたち。その全て。総体以上のもの。

「言えない」

言えるわけがなかった。

「取り返しの付かないことになる。ディアの可能性の多くを奪う。未来図は不可換で、取り返しは付かない」

「いいの」

「どうして、そんなことが言えるんだ」

「子どもだから。子どもは、元々そういうものなの。家族も住む場所も決まっっていて、取り返しが付かなくて、最初から可能性が奪われている。学校も友達も全然思う通りにならない。それでも、私たちは、選ばされても、きつと未来を選べる。そういうものなの」

「それでも」

「それでも。選ぶの。可能性が無限にないってことくらい、私くらいの子どもならみんな知ってる。無理やり決められた可能性の中から、それでも、自分のしたいことを選んでる。

うん。したいことをするの。それはどんなに不自由でも変わらない。できることは違うかもしれないけど、どんなところでも私は私のしたいことをするから。

だから、信じて。私はどんなところでも、どんな時でも、同じように頑張るから」

宝石のような美しさを見た。

その美しさを信じたと思った。信じた。だから、自分もしたいことをすることにした。少し彼女に寄りかかった。

「好きだ」

心から告げた。

「君に会えて、よかった」

抱きしめられた。腕がないから何もできなかった。

「私も、あなたに会えて、よかった」

耳元で告げられた。この世の驚きが溶けているようだった。

「ありがとう」

「ディア？ 泣いているのか？」

「うん」

泣いていた。そして小さく体を震わせていた。何故か彼女の方が感情を溢れさせていた。

「どうして、ディアが泣くんだ」

「教えてくれて、ありがとう」

動けないままだった。一本でも腕があれば抱き返せるのに、と残念に思った。

「ここまで分かって、どうして気付けなかったんだろう。私が子どもだから？ 今まで、言葉にすることもできなかった。悔しいなあ」
「どうしたんだ」

優しく聞いた。そうすることしかできなかった。

「私は今まで何をしていたんだろう。新しく分かることばかり。本当に、どうして」

そこまで言葉を零し、ディアは腕を解いて見つめてきた。ぽろぽろと涙を零していた。

彼女が落ち着くまで待つことにした。彼女は少し乱暴に袖で目じりを拭った。それでもしばらくの間は零れ続けていた。

「私も、あなたが好き」

ディアは謙虚な微笑みを見せた。あの街での彼女の笑顔を思い出した。

「本当。これが、嘘偽りのない、私の気持ち」

否定や疑いの言葉が口にされるのを防ぐように、彼女は言った。

「私を助けてくれて、ありがとう」

そして抱きついてきた。精一杯の力で抱きしめてきた。

そこまでされて、やっと、顔を赤くした。赤くなるのを感じた。

ここまでされるとは思っていなかった。激しい感情と熱が彼女の中から伝わってきた。

間近で見つめられた。もう、何もできないでいた。腕があれば、とは思ったが、腕があっても何かができるとは思えなかった。

顔にそっと触れてきた。

何かを確かめているような所作。心のかたちを見られているような感じすらした。全く不快ではなかった。心地のよい感触だった。

静かな時間が流れた。多くの言葉を忘れ、無言と瞳で彼女を呼んだ。

多くの言葉無くし、素直に言った。

「これからも一緒にいてほしい」

「うん」

額を合わせた。甘い雰囲気になてのキスはできなかった。本当に嬉しそうな彼女の笑顔を見ているだけで幸せだった。

感情に任せたものではできたのに、と内心で独白した。

「後は、腕のことだけだ」

幸せなひと時を過ごした後、静かに伝えた。

「本当は、すぐに治せるんだ。このままにしているのは、むしろ慈悲だ」

「うん。少しだけ聞いている。デイズが決めることだって」

「そう。失ったままなら、もう戦争には行けない。子どもとして生きていくことになる」

集積^{ソルタ}経路は肉体と共にあり、肉体と共に失われる。しかし、両腕のセイレンの集積^{ソルタ}経路だけは特別だった。腕が細胞から修復されるなら、その量子^{ソラ}領域が再びあの宇宙と繋がる。死が再生する。

腕があった部分を見た。失われたものと失えるものについて、もはや語るべきことはなかった。

「自分の腕を取り戻したい。しかし、このままディアを置いてはいけない。だから、もう一つの方法を選ぶ。見ていてほしい」

「うん」

腕があったところを見た。ディアも一緒に見てくれていた。二人の視線が細い腕と小さな手の平を見ていた。

自分自身のかたちを思い描いた。損傷のない肩部の外積^{カオンソルタ}集積経路と腹部の元素^{セミンソルタ}集積経路を稼動。人体組成の情報は全て腹部に保存されていた。10th。

両腕部を生成。空気中の成分も取り込みながら、肉と骨と神経を形作った。

途切れた腕の先と融和させ、腕と手を再構成。朝の花の蕾が花開くまで。ディアは息を潜めて見つめていた。

〈経路接続…真球宇宙から当該球面宇宙…再構成…L・R〉

真球宇宙の外縁に存在するセイレン宇宙からの強制自動接続。修復された両腕にセイレン制御の集積経路ソルタが自動形成された。

セイレン宇宙はかの多次元真球で創られた透明な宇宙星。量子の揺らぎすら無い高压真空。そして、万物の始原にもなりえるエネルギー。創世の星。

両腕の集積経路ソルタはそのエネルギーを限定的にこの球面三次元宇宙に放出するための二本の細い経路。放出されるものは、銃の引き金との因果を以って現れる無色の銃弾。

そして、セイレン宇宙の中心に存在するもう一つの複写符合ピアスこそが星の光の源だった。かつてのデディゼンドが創り上げた第二の複写符合ピアス。球面十一次元の宇宙を俯瞰する果実の片方。もう一本の螺旋。

セイレンは破壊のためにしか使われない燐光。彼方の螺旋こそが本体。完成されたもの。セイレン宇宙すら泡沫から生まれた光。

〈実行Ω…降下座標指定…参照…座標A〉

真球宇宙から自分自身の複写符合ピアスを降ろした。胸の奥深く、無色ロミクアの中心でもあるメカナの複写符合ピアスを標とした。

この意識が世界の果てに届くまで。

ディアはここにいた。この名もない部屋が果てになった。デディゼンドの複写符合ピアスが胸の中の量子領域ソラに入り、メカナの複写符合ピアスと接合した。二つの力の実が可能無限の領域で二重螺旋を描いた。

複写符合ピアスと共に降りてきたセイレン宇宙は宇宙の狭間でほぼ全てが消失した。しかし、無色に光る宇宙の一抹がここまで届いて量子ソラ

領域に溶け、新しい炉心を漂わせる海となった。海は炉心を守り、炉心の記憶を光として漂わせる不可侵の深淵となるだろう。

その対価として、セイレンが失われた。両腕の集積経路^{ソルタ}も消失した。もう、頭上に死の弾丸はない。

デディゼンドが再び一つとなった。

全身に生命の集積経路^{ソルタ}が張り巡らされた。旧来の集積経路^{ソルタ}が分解され、全く新しい経路が零から再構築されていた。水も酸素も必要としない体へと生まれ変わった。

かつて形作られていた、一億年の命を再び手にした。

第三の選択。力だけを再び得るのでもなく、あのまま無力でいるのでもなく。

選べるものとして、全てを一旦失うとしても、全ての体を持って生きていくことを選んだ。

ただ、こうして、この手で彼女を抱きしめるために。



それから数日が過ぎた。ディズと二人であの家に戻って黄金の家族に迎えられた後、私は体調を崩してしまい、あのまま私の部屋になった居室で横になって過ごした。その間に私の名前が正式に登録され、彼と一緒にこの家で暮らせることが認められた。

朝早くにお見舞いに来てくれた可愛い兄妹が嬉しそうに教えてくれた。

家族、と。

「ここで暮らそう」

端的に言うと、デイズは私の弟になった。

さらに数日経ち、安らぎと共にささやかな倦怠と記憶の遡及を経た。

まず、私は部屋の中で思考の自由を取り戻し、そこから自由な思考が始まった。

あの時、静かに時間が流れる間、満たされていくデイズを私は見ていた。あの時の彼は、まるで。

心の中心に私という確かなものを得たと確信できる過去があるとするなら、それはそう、あの時しか有りえなかった。

4-2.

物心がついた頃から、私の考え方は女子よりも男子に近かった。体は女性のものだけれど、心は男性的だった。同級生の女子たちの

価値観は理解できないことの方が多かった。小さなことや馬鹿らしいことで大騒ぎをしている男子たちの方がよく理解できた。私も、そうだったから。大声で喚いたり遊んだりはしなかったけれど、小さな頃から私は女子が好みそうにもないものに熱中していた。ファッションや異性の話題はどうでもよかった。

初恋も、上級生の女子生徒だった。

彼に触れられることは嫌じゃない。全く、嫌じゃない。もし私の体も男子だったら、手を繋ぐ、という触れ合いすら彼はあまり求めなかっただろう。だから私の体が女のものでよかった。触れ合いを受け入れるだけで好意と感謝を示すことができる。

では、もし彼が女性だったとしたら、私たちはどうなっていただろう。まず、彼が女性で私の心身が両方とも男子だったとしたら。彼との性別が逆転するだけで、今とあまり変わらない関係が作られただろう。それどころか私としては一番葛藤の少ない世界になる。彼が女性で私がこの私なら、葛藤が生まれたとしても、それはそれで、幸せな関係があっただろう。

彼が男性であり私が男性的な女子であるこの現実にはかない、運命的な意味がある。それが分かる。

しかし、ここからが問題になる。この世界で、私は彼に対してどうすればいいのだろう。

彼はまだ知らない。私の心が本来の男子のものに戻っていると。

彼は、こんな私のどんなことを受け入れてくれるだろう。

私は男性的な心と女性的な心を持っている。持っていると感じていた。今、心は男性的な方に戻っている。あの時の出来事をきっかけ

にして。女性的な方は再び眠りについた。私が心から落ち着き、もう大丈夫だと判断したのだろうか。私を翻弄する非現実的なことはもう起きないと。起きたとしても、男子の心で乗り越えられると。

存在しないと思っていた私の女性的な心。女子の心。少女。今になって分かったことだが、それは無理やり暴かれていた。初めて目を覚ましていた。気持ちの悪い男にさらわれ、レイプされそうになった時に初めて。きっと、初めて殺意を抱いた時に。

そして彼に助けられた。あまりに突然助けられ、女子の心が途方もなく驚き、眠る機会を失ってしまった。だからそれから私の心はずっと女性的なまま、年相応の少女のままだった。非現実的なことは女子の私がそのまま受け持つことになった。女性的な心を剥き出しにしたまま過ごし、男性的な心、男子の心は奥深くで横たわっていた。あるいは男子と女子の心を表裏とする心が裏返っていた。もし彼が女性だったらあまで女の子らしい振る舞いはしなかったと思う。断言できる。つまり、私の少女の部分は男性の他者に強く影響を受けている。

受けていた。今はもうここにはいない。これは、寂しさ？

私は母から普通の少女に見られるように生きてきた。そう求められていたから。それが母の、というより、故郷の人たちの一般的な常識だった。昔ながらの男らしさと女らしさが子どもに当てはめられていた。私はそのことに疑問を持ってはいたが、あからさまに拒んだりもしなかった。大人しい、従順な娘だった。

新しい母や妹を参考にするなら、この家での女性的な振舞い方も故郷とあまり変わらないようだ。事実、現在のところは新しい家族に対して見た目通りの少女として振舞えている。立ち直った少年の心で順調に行動を保っている。眠りについた少女の代わりに。

では、彼に対しては？ 彼と二人きりになって何かがあった時、

私の女子の心が目を覚まして男子の心と入れ替わるのだろうか。それとも、永い眠りについたまま、もう二度と目を覚まさないのだろうか。

分らない。この数日でそのような機会はなかった。彼に触れられることは嫌じゃない、と私は思っているが、実際に問題になるような機会は、実はまだ一度も訪れていない。

私は体調を崩してしまった。彼とこの家に帰ってきてすぐに熱を出して寝込んでしまい、それからずっとこうしている。心が入れ替わった反動かもしれない。心と体が擦れ合い、熱を出したのかもしれない。今も頭が少し朦朧としている。

彼は毎日この部屋に来てくれている。看病は新しい母のエキシがしてくれている。自分にできることがないと彼は少し不満そうに言っていた。私は彼と話ができるだけでもよかった。母に裸を見られるのが恥ずかしいのは秘密だけれど。

毎日の朝と昼と夜、彼と数分ずつ話をした。最初に、もう戦争には行かないと教えられた。行きたくても行けなくなった、と彼は自分の手を見ながら話した。それから、病氣中に話せることは少ないので、当たり障りのない会話をした。私の体調のこと、彼の体調のこと、食事のこと、服のこと、この家のこと。新しい家族のこと。天気のことを話題にできないのは少し困った。この家の外は大きな天井で、昼はいつも柔らかな光が満ちていたから。これからは絶対に雨の音を聞けないというのはなんだか寂しかった。もしかしたら雨や雪の降る日もあるかもしれないけれど。

会話の間、彼はいつも私と距離を取っていた。ベッドの横の椅子に座って話をした。私に触れるとすれば、それは決まって手か額のどちらかだった。もちろん、使われたのは彼の手。それ以上の接触を彼はしなかったし、しようともしなかった。彼はそれで十分そう

だった。

私はそれを不満に思っている？ 二人きりになった時、触れ合いの感じ方とその時の自分の心を確かめたいのだろうか。

それを認める。私は彼との男女の間の触れ合いについて確かめたいと思っっている。そして、あのことにしてもっと話し合いたいと思っっている。私が決めた私の生き方について。彼が私を好きだと言ってくれたことについて。私もあなたが好きと私が答えたことについて。これからのことについて。

彼に触っで欲しいと思っっている。手と額以外の部分を。具体的に言っくと、キスをして抱きしめてほしいと思っっている。多くの部分で触れ合いたい。

今、私は女性的な考えをしてるだろうか。

私がこのままの私だとして、そして彼が男性であることも不変のことだとして。

例えば、彼が成人男性の姿をしていたとしたらどうだろう。彼の外見が十代後半くらいだったら？ 二十歳位だったら？ 三十歳位だったら？ それ以上だったら？

それはつまりどういう問題だろう。性別だけが問題ではないということだ。

好ましい関係というものがあり、それは私自身の好みだ、ということ。本能にも直結している好みの傾向。傾き方と向き方。彼が二十五歳くらいなら、私は問題なく彼を好きになれるだろう。

この場合、私の年齢の低さはあまり問題にならない。少女だった時の記憶は損なわれてない。だから分かる。私は、いつでも変容可能。今なら、同年齢の女子の会話が少しだけ理解できるかもしれない。

とはいえ、現実的には彼は二十五歳どころではなく、体は私と同じ十二歳。彼がキスと抱擁までしかないということが分かっていて、本当は安心してゐる。とても安心してゐる。それが私のもう一つの本心。私は心の奥底では年上の男性を恐れている。男の凶暴さとセックスを恐れている。きっと、とてもひどく。今は冷静に考えられてゐるけれど、私はとてもひどく恐れている。悪夢が怖い。その理由は、言うまでもない。

彼との出会いはとても幸運なものだった。ありえないこと、非現実的な現実。奇跡と言つてもいいはず。彼が彼でよかった。途方もない迷惑をかけてゐることを申し訳なく思うと同時に、彼の言動や内面を愛しく思う。

愛しく？ それは子どもの私が使つていい言葉ではない。では、好き、と思うことはいいのだろうか。あの時の私は少女で、今は少年だ。女子の記憶は持つてゐるが、考え方は男子と変わりがなく、偽りなく、今の私が彼を好きだと思ふのは、どうということだろう。

つまり、私は連続してゐる、と認めること。

人の心は断続的なものだということは知つてゐる。けれどその一般的なことを私は抛り所にしない。言い訳にしない。私は私が連続的な存在であると知つてゐる。私は連続的な存在である。それを私の第一の事実にする。そうであるように努力する。

だから矛盾も齟齬もない。心の変化も連続してゐる。裏返ることはあつても途切れることはない。今までの私と今の私は連続してゐる。

る。

今までの私を私は認める。私は私だった。

私は私である。

裏返っていた心が元に戻ったのは彼と一緒にこの家に帰った翌日のことだった。きっかけはあの時だったけれど、そうだと確信できたのは、正確には、思い出したくもない悪夢を見てこの部屋で目を覚ました時だった。私は一人で寝ていた。起きた時も一人だった。窓の外の天井の照明は夜明け前の薄明さになっていた。冷たい汗で体中を濡らしながら、不思議と、少年に戻った、と分かった。あれから今まで生まれて初めて少女になっていたんだ、とその時初めて気付いた。それまでは身も心も女子になっていたことに全く気付いていなかった。小さい頃、物心がついた時の、その心が男子のものであったことすら。心が性別を持っていた事実を。かつて私が少年であり、惨劇の中で少女になり、またこうして少年に戻ったという事実の全てを一度に理解した。理解しなければならなかった。違う色の涙が流れた。あの朝まで、私は自分自身を全く認識できていなかった。

その朝は彼とどう顔を合わせていいか分からなかった。けれどその朝にはもう熱を出してしまっていた。朦朧としていたので子どもが女であろうと男であろうと大差はなかった。

結局、少し調子が良くなってからも彼に対する態度は変わらなかった。長い間二人きりになれば分からないけれど、キスをされて抱きしめられたらどうなるか想像もつかないけれど、少なくとも今の数分間の日常的な触れ合いには私の性別は影響していない。

私は今でも彼が好きだ。

性別に関係なく。しかしやはり、女性の体を持つ子どもとして。体も男性のものだったら、私の方からもこんなに自然に手を繋ぐことはできないだろう。やはり性別の違う体が触れ合うということには特別な意味がある。今の私でも、特別な、言葉にできない意味を感じる。もちろん、同姓同士が好きになっても同じような意味を感じるかもしれない。ただ、子どもの私に分かるのは、私の初めての恋は触れ合いを求めない淡いものだった、ということくらいだ。憧れだったのかもしれない。

とにかく、私の心は完全に男性のものではないようだ。あくまで男性的、と言えるもの。せいぜい、大人になりきれていない男子の心、と呼べるもの。体の影響を受けているのか、もう一方の心の影響を受けているのか、あるいは単に未成熟であるためか。

けれど、別にそれほど複雑に考えなくてもいい。男性に恋をする少年もいる、ということを私は知っている。体の問題を除くなら、今の私はそのような精神構造になっているのだろう。

体の問題を含めるなら、乱暴に言って、性同一性の葛藤に気付いてそのまま心理的な同性愛を認めたショウジョ。裏の裏は表。

ただ、私は私でよかったのだろうか。今の私でいいのだろうか。心も女性的になるべきだろうか。女子の心に戻して、ずっとそのままでいるべきだろうか。

愚かしいことのようにも感じるけれど、私が少年であることに
ついて、彼に告白するべきだろうか。

そして、ニルキナのこと。

悪夢を見ている。ニルキナの悪夢を。昨日の夜も、おとといの夜も。その前の夜も。最初の夜も。言葉にしたいくないほどの悪夢。私が無力な少女であることを強いられる最悪の夢。PTSDの発症。

そういう悪夢を毎晩見ていることをまだ彼に言えていない。彼は大丈夫かと毎日聞いてくれるけれど、私はいつも大丈夫と答えている。特に朝は吐き気がするほどに全然大丈夫じゃなくても、無理に作り笑いをしてごまかしている。顔が青ざめているのは体調がまだ良くないせいになっている。嘘というわけでもなく、毎晩悪夢を見ているせいで体調を崩しているというのが事実と言ってもよかった。眠れないせいで睡眠時間も少ない。食欲もない。

それを隠している理由。もちろん、今の私は少年だから。やせ我慢をしている。悪夢なんかに負けたくない。見栄を張っている。恥ずかしさも大きい。せっかく助けてくれたのに、という罪悪感もある。現実には起きなかったことで心配を掛けたくない。気に病んでほしくない。安心していてほしい。馬鹿なことをしていると思う。でもどうしようもない。それが私だから。これが私だ。私は昔からこうだった。

ただ、心的外傷についての具体的な知識を持っていないので、故郷での記憶がこれから私にどう影響してくるのかよく分からないのが不安だ。

心の傷とその不安は、決して小さくない。

どちらの問題の解決を優先するべきだろう。私の性的葛藤と心的外傷について。それとも、どちらも容易に問題にすべきではないのだろうか。このまま幸せでいてもいいのだろうか。

時間が大きな問題だとは理解している。これほど幸せな時間をこのまま過ごせるのなら、私の葛藤や悪夢は些細なことだ。いずれ時が解決する。数日や数週間では苦しみから解放されないとしても、数年の内には、きっと。少なくとも、この二つの問題については、私が成人する前にはほとんど問題はなくなっている。そう予感できる。

なにより、彼と新しい家族がいてくれるのだから。恐れることはない。

従って、より大きな問題は、やはり、私の衝動と、私の決意。あるいは願望。

死を願うことと彼は言った。その通りだと私は思った。まず、私は凶暴な大人たちの死を願った。私による死を。つまり、殺したいと思った。殺人の罪の問題については置いておく。一人で答えを出していい問題ではないと思うから。今は、彼が言ったように、正当防衛で殺す、としておく。救助のための殺人については、いつか、ちゃんと彼と話し合いたい。

あなたに命を預けますと私は言った。分かったと彼は言った。そして、今は気持ちだけで十分だと言ってくれた。私の態度と認識に応えないといけない、とも。かつて、私は彼に自分を捧げた。生きるためではなく、殺すために。そのためなら私はどうなってもよかった。最後には絶望に甘え、死を、彼への完全な譲渡をも望んだ。

殺人衝動と従属願望。自然に消滅する気配はない。まだどちらも具体的な解決方法が決まっていない。方針も立っていない。それ以前に、彼と十分に話し合えていない。今は私の健康が優先されてい

るから。彼と二人でいられる時間はとても少ない。

体調を崩しているのはどうしようもない事実。微熱が引かない。

悪夢を見る。負けたくない。早く元気になりたい。

あと何日、こうして横になっていればいいのだろう。

もどかしい。

私はいつか人を殺すだろうか。彼のように。彼を真似て。彼に従って。ああ、それを私は望んでいる。彼に従って人を殺す未来を。

衝動と願望の両方を完全に叶える未来だ。

私を置いて戦争には行けないと彼は言っていた。聞いてもいいだろうか。ついて行ける日がいつか来るのだろうか。

私の衝動を受け止めたいと彼は言った。

そして、私をそっと抱きしめてくれた。その間、私は安心していった。あの時の心はまだ女子だったから素直な恥ずかしさも嬉しさもあった。心が彼に支えられている感じがした。

確かに、人を殺すなんてことはどうでもいい、という心の状態になっていた、と言っている。もしかしたら、あれが正解なのかもしれない。この上ない、最初に得られた答え。願望をも満たす最上のもの。抱擁こそ愛。だとしたら、どれだけ幸せだろう。

今の状態で彼に抱きしめられたらどうなるだろう。どう感じるだろう。

それは幼稚な諦めだ、と彼は言った。でも、尊重する、とも言っ

てくれた。

人に命を預けるということ。一般的な上下関係ではなく、従う、というその現実。上手く言葉にできないけれど、それが一番大きな問題かもしれない。もしかしたら、人を殺す、ということよりもずっと。

無理矢理従わされることは全く違う。自分の意志で彼に従属する、という意志が私にはある、と言葉にできる。私は待っている。彼が私を従えてくれる日を。命令してほしいと思う。その願望が自然と消えて無くなる気配はない。衝動とは逆に、むしろ日に日に強まっている。

極端なことじゃなくていい。極端であってもいいけれど。何かを持ってきたくれ、と言われたら喜んで。何かをしてくれ、と言われたら私のできる限り、心を込めて。キスをして抱きしめたい、と言われたら、身も心も委ねて。

彼が男であり、私の体が女子であることが彼の中で問題を難しくしているのだろう。どうしても、性的なことが含まれるから。反道徳的な想像が私の心の中でも容易に浮かび上がってくる。

そういうことになる。彼はきっと、一步踏み込むのをためらっている。現実的に、体の年齢の問題も無視できない。

では、私は？ 答えは出ている。今の関係である限り、体調が良くなっても、彼がキスと抱擁までしかしないということが分かっている、本当はとても安心している。その通りだ。でも。

でも、と言いたい。言おう。その時が来たら必ず。大丈夫、と。私は大丈夫。

今、私は女性的な考えをしているだろうか。

家族になったことについては、時間があれば、また明日。

でも。

眠りにつこうとしている前に、最後に思うのは、どうしても、彼について。

三百二十年と彼は言った。彼は、何年？

私の命は、どれだけ彼に報いることができるのだろう。

4
— 3 .

翌朝。いつも通りの悪夢を見たけれど、熱はほとんど引いていた。

「もう、平気」

デイズも一安心したようだった。

様子を見てもう一日だけベッドで過ごすことになった。久しぶりの読書を許されたので不満はなかった。

一日中、メカナの共通語の教科書を読んで過ごした。エクシやデイズに注意されるほどに熱中した。一緒に読むの、と弟妹にせがまれるくらいに集中していた。

瞬く間に日が暮れた。知恵熱が少し出た程度で、明日からは部屋の外に行けそうだった。

久しぶりの入浴を済ませた。一人で落ち着いて入るのも久しぶりだった。元気な弟と妹は定期的にデイズに迫っているようで、お兄ちゃん、という可愛らしい声がお風呂から聞こえてきていた。

あの子たちの積極さが少し羨ましかった。

「デイズは、これからどうするの」

その日の夜、いつも通りの時間。会話が終わる頃に聞いた。

「当分は何もすることがない。できることも。長い休みになる」

「何も？」

「ああ。無力になった。魔法系^{カル}の力を失ったから。様子を見て色々試したが、取り戻すには普通の子どもと同じように成長しないといけないみたいだ」

「そう」

長い間一緒にいられると分かり、懸念が一つ消えた。合わせていた両手を組み直した。鼓動が高まっていくのを感じながら、絡まり合う自分の指の方へと視線を落とした。

「どうした？」

デイズが部屋に来る前に決心していたことだったけれど、最後まで

で躊躇はあった。なんでもないといい直すべきか迷った。

「少し悪い夢を見てて」

それでも、言葉は自然に私の口から零れ出ていた。

「黙ってて、ごめんなさい。やっぱり、言った方がいいと思って。それで」

ディズは怒らなかった。どういう夢を見るのかと問いただしてくることもなかった。

「気付かなくて、すまない」

「ううん。悪いのは私だから」

「もしよかったら、眠れるまで一緒にいようか」

「ありがとう」

それから、横たわるまで、余分な言葉はいらなかった。

毛布と服を擦る音を立て、互いに向かい合った。手が触れた。どちらからともなく重ね合わせた。

「おやすみ」

私は目を閉じた。少年のまま眠りにつけると分かった。性別の問題は瑣末だと思った。

お休みのキスをして、と言う勇氣は、さすがにまだなかったけれど。

その翌朝。朝早くに元気なアクアとアリアが私の様子を覗きに来たようだった。

「シズと一緒に寝てる！」

大きな声で母親に告げ口をしながら廊下の向こうへ走っていくのを聞いた。

その通りだった。ディズは朝まで私の横にいた。同じベッドでそのまま寝ていた。私は笑ってしまった。彼は普通の人になったのだろうかと思ってしまった。それはありえないとは分かっている、本当に身近な人のように感じた。

悪夢を見ていないと気付いた。ああ。憶えているのは安らぎだけだった。そして私の心は少年のままだった。

少年の姿をした彼の寝顔を見ていた。目を覚ますまで、ずっと。

認識の修正。これからはディズを大人の男性としてだけではなく、見た目通りの男子としても見る。きっと彼はそれを望んでいる。私も。

好きな男の子。言葉にすると途端に恥ずかしくなるけれど。

私の問題は焦らず長期的に考えるべきだと判断し、その日の午前には基本的な文法を覚えることにした。

ベッドの上で昼食を終え、熱が完全に引いたことを確認し、少し

外に出てみようと言った。

「ニルキナのこと」

家の庭を散策している時に私は聞いた。金木犀のような花が可愛らしかった。

「あんなことになった理由が、どうしても分からなくて。今まで、この世界が関わったことで、地球で大きな事故が起こったことはあったの？」

ディズは驚いていた。数秒間も私を見つめた。突然すぎた、と反省した。

「一度も」

言いにくそうだった。私の心の状態を懸念しているのかもしれないと思った。

「二千三百年近くの歴史で、ニルキナが初めてだった」

柔らかな木々と草花。新しい緑の匂い。病み上がりの私を包んでいた。

「お姉ちゃん、シズ」

庭の向こうでアクアとアリアが私たちを大声で呼んでいた。愛すべき子どもたち。私の弟と妹。手を振って応えた。

「ちょっと遊んでくるー」

「気をつけて」

二人は跳ねるように階段を降りていった。天使の職場もあの子たちにとっては格好の遊び場所に変わりがなかった。

今度は四人で森の方に行ってみよう。

「炉心とも繋がる、あの街の巨大な情報回路網に、人間の脳神経が量子接続されていた」

子どもたちの姿が見えなくなってから、彼は零した。

「同時に数十万人も。それが、ニルキナが建造された、事実上の、本当の理由だった。極めて多くの人間の精神が活動できる高精度な仮想現実の、実地実験。そのために新開発されたエネルギー機関も含めて、衰退していく人類を生き延びさせるための、箱舟の実験作」

それを私は知っていた。むしろ当然のことだった。生まれた時からニルキナで暮らしていた私にとって。人々にとって。善い、悪いというものではない、単なる事実だった。

「ディアは、ニルキナが地球の他の都市と一番違っていたところは何だと思う？」

突然聞かれ、他の都市のことをあまり知らない私は咄嗟には答えられなかった。

「自動車がほとんどないこと」

彼は言った。そうだった、と私は思い出した。

「車の個人所有の禁止。道路を走っていたのは公営の交通機関か公的機関のもので、市民は行動範囲を制限されていた。ストレスなく生活するには現実で細々と体力を保ちながら自宅の端末から仮想現実に入って自由を得るしかなかった。それが、ニルキナの市民の生活だった」

母も私も一日の多くを向こうの街で生きていた。特に母がこちら側に戻ってくるのはほとんどが食事と入浴の時だけだった。カプセル状のベッドに横たわる母と向こう側の街で自由に生きている母がいた。私もそうだった。みんなそうしていた。

こちら側の街では労働の必要性も削減されていた。窓の少ないビルの中や秘密の多い都市の地下で高性能なロボットが市民の代わりに働いていた。

公的機関の人間以外、人が働けるのは大体がサービス業だけで、大人の半数以上は原子世界での労働の義務と権利を失い、日々を意欲的に生きるために電子世界での商業活動を行っていた。物質現実で横たわり情報現実で働いていた。それがニルキナという街の法則だった。

ただ、私のような子どもはこちら側の学校への登校が義務付けられていた。心身の成長への配慮という理由は聞いていたが、向こう側の学校に行っている子どももたくさんいることを私は知っていた。あらゆることが実験の一環だったのだろう。

「イミナミアの解析では、百年間その生活を続けても市民への肉体的、精神的な負担は地球上の今の都市生活と大差はないという結果が得られた。実際、ニルキナが建造されてから十二年間、現実と仮想現実の二つの世界は見事に共存していた」

「じゃあ、どうして」

「ある実験を受けた市民の一人が、メカナの複写符合^{ピアス}を保有していた」

とても小さな声で、デイズは言った。

「脳神経を電子炉と直結させられ、その影響を受け、なんらかの相互作用によって仮想現実の中で複写符合^{ピアス}が強制的に覚醒した。そしてその結果、根本的な集積経路^{ソルタ}と魔法系式^{カロン}が極めて特異的にニルキナの情報回路網と電子炉炉心に伝播し、作用したのではないか、と解析された」

「それは、その人の意志とは無関係に？」

私は聞いた。声が震えてしまうのを止められなかった。

「そう。どんなことを思っていたとしても、多くの蓋然、必然的な偶然が重なり、あらゆる条件を満たして覚醒したのは、きっと、人の意志とは無関係だった。それがどんなに非人道的な実験だったとしても、きっと、自分が死ぬだけだと思っていたはずだ。本当に最悪の事態を引き起こすとは誰にも予測できなかった。だから、それが唯一の救いになり、最悪の原罪になった」

「その人は、どうなったの？」

「最初の集積経路^{ソルタ}が作られた一瞬後、覚醒者はその複写符合^{ピアス}の起源となる文明の宇宙に転移する。この場合は、ナクリスと呼ばれるメカナの聖地へ。それはメカナの魔法使い（カルン）の子どもでも地球人でも変わらない。それが力の実の卵である複写符合^{ピアス}が最初に開放する、本当の魔法^{マジック}なんだ」

「今も、生きてる？」

「生きている。きっと。短い時間だったが、俺も聖地に立ったことがあるから分かる。あの時は恐かったただけだった。でも、光をずっと憶えていた。だから、帰ってきて、この世界で生きていこうって

決めたんだ」

ああ。

ああ、その人は今、何を思っているのだろう。

彼の肩に額を寄せ、私は静かに思いを閉じた。

ああ、せめて、どうか、もう今以上の苦しみを背負いませぬように。私は祈った。どうか。どうか。何も言わずに受け止めてくれた彼に寄り添い、どうか、といつまでも祈り続けた。

夕方、食卓に座って食事を待った。

「いただきます」

初めて家族が揃った温かな団欒。母の故郷の、西洋の料理によく似ていた。幸せを素直に受け止めた。

そして、その夜もデイズと一緒に寝てくれることになった。ただ、朝までいてくれるかどうかは言葉ではできない交渉事であって、多くは彼や雰囲気委ねられていた。

「命って、何？」

「自由な動きの源、あるいは、動きそのものの総体。もしくは、総体以上のもの」

ベッドに潜り込んでから、幼い子どものように私は聞いた。外灯だけの明るさが不思議と心を高揚させていた。彼はベッドの上で姿

勢を整えながら、言葉遊びのように答えてくれた。

「現実は何？」

「命が認識できる全て」

無性に嬉しくなり、私は言葉を連ねた。デイズの方も、横たわる私を見下ろして薄く笑みを作っていた。

「この世界は？」

そう、世界。あらゆる物事の前提。私以前から存在する全ての広がり。この世に生まれてきて、やっと、私はこの問いを発することができたのだ。

「この世界は」

横顔を見せ、秘密を囁くように彼は言った。

「光と闇の模様」

そして静かに私の隣に横たわり、優しい眼差しで眠りへの誘いを紡ぎ始めた。

「認識できるものが、光。だから、現実は全て光だ」

「じゃあ、何も見えない、宇宙のほとんどが非現実で、闇？」

「多くの命にとっては。水素の海が見えるなら、宇宙は光に満ちている」

「空気が見えたら、どこも光ばかりで眩しいね」

「そう。だから闇も必要になる。見えないものもあるように、命は生まれてくるんだ」

「世界は、私の周りにあるものは、現実と、透明な空気や黒い闇。でも、空気があるって、私は知ってる」

「それが、知恵を持つ人間の力。非現実を、感じられないという欠点を持つ現実で埋めていく。それが、知識。実験や計算を行い、知識の上に知識を積み重ねていく。知識は感覚よりも優れていると信じて」

「本当は違うの？ 正しい知識でも」

「空気がある、という知識を認識し続けられる限り、人の周りには光が満ちている。見えないだけの光を認識できるのが、現実を広げられるのが、人の力。でも、もしその知識を失うか、認識できなくなったら。認識するということ自体を忘れても」

「現実が、無くなっていくね」

「それが人の弱点で、限界だ。いくら知識自体が正しくても。歴史が積み重なるごとに知識が積み重なっていても。人が体の中に持てる知識は失われやすい。忘れられることも消されることも多い。一度に認識できる知識の量は限られている。だから、一人一人、現実には様々な色と形と大きさを変え続けているんだ」

「世界の模様が変わっていくのね」

「人のそれを、美しいと、思ったことがある」

デイズの言葉と眼差しに、私は悲しみを憶えた。現実と非現実の移り変わりを美しいと思うのは、つまり、その視点を得るというのは、現実から離れていくということ。

その位置には尊さもある。けれど、同時に、途方もない寂しさも。

「今は、違うの？」

「ああ。今は、違う。美しいと思うのは」

「なに？」

「秘密だ」

教えて、と素直に頼めば良かったらどうか。そうすれば快く打ち明けてくれたらどうか。そうかもしれない。

「そんなこと言われたら、気になって眠れない」

でも、私は、こんなふうに言ってしまった。

文化的な慣習、というものがある。子どもとして、期待すべきことが。していいことが。それはこの部屋でも有効なはずだった。

「ディア」

言い訳をするなら、つまり、そういうことだった。

「じゃあ、お休みのキスを」

そして、デイズはこんなショウジョの期待を裏切らない、とても素敵な人だった。

「うん。ありがとう」

「お休み」

「おやすみなさい」

私の少女は目を覚まさなかった。寂しく感じなかったと言えば嘘になるけれど、このままでも構わない、とも思えた。

私の心の性別の秘密は大げさにするべきではないと思う。ただ過度に女の子らしい服装や口調が苦手なだけで、今のままでいいなら問題ない。ワンピースくらいなら違和感はない。

私は私でしかないのかもしれない。全てが思い込みに過ぎない、とは言わないけれど、少年として彼を好きでいられるのだから、結果的には少女の時と違いがない。一枚のコイン。

ただ、私が成長するにつれて問題は大きくなるだろう。女性の体に宿るこの心の成長が楽しみでもあり、不安でもある。だから、それまではそっとしておこう。私は私。彼への好意を中心に、ゆっくりと歩いてゆこう。

ニルキナが光に包まれて消えてゆく夢を見た。私の傍にデイズがいた。小さな横顔が光に照らされていた。

そして、光と闇の模様。宇宙の時空が渦を巻いているイメージ。私の内外に闇はあり、それらは光の輪郭によって示されていた。

目覚めた時、私の傍に彼がいた。昨日と同じように、私は彼が目を覚ます夜明け前まで、そのあどけない寝顔を見つめていた。

その、夜明け前。

「私、魔法使い（カルン）になりたい」
「なれる」

「どのくらい、時間がかかるの？」

「一人前になるには、何十年も。見習いになるだけなら、誕生日を迎える前には」

「よかった」

「ナクリスに行く。殻を破って魔法使い（カルン）の雛として生まれ直す旅になる。二日をかけて、地平線の向こうまで続く草原を歩いて海を目指すんだ」

「楽しみ」

「俺も一緒に行く」

ディズは言った。内緒にしていた決意をいい機会に言えたと喜んでいるような表情をしていた。

「やり直したいんだ」

思いがけない喜び。心が温かく膨らんだ。

「本当に、一緒に行ける？」

「許されるなら」

弾けそうなこの気持ちは冒険心だろうか。期待と好奇心が入り混じり、私の少年も少女も喜んでいいる。

「ディア？」

万感を込め、言葉にならない思いを伝えようと、思い切って抱きついた。

抱き返され、ちゃんと抱き合えたのは初めてかもしれない、と思った。

5. Naccliss — Repolarsystem

5. Naccliss — Repolarsystem

5—1.

新しい光のために、先ず、闇から始めよう。

「緊張しなくていいからね」

エクシの声が響く。目を閉じている私の耳に優しく届いた。

「上手くできないのは当たり前だから。私の九番目の子なんか、七日もできなくて、最後にはいじけて泣いちゃって、慰めるのに大変だったんだから」

「そんなことを言われたら、余計に緊張する」

「シズは他人事よね。全然平気みたいだし」

「他人事じゃない。緊張もしてる」

「もう、まったく。少しは子どもらしくなったと思ったら。最近、反抗期？」

「ふつうだ」

薄い瞼の向こうで言い合いが続いた。ディズも目を閉じたままのはずだったけれど、態度はいつもと変わらない。エクシに言われている通りで、緊張している様子は全く感じられなかった。

「ほら、二人とも。ディアが困ってる」

オリオンの声。エクシととても似ていて、違う人。そんな二人を祖父母のように思っていることは、きっといつまでも秘密になる。

「もし失敗したらどうするの？」

基本的には似た者同士の母子が注意されて口を閉ざしてから、私はまだ聞いていなかったことを尋ねた。

「次の日の同じ時間にもう一度」

教えていなかったのか、と言わんばかりのディズの声。

「それも駄目だったら」

「その次の日に。その時も駄目だったら、そのまた次の日。その繰り返しだ。エクシの子どもみたいに。ああ、俺たちのことか」

私は思わず笑みを零した。

「こら」

「エクシのせいで幸先が悪くなった」

「シズを向こうに送るのは私なんだけど。あんまり怒らせると手元が狂っちゃうかもしれないわよ。一生に一度のことなのに、嫌な思い出にしたいの？」

「実質、ディアを人質にとるのは親としてどうかと思う」

「二人とも、そのくらいに」

私の胸の奥にはこの世界の複写^{ヒアス}符合が宿っている。あの場所でデイズから伝わった魔法の卵が。

今思い出すならとても素晴らしい出来事。今思い出しても、絶望でも。

初めてではなくなっていたキス。デイズが私の命を望んだ最初の時。思えば、あの時こそが私という命のかたちの運命が定まった瞬間だったのかもしれない。その記憶は夢のように、悪夢のように、柔らかなかたちのように。心の中に。

彼がそのことを教えてくれた時のことを思い出す。時間は連なっている。

私が魔法使い（カルン）になりたいと打ち明けた日の夜だった。

その後、彼はまたお休みのキスをしてくれた。

それからは、毎日。

かたちを感じた。一瞬、心の居場所が見つかったのかと思った。

「わあ、もう見つけたの？」

「うん。分かるの？」

「ええ。ディアの心のかたちが伝わってる」

見つかったかたちを心の両手で包み込む。

そして、私は止まる。動けなくなる。心の多くも。

体の中のかたちを大事に持って何もできないままの時間。急に何もできなくなってしまう理由が自分でも分からなかった。何かを決めるための手掛かりも全くない不思議な感覚。

「最初はこんな感じて分かれればいいからね。見つかったものをどうすればいいのかを考えることが大切だから。いきなりできちゃう方が、少し心配かな」

「子どもが上手くできなくて泣いたのは、絶対にエクシのせいだ」

また、思わず笑みを零してしまった。

「わあ」

そして、私も心全体で驚いていた。抱えていたのは卵のかたちだと分かった。この卵を割りたくなかったんだ、という本心も。それで思考が止まっていた。

止められていたのかもしれない。私が私自身に試されていた。分かれば、簡単なこと。そして、最後に必要なものは。

「すごい」

「考えないといけないんじゃないなかったのか。ディアのこと、心配するのか？」

「シズの方がずっと心配だから、あまり変わりはないわ」

新しい家族は賑やかだ、と思いながら、丁寧に私の卵を孵した。

「行ってらっしゃい、ディア。シズはちゃんとすぐに届けてあげるから安心して。クアとリアがお土産話を楽しみにしてるから、でき

るだけ色々なことをしてきてね。でも、仲良くし過ぎるのはまだ駄目よ」

優しく届くエクシの声。オリオンが優しく見守ってくれているのも分かっていた。

「行ってきます。お母さん、お父さん」

意識が離れていく直前に、私は初めてその言葉を口にした。英語とは発音の違うメカナの言葉。抵抗は少ないはずだった。でも、本当に必要だったのは、同じ、殻を割るという、勇氣。

闇の中、一瞬後の未来を開くための意志は示された。そして、片手に持つ花の茎の光を感じながら、私は最初の魔法に身を委ねた。

(I n t o t h e l i g h t ; p l a n e t)

最初に感じたのは、肌を撫でる涼やかな風。二番目に体を包む草の匂い。三番目が、瞼の向こうの大きな明るさ。目を開ける。

雲ひとつない青の空。見渡す限りの草原。草の下り坂。地平まで緩やかに続く大斜面。降りていくのは白い一繋ぎの服で小さな体一つを包む子どもたち。何百人も、何千人も。

世界中から旅立ってきたメカナの子たち。

空気の中から立ち現れてくる。皆が最初に驚いたように周りを見渡し、自分を確かめ、そして歩き出す。前へと。歩いてゆく。自信を持ち、笑顔を見せる。

たくさん子どもたちがなだらかな草原の丘を下りてゆく。

私と同じようにこの場所を訪れた子どもたち。魔法の卵を孵した子たち。瞬きごとに現れ、草原と自分を確かめ、前へと歩き出す。希望を胸に抱いて斜面を下っていく。

帰るために。やっと雛になるために。無事に帰れても巣立ちはまだ遠いけれど、そのための明るい未来が待っている。

皆、私を追い抜いて進んでいく。

私は、歩き出せない。

ああ、駄目だ。

耐えられない。きっと、私はこれだけは耐えられない。この場所を歩き続けるなんてできない。私は甘い考えをしていた。辿り着いてしまった場所は、希望の坩堝。

清らかで満ち足りた世界が私を殺す。きっと耐えられない。こんな世界を歩き続けたら私の心は消えてしまう。私はそれを抑え切れない。それが分かる。

私は洗われてしまう。洗礼を受ける。

光。

広がっていたのは、絶望するしかないほどに輝く風景。

私は。

「ディア」

私はここで死んでいた。心が死んで消えていた。この場所を歩いていたとしたら。それが私の末路だった。きっと、全ての世界で。

「ここが、メカナの聖地。ナクリス」

この人がいない、全ての世界で。

「このまま丘を下って、ずっと真っ直ぐ歩いて海を目指すんだ。海まで草原が続いている。ゆっくり歩こう。ここでは食事はいらなし、天気もずっと晴れたままだから」

「うん」

「さあ、ディア」
「うん」

縫い目のない真っ白な服を上から被ったデイズ。私や他の子と同じ。見た目は十二歳の男の子。私の手を握ってくる積極なところは年上の人のよう。

「思うままに、真っ直ぐ。最初に立った場所から、ただ前を目指して。少しくらい寄り道してもいい。必ず海にたどり着く」

私を漂白しようとする光を仰ぐ。彼との繋がりを心まで伸ばす。

新しい家族を抛り所にする。

子どもたちに混ざって丘を降りていく。一緒に歩いていく。真っ白な流れの一員になる。

一つの地平線分の緩やかな大斜面。最初に立った場所から、ただ前を目指し、思うままに、真っ直ぐと。

この美しい光を、ずっと憶えているだろう。

二つ目の地平。やがて丘を下り終え、平らな大草原に至った。
一輪の白い花の献花。

夜空のようなあの人から贈られた花。もう片方の手に持ち続けた。草の絨毯に横たわる小さな白い石を見つけ、その足元にそっと置いた。こうするのが一番いいと思った。この草原と繋がった故郷に捧げた。

この草原に辿り着いた人のことを思い遣る。生き残った人たちの未来に思いを馳せる。犠牲になった全ての人たちに祈りを捧げる。胸に手を置き、遥かな故郷へと祈りを捧げた。

そうして、私は初めて故郷の災害と母の死を受け止めた。

顔を上げる。地平まで続く青と緑の風景。光景。散らばって進む子どもたち。こんなにも綺麗な場所が現実にあることの不思議。

「私、もう大丈夫だから」

静めていた心を起こし、後ろで見てくれていた彼に言った。

「ほんとう」

精一杯の笑顔を送った。他の子たちにも聞こえるくらいに大きく声を張り上げた。

デイズが驚きの表情をした。誇らしい気持ちりが湧き上がる。

「行こう、デイズ」

私の方から手を取った。彼は神妙な顔をして頷いて私の手を握り返してきた。

かすかな笑み。だから私も笑う。笑おう。

再び、前進。勢いよく。地平の向こうの海を目指す。

家路は長い。二人で夜も迎える。どうしよう。

子どもたちが散らばり始めるそよ風の中。

「魔法系^{カル}のこと、教えて」

私は聞いた。まずは、この世界の文明の基盤を成すエネルギー体系から。

彼の声を聞きながらこの世のかたちを確かめよう。経験と知識から築き上げていた自分なりの仮説と比較し、検証を試みよう。

「内積^{アイル}、外積^{カオン}、彩色^{ミクア}、無色^{ロミクア}、元素^{セミノ}、數位^{フエノ}。魔法系^{カル}は六種類の体系に区分されている。

内積^{アイル}と外積^{カオン}はベクトル（ファクス）、元素^{セミノ}と數位^{フエノ}は物質^{シアン}、彩色^{ミクア}と無色^{ロミクア}は空間^{ヤーテイ}。直線樹^{イミル}からの、それぞれ二極に分かれる三界のエネルギーギー抽出、加工と放出。それが魔法系^{カル}。そして、魔法系^{カル}を一定の規則で稼働させるための組成式や方程式を、魔法系式^{カロシ}という。対して、

数多くの魔法系式や情報を保存、処理するための回路は、集積経路ソルタという。

最初の魔法系式は複写符合を中心としてほぼ無意識の内に作られる。最も相性のいいエネルギーが魔法系カルとして使えるようになる。ディアの最初の魔法系は何だろうな」

「うん」

「そして、人の魔法系カルや電動の機械の他に、メカナでは恒体エンテルという特殊な人工物が使われている。恒体は人工の集積経路ソルタと魔法系式カロンを鉱石の量子領域に組み込んだものだ。あの家にある照明や機器の全てがその石と電力で動いている。

特殊な調整をされた電子が恒体エンテルの中で各種エネルギーに変換され、魔法系式の元で一定の働きをみせる。そのエネルギー変換の負荷で集積経路が壊れるまで、石の機能が失われることはない。それに、ほとんどの恒体エンテルは電力を蓄える機能も持っている」

「あの、明かりの石だね」

「ああ。大なり小なり、今では魔法使い（カルン）も恒体エンテルに頼って生きている。石の宇宙は美しく、力強い。ただ、それでも人の手で魔法系カルが使われることは無くならない。なぜなら、それが魔法使い（カルン）の美德とされていて、何より、魔法系カルの力そのものが人の心を満たすからだ」

「心を満たす」

「好奇心や達成感を。大きくて精緻な力を使うことは、ただそれだけで、楽しい。きっとそれが、全ての力の源泉だ」

「うん。私も、楽しみ」

デイズは頷き、私が見るべきものを教えるように前を指差した。

「丁度、子どもたちが試している。見ていこう」

子どもたちの姿。何十人も集まっているのが見えた。

草原に転がった大きな石を取り囲んで何かをしている。

そして、その傍の斜め上の空中に、とても綺麗な人型のもの。静かに浮かんでいた。ロボット、という言葉を私はすぐに思い浮かべる。何もせずに空中に停まっただけで、まるで子どもたちを見守っているように見えた。

見守っているのだろう、実際に。

「あれは？」

話の続きと子どもの様子も気になったけれど、私は初めて見る綺麗なものがどうしても気になって仕方がなかった。

あのロボットはなに？

「メカナの機兵。ここの警備をしている。仕事のほとんどは子どものお守りだ」

私の内心を聞いてくれたように彼は言った。

「自動的に動くの？」

「ナクリスの外から遠隔操作されている。最低限の定型通りの反応や動作はできるが、メカナの機械に人工知能は載せられていない。最終的な操作は魔法使い（カルン）がすることになっているんだ」

「あんな機械を作ったり動かしたりできるのも、魔法系カルの力？」

「そう」

そのまま話をしながら、石の近くへ。

休憩も兼ねて様子を眺めている子も多いようだった。

私たちもその輪に交ざって腰を下ろすことにした。言葉通りの見学。見物。

輪の中心。ロボットの方も気にしながらそちらを見る。一人の子

どもが顔を真っ赤にして大きな石に寄りかかっていた。

違う。石に両手を当てて両足を踏ん張っている。力を振り絞って石を動かそうとしているのだと分かった。丸い石の高さはその背丈の三倍以上もあった。

「動くの？」

「動くかもしれない」

よく見ると石の回りだけ僅かに地面が露出していた。今までに動かせた子がいたということの証拠。

子どもと石の様子を注視することにした。他の子たちも固唾を呑んで見守っている。

色々な子どもたち。地球と同じ。微笑ましく思う。

微笑ましく？ それは同じ子どもの私が使っている言葉ではない。では、嬉しい、と思うことはいいのだろうか。

魔法を使うことは楽しい。それが源泉。

デイズの言葉が反響し、私の言葉と一致する。素直にそう思う。

無垢な子どもたちと共有される。

楽園の寄る辺。

「あの子が試していたのが、アイル内積」

子どもが手を膝についた時、彼は言った。大勢の溜息と同情の中で私の耳に小さく届いた。

「ベクトル（ファクス）の一方で、生物として生み出すものとしては最も自然な力。自分の体中の量子領域に運動エネルギーを巡らせる。原始的で単純な分、力を制御しやすい。力を上げるのは勿論、

筋肉や骨の組織を硬く丈夫にすることもできる。

星を投げた騎士^{イウス}もいる。あの子は少し足りなかったみたいだ。惜しかった」

私を軽々と背負ってくれていた時だ、と思い出して頷いた時、ざわめきが起きた。見ると、私と同じくらいの背格好の女の子が皆の前に進み出てきていた。石の方を指して。

次の挑戦者の登場。

自信満々の表情。背中を曲げて前とは違う意味で顔を赤くしている男の子の脇を悠々と通り過ぎる。この晴れ舞台を待っていたかのように胸を張っている。本当に待っていたのかもしれない。

「自信があるみたいだ」

彼は苦笑気味の表情。

ところが、女の子は石に手が届くところまでは歩かず、距離を取って立ち止まった。軽いざわめき。若干、周りの好奇の視線が強くなる。

「次は外積^{カオン}。もう一方のベクトル（ファクス）。自分の外側に運動エネルギーを流し、反作用を受けずに物を間接的に動かす力。直接動かせない分の手順が必要になる」

デイズも子どもたちも女の子が何をしようとしているのか分かっているようだった。私はあの螺旋階段を直感的に思い出していた。

「最初に、量子領域^{ソラ}から半直線の延長線を伸ばさないといけない。ここに来てすぐにそこまでしようとするなら、きつとあの子は有力な外積^{カオン}の家系だ。失敗はしないと思う」

その言葉通り、彼女の実力は明確に見せ付けられた。

両腕から数本の青い光の線が真っ直ぐ伸びてゆく。そしてすぐに立ちはだかる石へと届いた。子どもたちのささめきも輪の中で伝わってゆく。

「延長線は量子化された粒子でできていて、本当は目に見えないくらいに細い。外積カオンを使っていることを周りに分かるようにする場合
は、ああやって線を光らせる」

そして、女の子が一步も動かないまま、石が少しずつ動き出す。
地面の上を滑っていく。

わあ、という歓声。憧れの声。子どもの輪から湧き上がる。

「最後に、延長線の先端に運動エネルギーを実際に作用させるための界面を作る。いくつかの界面を組み合わせて手のようにものを掴み、延長線を腕のように動かしてもものを動かす。それが、外積カオンが魔法系カルである所以であり、真髄だ。

だから、この非科学的で単純な遠隔作用の力が、メカナの文明基盤の骨子になっている。他の魔法系カルではなくて、質量を持つもの全とと、エネルギーすら自在に動かせる、この力だ。もし地球人がこの力とその恒体エンテルを使えるようになるなら、すぐにメカナと遜色のない都市を建造できると思う」

露出した地面の端まで石を動かして女の子は力の線を消した。満足そうな笑顔。腕を下ろし、走って輪の中に戻ってくる。

二人の女の子が満面の笑顔で彼女を出迎えた。周りの視線を気にせずとても嬉しそうに抱き合っていた。

「他の魔法は？」

「空間ヤーティは、地球科学がまだ発見していない空間のエネルギーを扱っ

ている。いつか辿り着くかもしれない宇宙の力。彩りと象りの力。簡単に言くと、真空を空間エネルギーで満たして、空間を物のように操る力だ。独特の力学を持っていて扱いが難しいが、固体や液体のように強靱で、その空間内の物質や光も自由に動かすことができるようになる。

「彩色は空間を彩り、彩色圏を造る。無色は空間を象り、無色圏を造る。彩色圏と無色圏は相反し合う。色の違う複数の彩色圏は干渉し合う。一つの色だけが一ところの空間を占めることができる。」

「ここまではいいか？」
「うん」

思い出すべきは青い蝶。あの人の魔法。

「彩色の特徴は、同色の彩色圏内での光速の空間転移、高効率での電気や光へのエネルギー変換。そして、特に電力のエネルギー源として使われる、光体という固体のエネルギー体を作り出すこともできる。並列宇宙層を束ねる広大な勢力圏やネットワークを支えるのもこの力だ。」

しかし、独自の物理法則上、運動エネルギーとは違って拡散しやすいという難点がある。継続してエネルギーの場を支えないと実用はできない」

「無色は、透明な力？」

「透明な界面で、空間を無色のまま象る。無色圏は透明な界面の積層になる。利点は彩色よりもさらに強靱なエネルギーと、拡散しにくい性質。」

難点は消費されるエネルギー量が他の魔法系よりも遥かに多いことと、理論上の超光速空間転移が実現できていないことだ。彩色とは相反する一方で、相補的に空間の場を支える力として利用されている」

おそらくは、彗星の翼。あの浮力。彼は多くを語らないけれど、彼には透明な力が満ちているようだった。

そして、無色の弾丸。しかし、どうしてもその法則が分からなかった。地面を向いたままの銃口。弾ける背中。銃声のような破裂音。あれは、魔法系カルですらない、未知の奇跡なのかもしれない。

ふと、甲高い声が聞こえた。

力を試す丸い石の方を見た。違う髪の色をした子どもたちが三人がかりで力を合わせて頑張っていた。

周りにはそれを見守る子どもの輪と、人型のロボット。そして私たち。

ディズの方を窺うと、子どもたちの方を見て微かな笑みを漏らしていた。

「どうしたの？」

「こうしていたら、今話している色々なことが、何か他愛のないことに見える」

涼やかな風。光が柔らかく降り注いでいる。

「ディアには悪いが」

私も口元を綻ばせた。

「いいよ。私も、こうしているだけでも楽しいけど、あなたに教えてもらうのも楽しいから」

二人で輪の中心へと意識を向ける。

しばらくの間、そうして静かに過ごしていた。風に乗って緩やかに、元氣な掛け声が響いていた。

「あの機兵の体を作れる魔法系カルが、元素セミン」

穏やかな光景の中、私は耳を傾けた。

「物質の結合エネルギーとエネルギー準位、それに素粒子の相互作用を操る力。それらを利用した化学反応やエネルギー変換の技術体系。」

地球の科学技術に一番近い、最も魔法らしい魔法かもしれない。火を起こしたり、光を生み出したり、金属を精製したりする力だ。恒体エンテの種類も一番多い。効率は悪いが、宇宙空間の水素や素粒子だけでもあらゆる物質を作ることまでできる」

「面白そう。でも、難しそうだね」

「もちろん、そうだ。科学と同じような専門的な知識を持つ必要がある。物質の根源に関わるエネルギーを直線樹イミルから取り出す技術も並大抵に身につくものじゃない。」

その代わり、応用力はそれこそ科学と同等だ。医学にも応用されていて、その技術で助かる人間も多い」

ディズの両腕。私はほとんど無意識の内に彼の腕に触れていた。

「あと一つは？」

触れたまま尋ねる。気恥ずかしい気持ちより穏やかな幸福感が勝っていた。

「数位フエノの魔法系カルは地球の電子技術に酷似している。機械の正確な操作や大量の情報の処理のために使われている。人のその集積経路ソルタは脳内の量子領域ソラに作られることが多い」

「脳に？」

「頭の中に個人的な量子コンピュータを作るようなものだから、年齢ごとに厳しい制限がある。もちろん、メカナの人間でもその忌避感フエノは少なくない。だから最近ではその代わりに数位フエノの恒体エンテルが大量に作られて地球のコンピュータと同じように使われている」

「数位フエノは、物質マテリアルなの？」

両親やデイズが持っているカードのような恒体エンテルを思い出しながら私は聞いた。あの時の、あの黒く薄い板もそうだったのだろう。

「そう、数位フエノはフンクトにも地球宇宙にも存在しているもう一種類の物質シアンだ。
デジタルデジタル物質。

数位物質デジタル物質。質量のない、数的で量子的な、零と一の間の数直線を持つ数的素粒子を、メカナでは数位フエノと呼んでいる。それは確かにこの元素宇宙セミノの開闢から宇宙空間の裏側に密かに偏在していて、いまも俺たちの周りに満ちている。

ちなみに、集積経路ソルタや外積カオンの延長線は人体の元素セミノと複写符合由来ビマスの数位フエノの複合物質でできている。恒体エンテルの製造は今でも最先端の技術だ」

その時、今までで一番元気な歓声が聞こえた。石と戦う子ども数は十人まで増えていた。空中から見下ろしているロボットが困った様子に見えるのは気のせいだろうか。

「この宇宙は、元素セミノの宇宙？ それって」

「いい質問だ。ただ、それを説明するにはこの宇宙の構造と魔法系カルの成り立ちから話さないといけない。」

魔法系^{カル}の起源が球面四次元の空間を渡った先の數位宇宙層^{フエノ}から伝わってきたということも説明する必要がある。魔法使い（カルン）がどのような宇宙の星々を行き来しているのかも」

「球面三次元宇宙。球面四次元空間」

「そう、前に少しだけ話したこと」

私は思わず息をついた。魔法から宇宙へ、彼との話は果てしなく広がっていくようだった。

「魔法系^{カル}については、とりあえず、ここまでだ」

「うん。それじゃあ、私、手伝ってくるね」

立ち上がりながら、私は言った。唐突だっただろうか、と少し心配になったけれど、彼は驚かずに理解の笑顔を見せてくれた。

「俺も行く。もう子ども同然になっているが、その代わり、思い切り加勢できる」

ああ、大丈夫だ。私は理解し、安堵した。

こうして、大事なことは少しずつ果たされていく。

もうすぐ意味を変えてしまうとしても。意味を変えるだけで、大事なことは、どんな時でも。

「うん。じゃあ、一緒に」

手を差し出し、彼をこちらへと引き上げる。体の距離がとても近くなる。

素敵なことは、突然生まれる色彩のように。いつでも、鮮明に。

最後はほとんど体力勝負になっていたけれど、結果よければ全てよし。皆が笑えてよかった。大歓声と笑顔が弾けた。結局何もせずに浮かんでいただけのロボットに手を振る子どももいた。

一緒に頑張った子たちと健闘を讃え合った。短い間の出来事だったのに別れが寂しく感じるほどだった。

頑張った、と体を思い切り伸ばしたのをデイズに見られたのは恥ずかしかっただけだ。

「宇宙の話の続き、聞かせて」

前進を再開してから、私は聞いた。

「最小単位の宇宙は四次元球の球面のかたちをしていて、三次元の球じゃない。空間の閉じた、果てのない空間だ。歪みの少ない宇宙地図を作ろうと思ったら、三次元の透明な球二つか楕円球が必要になる。

そして、地球宇宙もフンクトの無数の宇宙も、一つの同じ球面状の四次元空間の層にある。つまり、五次元球の球面を成す空間上に。

正確に言うと、同じ物理法則を共有する球面三次元宇宙が実無限の数だけ存在していて、それらが一まとまりになってさらに五次元球の球面のかたちに並んでいる。球面一次元の輪が何枚も積み重なって三次元球である地球の表面の形を作るように。

地球宇宙もフンクトの宇宙も本質的には違いのない、一つの層と法則にまとめられている世界。ただ、その中の文明の発祥地が地球のある宇宙だったというだけだ。だからこうして他の宇宙を渡ることができる。

そういう、一群の球面層を形成する、物理法則を共有する無数の

球面三次元宇宙の集まりを、並列宇宙層と言う」

「球面状の四次元の空間を渡れるのが、魔法系カルの力？」

「正確には、この並列宇宙層、フンクトを渡る力。」

球の内部を無視して乱暴に言えば、フンクトは四次元球面三次元宇宙が積み重なる五次元球面四次元世界。球面三次元宇宙の層である並列宇宙層の膨張方向は、五次元球の中心点から球状に、外側の五次元の球面空間へと。

數位フエノは一つの宇宙だけでなく球面四次元空間を自由に行き来している。フンクトの宇宙を渡れるのは彩色ミクアだけでなく數位フエノの魔法系カルも使っているからだ。

ただ、使うと言っても、聖地へのこの転移を除いて、宇宙層の渡航は現代でも極めて難しい技術になる。人が住める惑星を別の宇宙に見つけるには未だに天文学的な確率の下での観測が必要だ」

「もう、なんだか、本当に魔法みたいな話だね」

「さらに、無数の並列宇宙層が球面状の十次元空間に分布している。宇宙層がもう一段階上の球面五次元空間の層のまとまりを作っているか、あるいはそれぞれの層が別個に球面十次元の空間に直接並んでいる。

そして、仮想するしかない直線樹イミルが、全ての宇宙層を越えてその空間を貫いている。

初め、魔法系カルの卵である複写符合ビフスは球面五次元以上の空間を渡り、數位物質フエノシアンの優位な物理法則を持つ異なる並列宇宙層から地球にやって来た、と言われている。その宇宙層にいた原始的な情報生命だったという仮説もある。

つまり、それが人間に宿ったんだ。原始的な生命にDNAが宿ったように」

「それは、どうやって？」

「それは、神話の世界。不規則に、今までに何度も新しい神話が生まれている。最古のものと一万五千年前まで遡らないといけない。全く未知の現象が起きているとしか考えられない。五次元以上の球

面空間を渡る方法は、今の数位フエノの魔法系では解明不可能だ。

最も新しい始原の複写符合ビフスの発生が起きたのは、今からおよそ二千三百年前。選ばれたのは、地球の辺境からこのナクリスに辿り着いた、メカナの始祖。それが一番新しい神話だ。地球の暦の始まりより少し前の頃」

「ここに」

「ああ。ここが始まりの場所。運命の分岐点。始祖の二人はここで女神とユグライグノに出会った。四人は協力して多くの文明とその複写符合ビフスや魔法系カルを取り込み、地獄のようなフンクトで地球を守るための新しい文明を興した。それが、メカナ。

唯一、フンクトで地球宇宙を守る、百億の機兵の国」

「二人？」

「オリオンとエクシ」

いい質問、と心の中で言ってくれたような表情で。

「あの二人がアダムとイヴだ」

それから、草原の日が暮れるまで、私はデイズに何も聞けないまま歩き続けた。色々な気持ちが混ざり合ってしまい、静かに歩き続けるしかなかった。言葉が出なかった。彼の方は彼の方で、大事なことはもう全部話し終えたと言わんばかりの穏やかな表情で私の手を握っていた。私の方も握ったり握り返したりを繰り返したから似たようなものだったけれど。

周りの子どもたちも静かに歩いていた。一生懸命に前を向いて草原の果てを目指していた。各々が、清々しく、肅々と、海へ。この前進が本来の目的だと思い出して気を取り直した。独りで元気に進み続けている子たちへの後ろめたさもあった。

暗くなるまで歩き続け、日が暗くなってからも言葉は少なかった。

「おやすみ」

一日に一度のキスの後、どちらからともなく草の上に横たわった。他の子どもたちも静かに横になっていた。夜空の青い月と、その淡い光を受けてゆっくりと横切る綺麗なロボットがとても印象的だった。空腹と疲労を感じないまま目を閉じた。

眠りはすぐに訪れた。

夢も見ず、間も無く目を覚ました。気が付くと爽やかな早朝だった。

「おはよう」

肌寒さはほんの少しだけで、とても不思議な感覚だった。昨日の夜は気温という知識も忘れていた、と思い至った。

つまり、私の光は変容し続けている。

その中に、私がいる。

日中、空を飛んでいる子どもたちを見つけた。

「わあ」

朝から言葉少なく歩いていたら、その幻想的な出来事は新鮮だった。

花のような翼が上空で舞う四人の子たちの背中から広がっていた。橙赤、橙黄、黄緑、青緑。綺麗な花が青い空で舞っている。

「あれが花翼。^{ファルグ}きっと、風の都の子どもたちだ」

デイズは小さな声で言った。

昨日と同じような穏やかな表情で見上げていた。私はそんな彼に何も言えなかった。彼を真似て私も静かに空を見上げた。

とても楽しそうに飛んでいる妖精たち。それと、やはり無口なロボットを近くに見つけた。四つの無軌道な跳ね回りと衝突しないように少し離れた空中に停まっていた。

「本当に見てるだけなんだね」

「基本的には。危なくなったら、ちゃんと助けるはずだ」

途端、緑の翼の二人が正面から衝突した。思わず息を呑む瞬間にも、錐揉みしながら落下を始める。赤い翼の子が気付いてすぐに追いかける。けれど二人は翼を失い見る見るうちに落ちていく。

間に合わない、と思った時には滑るようにやって来ていたロボットが二人を掌に掬った。そしてそのまま何も言わずに地面を目指す。静かに着地。あと二人もロボットを追って降りてくる。

私は息を飲んでその様子を見ていた。なんでもないことのようにすぐに終わってしまった光景だったけれど、とても、そう、素晴らしい出来事だった。

「よかった」

それが半分の気持ち。

「あのロボットも、すごいね」

それがもう半分の、実は本心。地球ではまだ幼児のような物しか実現していない、現実の人型の機械に対しての感想。昨日は意識することさえ抑えていた。私は、感動していた。

子どもの頃からの私の指向性。私の少年の中心。

「何度も戦場から生きて帰ってきた機兵だから。余りある幸運を祝福されてここで使われるんだ」

「その、名前は、何かあるの？」

「あの種類なら、ステイっていう愛称で呼ばれている」
「そう」

「興味があるのか？」

「綺麗だなんて、思って。うん。どういうふうに作られてるのか、気になったから」

「そうか」

デイズは笑った。

「なに？」

速まる鼓動を抑え切れないまま、私は聞いた。

「いや。いいな、と思った」

そう言われ、私は幼い心を見抜かれたような気持ちになり、動揺と恥ずかしさを隠すために視線を外した。

向こうではステイが早速子どもたちに取り囲まれていた。一連の

出来事を目撃していた周りの子たちからも。もう十人以上集まっている。君たちは好奇心発生器？

昨日から続き、二回目の騒ぎ。一日に一回は草原のどこかで起きるのだろうか。

「行ってみよう」

ふと我に変えると、すぐ傍でデイズの声。遠慮なく私の手を引いて歩いていく。

つまり私も歩き出す。腕が伸び、足が大きく前に出る。

「デイズ？」

私は戸惑って声をかけた。でも彼は前を向いて進み続けている。

だから私も進み続ける。近づいてゆく。

「大きいね」

「あれで一番小さな種類だ。一番大きいものだと、戦艦と同じようなものも作られている」

淡い白に統一される滑らかな装甲。厚い胴体の曲線美と屈強な四肢の骨格。それでいて細く伸び上がるような全体像の輪郭線。繊細な手指。鋭い美しさを浮かばせる表情。青い瞳。

皆が大きな脚にまわりついて色々な歓声を上げていた。何故かよじ登ろうとしている子もいた。私たちはその端の方で機体の雄姿を眺めることにした。

安寧の中のその表象を、光を、私は決して忘れない。

「ありがとう」

その言葉は心から。

「ディア？」

「もう、大丈夫だから。ディズは私に大切なことを優しいままでたくさんくれた。だから、もういいの」

献花をした時とはまた異なる気持ち。私は立ち直り、そして、ここからは。

「もう、いいのか？」

「うん」

あれから過ごした時間は長いとは言えないものかもしれない。でも、これで十分。昼も夜も朝も過ぎた。

「そうか」

それは、穏やかな笑みと共に。泣きそうな表情だと思うのは、彼に失礼だろう。

それから、ひと時の偶像が飛び去ってからも、彼が私を案内するまで、最後の清水の時代は美しく清らかに続いていた。

烈火の時代の始まり。その刻限。彼の言葉を入り口に、地獄へとこの身を躍らせよう。

「メカナ人類は機械を造ることで戦う。機兵の製造がメカナの基礎で、本当の力だ。メカナの三割以上もの人間が機兵の製造に関わっている。残りの仕事はその製造基盤を支えるためのものだと言っても過言じゃない」

初めに、人間について。

「どうして、たくさんの人間が？」

「繁栄するために。百億の機兵を作るために。そうさせたのは、もちろん、イミナミアだ。メカナの勢力を維持するために」

「皆、そのやり方は従っているの？」

「従っている。他の文明や戦争についての正しい情報が与えられていて、それを市民は分かっている。戦争に負けると異世界の人類に虐殺されると理解しているから、皆が命がけで働いている」

「どうやって？」

「魔法系^{カル}によって得られる恒久的なエネルギーを使って。骨格だけを作っている都市もあれば、視覚に関する部品を作っている都市もある。金属原子を作り続けるだけの、鉱脈のような都市も。恒体^{エンテル}の素材にする特殊な鉱石を掘り続けるだけの、鉱山の惑星も」

「騎士^{イウス}は？」

「百億の機兵こそが宇宙を翔る。イミナミアはその結集装置、騎士^{イウス}はその代表者に過ぎない。百の騎士は十億の機兵に虐殺される」

緩やかに夕空を横切るサティ。見上げ、その軌跡を辿る私たち。
この草原と、惑星。

次は、社会について。

「社会からは逃げられない？」

「俺は騎士という役割を持っていた。そのように働き方が固定された。社会の一員になるというのはそういうことだ。どれほど緻密な世界が築かれていても、逆にどれほど粗野な世界でも、二人でも、人は限定的な仕組みの一つとして働くことしかできない。社会を無視することも逸脱することもできない。逸脱の果ては孤独な死だ」

「だから、皆と働くしかないの？」

「皆と働くしかない。メカナでは、主にそれが機兵の製造になる」

サティを動かしている大人たち。この草原を管理する人々。見えない歯車と素顔。

次は、生活について。

「大人は、働くだけ？ 生きるために？」

「働き、生きていくためのエネルギーを得る。それが現実で、社会での規則だ。しかしそれでも、社会の在りようは、最後には市民の私生活にかかっている」

「私生活？」

「エネルギーそのものは共通基盤に過ぎないんだ。大人とその子ども、私生活の集合が社会の血肉になる。洗練された美意識も、幼稚な娯楽も、高尚で醜悪な趣味も、正当にエネルギーに変換される。その文化が、二千年以上前から人を生かし続けている」

「じゃあ、皆、満ち足りている？」

「そういう意味では、機兵の製造工場という基盤も地球を守るという大儀も、結局は文化を存続させるための手段でしかないのかもしれない。市民は戦うために生きているわけではなく、あくまで自分たちの生を享受するために生きている」

伸びやかな子どもたち。希望に満ち溢れる笑顔。未来を目指す真摯な表情。

では、次は、使命について。

「でも、使命からは逃げられない？」

「社会から逃げられないように。メカナでも、常識的に、使命を持って仕事に携わるべきだと考えられている。子どもはそう教わり、期待された通りの大人になる。一生に渡って使命に縛られ、私生活を捨てる人間も多い。天上の官僚や騎士^{イウス}もそうだが、特に、射手^{キント}と呼ばれる、機兵の操作を担う魔法使い（カルン）が特別な使命を持っている」

「射手^{キント}」

「機兵を操って戦争で異人類と戦わせる。市民の命と力を預かるその地位や技術を保全するため、独自の文化を持っている。清廉であり、宗教的な側面もあり、敬意と疎外を同時に受けることが多い。彼らが敬う対象は、機兵の設計思想をもたらした、女神サファイア。過激な一派が崇拜を行っているのは、事実だ」

女神。ならば、最後は、神について。

「神さまはいる？」

「ほぼ、いない。彼方に、神々という不明瞭な集合なら存在する。この宇宙にあるものはいつか崩壊する質量かエネルギーだ」

「あの人は？」

「女神と称され、敬愛され、崇拝されている。神ではない。サファイアも質量とエネルギーに過ぎない。俺たちがそうであるように」

そしてここから見えるのは、あの人を敬うという射手^{キント}の子どもたち。白いフードを目深に被る七人の子どもの縦列。性別の判別もできない後ろ姿。速くはない歩みで一步一步草原を踏みしめていた。

「ああ」

その光景だけは、私は最後まで言葉にすることはできなかった。

草原で二度目の、おそらくは最後の夜の訪れ。子どもの分布はさらに大きく散逸し、残されたものは私の問題と私たちの関係性だけになっていた。

性的葛藤、心的外傷、殺人衝動、従属願望。

私の問題は多く、深く、難しい。どれもが彼との関係が続けていく上で避けては通れないもの。越えるか耐え続けなければならぬもの。障害、あるいは毒。

もう一つだけ彼に隠していることはあるけれど、これらに比べたらささやかで微笑ましいものだ。

「他人の命と、私の命。どうするべき？」

その日の終わりのキスをされる前に、デイズに聞いた。

私の心と体のことは聞かなかった。聞けなかった。それだけは私自身が抱えていかなくてはならない問題だから。心身が落ち着くまでに何年もかかることはもう覚悟している。

それに、毎日のキスよりもいい方法を思いつけない。つまり、そういうこと。この二つの問題については既に彼が解決してくれているも同然だった。

彼に甘え続け、彼の本心を蔑ろにし続けるなら。

「私は人の命を奪ってもいいと思った。そして、あなたに私の命を預けた。最後には死にたいと思った。そんな身勝手な私が、これか

らどんなことをしていいの？」

彼に甘えるという関係性を認めることが前提になっていた。私はその現実を甘んじて受け入れていた。

違う、嬉々として受け入れている。今も。

「一つ、思いついている」

だから、彼の告げた言葉は、心を揺るがす宣告だった。

「私に、返すこと？」

彼への甘えを許されないということは、私にとって、絶望。終わりを意味する。

「違う。ディアが望まない限り、それだけはあるえない。安心してほしい」

彼は断言し、息をついて私を見てきた。

「ディア」

「ごめんなさい。馬鹿なこと言って」

「いい。こっちこそ、すまない。手放さないと、もっと前にはつきり教えておけばよかった」

途方も無いことをさり気なく言われた。激しい動揺を隠すため、わざとらしく胸に手を置いて安堵をする。

キスをされた。

「お詫びのキス」

不意打ちだった。

「どれだけ君が大切なのか、きちんと伝わっているだろうか」

うん、とも、今、とも思った。

「ずっと、探していた。そして、やっと今日見つけた」
「なに？」

「君の指向性。心の向き。前に言ってくれたこと。どんなところでも、どんな時でも、同じ方を向けると。したいことをする、と」

「そんなこと、言われても」

「憶えてない、は無しだ。それにもう、答えを君自身がちゃんと言ってくれている。だから、それから、俺も手掛かりを出している」

「それは、なに？」

「正当に、エネルギーに変換されるなら」

「それは」

「自分が言っていた答えの方も、思い出したか？」

「私は」

「どういうふうに造られているのか気になった、と言った。それだけじゃない。あの時のディアの表情を、憶えている。あれほど輝いていたことなんて、なかった」

「そんなの、駄目」

「駄目じゃない。それが、とても現実的な方法だ。幸せの手段。何も悪いことなんて無い。この世界は、ディアを受け入れられる器を持っている。どんなに強い衝動でも、俺もいる」

「強引だよ、デイズ。どうして？」

「こんなに綺麗に見つかった答えに飛びつかない方がおかしい」

「そういうことじゃない。私は」

「なんだ？」

「私は、お礼がしたい。そういう生き方じゃないと納得できない」「駄目じゃないんだ。いつか、ディアがそういうふうしてくれることは、全然、駄目じゃない。君はまだ誤解をしている。自分を殺さなくてはいけないと」

その言葉に、私は答えられなかった。

「指向性の強さの過小評価と、その自己犠牲を正せるのなら、もうどこにも問題は無い。大人になって魔法使い（カルン）になり、どこかの星で機兵に関わる仕事をして欲しい。恩返しはずっと後でいい。ずっと一緒だから、大丈夫だ」

「ずっと、一緒？」

「ああ」

「どのくらい？」

「ディアが望むなら、命が燃え尽きるまで」

「それは、誰の、命？ 私たち？ それとも、どちらか、一人だけ？」

なぜなら、私を殺すのは正しく私だから。燃え尽きる命を持つ私自身。だからこそ、私は自分の未来を自分で決めたい。

「ここが地球なら、ううん、魔法使いの世界でも、普通なら私はここまで拒んでなかった。あなたの言う通りの将来を目指して、真面目に働いて、幸せになれたと思う。」

何の不安も無く目指せたって確信できる。でも、駄目。あなただから。私がお礼をしたいのは、あなただから。だから、お願い。当たり前前の幸せで誤魔化さないで。

本当のことを教えて。あなたのこと。どうしようもない、あなた

自身のこと。本当の本当の、本当のこと。あの時あなたが見せてくれたこと。魔法を使えない子どもみたいになった理由。だから、お願い、教えて。あなたのこと」

殺すのは、可能性。許されている私。私が得たい未来のために。

「あなたは、あと、何年、生きるの？」

地獄のただ中へ。その覚悟は、できている。

「その手掛かりは、一度も出していなかった。どうしてだ？」

「根拠なんてない。いつまで一緒にいられるのか分からなかったから、弱気になっただけ。後はもう、嫌な想像ばかり。ここに来てからは、無理に考えないようにしてた」

「ああ、そうか。言っていなかったことが根拠になったのか。さっきと同じだ。いや、単なる不注意じゃなくて、ディアのことすら言えなかったことだから、違うか」

「ディズ」

彼の名をそっと口にし、私は彼を信じ、身と心を彼に委ねた。

「一億年」

時の果てで、彼は言った。

「これから、あと一億年生きる」

「一億年？」

「ああ」

「デイズ」

「ディアは、逆だと思っていたか？ 自分に合わせて、寿命を短くしたと。大丈夫だ、いくら俺でもそんなことはしない。それに、ディアも何百年も生きられる。強い心と力を持てるなら、何千年でも」
「デイズ！」

私は叫んだ。初めてのことだった。必死になって運命と言葉を止めた。

「私はね、逆には考えてなかったよ。ただ私は、私が先に死んで、あなたに何もしてあげられなくなるのが嫌だった。あなたよりずっと早く死ぬことが嫌だった。私が向いているのはあなたがいる方だから。あなたと私の命が分からなかったから、当たり前前に生きることがどうしても嫌だった。

でも」

デイズの肩に手を置き、力を失い、頭を垂れた。彼の温かい体温が伝わってくる。でも。

「そんなの、駄目だよ。私のことなんか、もう、どうでもいい」

「星の寿命のたった百分の一だ」

「どうして？ なんのため？」

「年月の大小に関係なく、命はただ命だ。自分で得た命だから、正しく使い果たしたいんだ」

「本当に、神さまになったんだね」

「そんなものじゃない。本当に、極めて即物的な結果でしかない。自分の力を試した結果が、これだ。それだけのことだ」

「向こうの宇宙で？」

「ああ。けれど、正確には、真球宇宙という、この世の果てを越えたところにある世界で。すまない、今まではほとんど嘘に近いごまかしをしていた。數位宇宙デジタルに行ったのは本当でも、その宇宙もすぐに飛び越えたんだ。通り過ぎただけだ。

そして、球面十一次元の時空も超えて、最後に辿り着いたのは、あらゆる球面宇宙を乗せる一つの天球の、その中心に広がる世界だった。そこで千八百一年を過ごしている間、もう一つの複写レプリカ符合とセイレン宇宙を創った。

自分の力の実がわざと半分にされていると気付いて、精神を保つためにももう片方の螺旋を創ろうとした時には、もう後戻りができなくなっていた。その結果できたのは、星や宇宙には普遍的なものでも、人には長過ぎる、恒久性だった。一億年でも未熟なんだ。力の実は生命の実の半分だった」

「私にはもう、なにがなんだか、分からないよ」

「あそこは、ディア、どうしようもないところだった。天球世界で唯一つの真球宇宙。果てのある世界。永遠に治らない閉塞感に罹った神々が球面の存在を妬み続ける天国。それでも、一つの星と星の間には、千の千乗光年以上の隔たりがあったんだ」

「もう、すごい世界だね」

「すごい世界だった」

「ディズ」

「ああ」

「馬鹿。馬鹿」

「ああ」

「どれだけあなたが大切なのか、伝わってる？」

初めての私からのキスは、同じように、いつまでも終わりがたくな
いキスで応えられた。

私は何度絶望の朝を迎えればいいのだろう。
これが最後であって欲しい。

「おはよう」

という死と絶望。彼は聞いてくれた。

「おはよう」

「デイズは、このことで謝らないんだね」

「そうでないといけないと、思っている」

「もうほとんど神さまなのに、ずっと否定するの？」

「そうでないといけないと、思っている」

新たな道程はあまりにも遠く、険しい。

私たちとはほとんど因果関係のない清々しい朝の空気。烈火の時

代は続く。

「ディアを最後まで守る。それを見ていて欲しい。そして、君を残して最後の戦争に行くことを、許して欲しい」

「最後の？」

「そう。これから起こる出来事の、正真正銘の、最後の核心。予定されている終末。機械の人類との戦いが、あと千年で、始まる」

「機械の、人類」

「星の地表にこびり付くことのない、広大な宇宙へと羽ばたく新しい人類。その生命は、長い進化の歴史の中で、機械と人工知能の技術が極まった文明でいつか必ず誕生する。魔法系カルが生まれてから一万五千年が経ち、やっと、その赤子が遠い宇宙で誕生したんだ。」

その予言は与えられたのではなく、作られていた。訪れるのは初めから予測されていた終末。機械知性を持ち金属の体に複写ビクス符合を宿す新人類との、暗黒の真空を舞台にした宇宙戦争だ。

いつか、その終末に関わり、最後まで見届けることになる。ディアがいてくれたからその決意ができた。この世界を守りたいと思った。ただ生きるだけじゃない、大きな目的ができたんだ」

「私がいなければ、あなたはそんなことはしなかった？」

「その前に、あの戦争で死んでいた」

「じゃあ、私を恨んでる？」

「まさか。心から感謝している」

それが嘘偽りのない言葉だと分かったから、私はさらに絶望した。明らかな事実の意味を理解したくないと思ってしまった。

私は死ぬべき存在となった。初めから分かっていたことが、改めて白日の下に曝された。

けれど決して死にはしない。幾度もの炎の波濤を越え、さあ、今こそ戦いの時は訪れた。

「内紛とテロリズム。経済の限界と資源の枯渇、和解不可能な宗教対立。誰にも正せない墮落と腐敗。地球に未来がないことを、私は知ってる」

「天使か悪魔が訪れる前に、地球は緩やかに、しかし確実に地獄に変貌し始めている。これから百年の間にどれほどの人間が仮想現実でしか生きられなくなるか分からない。そう、地球の現実には希望は見つかっていない」

「天災でも自滅でもなく、奇跡的な進化か緩やかな衰退で終わりを迎えた時に初めて、地球人は自分たちを認められるんだと思う」

「代わりに、こちら側で果てしない終末戦争が。何千年でも、一万年でも。それが、フンクトの人類が滅びるまでの未来になる」

「地球には終末も救済も訪れない果てしない絶望の未来。地球から人間がいなくなるまで。きっと、奇跡は起きない」

「フンクトの人類は宇宙で機械人類と殺し合い続ける。最後の破滅はメカナが担う。その頃には、地球に人間がいてもいなくても、もう無関係に、メカナは最後まで天使たちと殺し合い続けるはずだ」

「デイズは、その戦争の一万倍も生きて、どうするの」

「地上人類がわずかでも生き残れるのなら、その再生を見届けた後は、宇宙に進出した機械人類の興亡を見続けることになる」

「生きている間に機械の人類も滅んだら？」

「起源を地球に持たない、全く別の知的生物を探すのも面白いかもしれない」

「見つからなかったら？」

「^{フエ}數位宇宙に行くのもいいと思う。素通りしただけだが、面白い情

報生命を見たんだ」

「私も行く。行きたい」

「ああ。ディアと一緒になら、どこにでも行ける」

「私は本気」

「百年の壁を越えても、次に、千年の壁。そして、一万年の壁。それでも、たった一万分の一」

「千年生きたら、きっと方法が見つかる。見つけてみせる」

「自分の問題が手付かずなのに？ 俺はまだ、昨日の提案を取り下げていない」

「大きな戦争が始まるのに？」

「機械人類がメカナに辿り着くまで、まだ千年以上はかかる。恒惑星では、戦争の末期まで十分に安全が保たれているはずだ」

「私はもう知ったから平穏じゃいられない。地球もこの世界も駄目になるって分かって、普通に大人になるなんて、できない。最後まで生きていたい」

「普通に大人になっていいんだ。長生きをする義務はない。皆が普通に命を全うして社会が正しく動くように、社会はできている。ディアが思っているほどのこの世界は小さくない。千億の人間が暮らす惑星が七つもある。どこかにきつと、満足できる場所がある」

「できないよ。私の望みは、限りのある未来で、できる限りあなたの役に立つことだから」

「それは幼稚な独断だ」

「うん。私はまだ子どもだよ、デイズ。それに、子どもの頃の愛が、きつと、いつまでも本当のことだって、信じてる」

「そんなことを言うのなら、もう子どもじゃない」

「うん。そうかもしれない。今の私は子どもだけど、子どもじゃなくなってる。だって、もう、私は」

「それは、俺も同じだ」

「じゃあ、どうして？ デイズ、子どもみたいに意固地になって、反対ばかりしてる」

「ああ、そうだな。俺は当たり前の正しいことしか言えてない。当たり前の幸せをどうしても諦められない。だが、もうそれは理屈じゃないんだ。俺は、ディアが多くの人間と実りのある繋がりを持つことを、望んでいる。たとえ、滅亡が迫っていても」

「それが、あなたの望み？」

「そうだ。今ならはっきりと言える。後ろ暗いところのない、心からの願いだ」

「ううん。それは、違うよ、デイズ」

「違うない。本当のことだ」

「本当でも。嘘じゃなくても、嘘みたいながまかし。だって、デイズは望むだけで、今までに私の未来を一度だって決め付けたことがないから。最後のところで残酷になれないから。それが、あなただから」

「俺は残酷で、人殺しだ。未来も決め付ける。死だ。その力を取り戻したら、それからずっと殺し続ける。戦争でも新しい人間たちを殺し続けることになる。俺は、決して傍観者じゃないんだ」

「そんなことじゃないよ。あなたが殺すための暴力を振るっても、どれだけ人を殺しても、もう私の心は揺らがないから」

「揺らがないなんて、そんなこと」

「簡単だよ。ただ望まれるだけで、私は私の未来の居場所を一度だってあなたに決め付けられたことがないから。だから、私はあなたを心から好きになれるの。」

「ねえ、私は、どこにいていいの？」

「それは」

「あなたから遠く離れたところ？ あなたの近く？ それとも、あなたの隣？」

「私があなたの何になるのか、それとも何にもなれないのか、あなたは一度だって言葉にして決め付けなかった。ね、嘘みたいながまかし。今まではっきり言っていなかったこと。最後には私の心に任せていたこと。そうだよ、デイズ。自分を殺してたのはあなたも」

同じ。ずるいよ。いつの間にか本心をなかったことにして、私に選ばせるなんて」

「本心」

「うん。あなたが言ったこと。忘れた、は無しだからね」

「憶えている。ディアは、それでいいと」

「あなたは、ありがとう、って。それに、それが私の本心なんだろう、って。否定しなかったよ、私の気持ち。ね、ちゃんと聞いてくれてた。ほら、もうこんなにも綺麗な答えが出たのに、飛びつかない方がおかしいよ」

「ディア」

「私はあなたの恋人になりたい。今すぐは無理でも、いつか必ず。それに、あなたに従って、あなたのために働きたい」

「それが、君の望み？」

「うん。何度でも言える。本心もなにかも全部の、心からの願い」「千年の命も？ 戦争に巻き込まれることになっても？ 俺の命令通りに動き、戦うことを望んでいるのか？ 敵が天使であっても」

「うん。私はあなたの命令を待ってる。敵が天使でも。そして、いつか、星の百分の一の命も。あなたの思い出になるのは、嫌だから」

デイズは足を止めて白日を見上げ、目を閉じた。

輝く平面上の、白い散らばりの中の、静止点二つ。小さな無秩序。

「ディアの方が意固地だ」

その中で生まれたのは、彼から初めて聞くような、諦めの混じった喜びの声。

「良く言えば、何と言うか、偏見になるが、男らしい」
「今頃気付いた？」

わあ、という、これは歓喜。

「薄々。勇敢だなと、思っていた」

「可愛らしい方が好き？」

ありきたりの、でも少し本気の質問。

「そんなことは」

わあ、この答え方は、そんなことがある方だ。

こうして、一番無視できはずだった問題が突如として最難関のものとなるに至ったこの時、この瞬間。記念すべき孵化の時、私の烈火は遥かな炎を目指す鳥になった。

新たな道程はあまりにも遠く、険しい。けれど、彼がいる。母も父もいる。弟も妹も。恐れることは何もない。

愛する人を残して死にはしない。幾度もの炎の波濤を越え、今こそ戦いの時は訪れた。命を巡る戦い。命の強さを試す戦い。祈るべき神はなくとも意気揚々と果てへと進め。

さあ、終末の間際から、今こそ遥かな死を目指せ。

もし言葉を書き連ねるのなら、ここからは終章になる。エピソード本章が終わった後の物語。必ずしも記す必要のないこと。言葉を尽くすための挿話。結語を導くもの。

それでも大切な、最後の彩りを添えるもの。最後の象りを印すも。エンディングフィナーレの。終局。終曲。

そして、最後の答え合わせになる。永遠に秘されるはずだったことが明らかになるだろう。

私は彼に二つのことを告げるだろう。私がまだ知らないことを誰かがどこかで語るかもしれないけれど、私は私の決意と真実を告げられるのならそれでいい。

最後の思いを、彼と実無限の宇宙に表明しよう。

「こんにちは。はじめまして」

二つの声の重なり。二人の少女。突然、声をかけられた。

「こんにちは。はじめまして」

少し驚き、急いでデイズから手を離してから挨拶を返した。

「はじめまして」

デイズの方は、少しも驚いていない様子。

「ごめんなさい、急に話しかけて。邪魔だった？」

背の高い方の子。薄い褐色の髪。黒い瞳。くっきりとした目尻。
はつきりとした口調。

「ううん。そんなことないよ」

嘘ではなかった。二人で静かに歩いていただけだった。残り少ない家路を隅々まで感じられるように。この風と風景をよく憶えておけるように。

「よかった。その、ええと、もう少しで終わりだから、誰かと話したいって思ってた」

とてもいい誘いを受けた、と分かった。嬉しく思い、少し以上に驚いた。

「私たちのところで、ここでできた友だちとはずっと仲良くできなくて、言われてて」

背の低い方の子。濃い褐色の髪と瞳。少し垂れた目尻。少し恥ずかしそうに語尾を窄めて。

「そうなんだ。うん、もちろん。ありがとう。私は、レイディアンシア」

「デイズ」

家名も言おうとしたら、彼が割り込むように、しかも愛称そのままの自己紹介をした。

「デイズ？」

「秘密」

ほとんど聞き取れないような小さな声で、その一言。

「きょうだいで、ディアの方が姉さん」

さらにそんなことを言った。

「嘘じゃない」

そして小さく。

確かに嘘ではなかった。家族できょうだいなら、私の方が姉になる。けれど、嘘じゃないにしても程があると思う。デイズは嘘つき同然のごまかし屋だった。

「ええと、きょうだいなんだ。一緒に来たの？ いいなあ」

女の子たちは私たちの不自然な遣り取りを見逃してくれた。それだけで、もう好きだ。

「私はカプライム。よろしく」

「ウルキネ。プルとルクでいいよ」

簡単な自己紹介が終わり、歩きながら旅の終わりまで歓談することになった。草原の果てはもうすぐだった。かすかな潮の匂いを感じ始めていた。

「どこから来たの？」

「リポラの方」

デイズ。これもとんでもないごまかしに違いなかった。

「リポラシステム？ わあ、そうだったんだ。そうかもしれないって思ってたけど。いいなあ」

「そうかもしれないって？」

私。具体的な地名に反応。純粋な好奇心。私も十分に好奇心発生器だった。

「だって、そんな雰囲気だから。優雅というか、キラキラしてて。二人に話しかけようと思ったのも、その、だから。ほんととは下心ばっかり。ごめんね」

「プルとルクは？」

まるで気にしていないように、デイズ。

「ガウンニートっていう辺鄙な星。知らないよね」

「名前なら知ってる。どんなところ？」

そんなふうに彼が子どもらしさを上手く披露して楽しい交流が続いた。私は地上のことを詳しく聞けるだけでもとても楽しかった。

「ここで男の子と女の子が二人きりで一緒に寝たら、おとぎ話みたいに結ばれちゃうのに、お母さんとか、何も言わなかったの？」

興味津々の笑顔で聞かれて、どういうこと、とデイズの方を見た

ら、そういうこと、と言ったつもりのように頷かれたのは、どうしよう。

やがてついに至った、草原の果て。船出の海辺。白い大人たちが波打ち際に並び、白い小舟が青い海原との行き帰りを繰り返している白い砂浜。

私たちは最後の最後で四人になっていた。目に見える、それが旅の成果。二人だけの関係では何も変わらないということ。

そして、見定めるべき、一組の男女。あまりに強く記憶に刻まれた、一人の男性と一人の女性。子どもたちを出迎える大人たちの列に交ざり、まるで平素に立ち並んでいた。

「ごまかそうとしてた？」

別れ際、その発見の驚きから立ち直ってから、ちょっと怒ったようにルクが言った。困ったような笑みも見えた。

「ごめん」

デイズも驚いていた。きっと知らされてなかったのだろう。

彼もこういう失敗をすると分かり、逆に不思議と安心する。完全性の綻び。子どもである私がそれを見て、自然な人間であることが大事だと分かってく。そういう過程。わざとしてくれたと考えるのは穿ち過ぎだろう。

「確かに今はリポラシシステムの上に浮いてると思うけど。もう、貸しだからね」

プルも苦笑いしながら怒ってくれた。そして、似ていない私たちのことについて、きつと何かを察してくれていた。

二人とも気を配るような口調だった。一方的に与えられた恵みだからこそ、私は正しく報いるべきだった。

「いつか遊びに来てね。待ってるから。場所、覚えた？」

プルが明るく言った。

「うん、大丈夫。憶えるのは得意になったから。遊びに行くから、待ってて」

プルとルクとの出会いと別れは瞬きのような出来事だった。鮮明な彩り。いつまでも色褪せさせたくない、とても大切な表象と光。後は、克明な象り。私の提案が受け入れられるなら、最後にもう一度彩れるはずだけだ。

「二人の男女がここで子どもを舟に乗せて運ぶのはあの時以来の慣わしであり、イミナミアの子を帰すのは今でも私たちの役割だ。あの二人の子も、何十人とこの船に乗せてきた」

彼にユグライグノと呼ばれている長身の男性。老いた青年のような人。古木のような表情と沈み続けているような雰囲気。白い服がまるで似合っていないかった。

周りの多くの大人たちは畏れ敬うような視線を彼に送っていた。彼を知っている子どもも多いようだった。

「あの二人の子どもの頃を思い出します。男の子と女の子の二人を乗せるのもあの時以来です」

サフィアと呼ばれる女性。この世界と同じ名をもつ、女神と呼ばれる女性。髪は夜空で、瞳は満月の傍の深く澄んだ藍の色。何度見ても美しかった。

子どもの多くは無邪気に瞳を輝かせていたけれど、大人は、彼女にはもはや視線すら。

白いフードの大人たちは彼女に向かって平伏していた。傍の白いフードの子どもたちは大人と同じような姿勢をして膝と手の平に白い砂粒をつけていた。

私たちは動揺しなかった。してはいけなかった。二日間の旅路を終え、皆と同じように出迎えてくれた一組の大人に向かって真っ直ぐと歩き、彼らの言葉が終わってから小さく頭を下げた。

「ただいま帰りました」

新たな果て、水平線に向かう船出。舳先には大いなる先達者が立ち、水平線の水際には大いなる未知の人が座る。

日を円く映す風の海の上、女神は私たちにこの世界の成り立ちを語った。メカナの二千三百年の歴史が滔々と伝えられた。それもまた、果てしない、もう一つの物語だった。

この伝承が、この旅の最後の目的。

二人の始祖と二人の使者。八つの諸文明と四つの地獄。文明の統一を果たすためのとても大きな戦いがあった。裏切りと信頼。善と悪。流血と血潮。死と生。破壊と再生。やがて遂に始まる、地獄からの侵攻。千年の果てと千億の死を越え、七星の文明が終局への抵

抗の誓いの元に誕生した。そして地獄の噴出を封じる七星の機兵の国の興隆が始まった。失われたものに報いるために。そうでなければならぬように。子どもたちの笑顔だけが平和の証だった。

物語の終わりで、女神は七星の名と星々の名、そして失われた一つの星の名を私たちに伝えた。その星に暮らす人々や文化の特徴を丁寧に伝えながら、連綿と連なる都市の名も。

「この世界の歴史の半分は戦争の記録によって埋められています。本当の文明の成立は有史の始まりと定められた時より千年も後に果たされたものです。千年の安定は千年の戦乱の上に。私たちにはその二つの歴史を語り継ぐ義務があります」

女神、サファイアは語った。

「私は、デイズと一緒に生きていきます」

私はサファイアに伝えた。

彼女は微笑んで頷き、私を見つめた。

「およそ六年前、メカナとは隣り合わない遙か彼方の宇宙で、石と電子の泉に知恵を得た新しい生命が誕生しました。彼らは自由意志の元に金属の力と魔法系カルを使い、故郷である母星を手に入れ、既に彼ら自身の聖地を作り終えています。

世界が新たな時代を迎えようとしています。彼らを生んだ文明の全てを取り込んで異なる宇宙へと飛び立った時、広く終末の始まりが宣言されるでしょう。けれど、何が起ころうとも、何を為そうとも、あなたはシズと幸せでいてください。どうか、末永く」

「はい」

それは儀礼の外の出来事でもあり、神秘の前の出来事でもあった

のだろう。まだ無力な私は、せめて力強くありたいと思った。

舟が白い霧で包まれる頃、聖地で無くされていた常世のものが体に戻り始めていた。

目を閉じるとすぐに意識が眠りの中に落ちていった。隣のデイズの体温が私を包んだ。

未来を指すベクトル（ファクス）。今の私たちの物質^{シアン}。過去と繋がる空間^{ヤーテイ}。

私の孵化の旅路はここで終わる。ここがいい。彼の隣。
まるで夢のよう。彼が愛しく、家が恋しい。



細波と潮風が舟を包む。ディアの寝息が海に浮かぶ。細やかな波の連なりが果てしなく続いている。

音も光のように。波も風も音のように。

潮の匂いも、彼女の体温も、音のように、光のように。

この心の中で共鳴し合い、絶え間ない時のかたちを与えてくれる。
ここにしかない、今のかたちを。

「どうしました？」

「過去を終えて戻ってきました。主観の認知はこんなにも瑞々しいものだったのか、と驚いています」

瞼を閉じたままの返答にサフィアは無言で答えた。目を開けてその表情を確かめた。

物心が付いたばかりの子どもを見るような笑顔でもあり、不可思

議な小さな生き物に好奇心を向けているような笑顔でもあった。

「原人の子孫はどうしても最初の実を取り込め切れないまま、ここまで来てしまいました。地球と七星の文明を除き、二千三百年前に放たれた予言は全て意味を成さなくなるでしょう」

「それで十分です。あなたの尽力もあり、私たちは最良の準備を終えて彼らを迎えられるのですから。」

それに、この子がいます。そして、今もあなたが。知恵の実を完全に取り込んだこの子と、力の実を完全なかたちにして生命の実を得たあなた。もう片方の実を不完全に消化したままのあなたたちは互いに補い合って成長し、私たちと共に末永く宇宙の真空を満たしていくでしょう」

「彼女だけではありません。人は誰でも生きている間に本当の知恵を得られます。その実の一部が残されたまま、今も体の中に宿っているからです。」

それに、絶望的な終局で知恵を得る運命があるのなら、幸福を得て終局を迎える運命もあります。終局で知恵と幸福のどちらかを得ることは最終的な目的の一つになるでしょう。真空はどちらかの果実の樹で満たされるかもしれません。生命の実はその選択とその成否を見届けられるだけです」

「そうですね。あるいは人は、幸福の実という三番目の果実を選ぶこともできるかもしれません。知恵の実か、幸福の実か。そして知恵にも幸福にも様々な在り方があるでしょう。ただ、いずれにせよ、その選択を行う未来は生命の実の助力なくしては初めからありえません。あなたがいなければ、私たちの子孫は私の予言を越えてその時に至る前に滅び去ってしまうでしょう」

「種の幸せであれ、個人の幸せであれ、幸福の実を得るべき時が来ても、彼女は、もう幸せを得られないでしょうか」

「私はそうは思いません。主観ですが、私が証明しています。絶え間ない思索と歓喜が続くだけで、人は、知恵と幸福のどちらも得ら

れるのです。この子にも、人にも、可能性はあります。人であるとは認められなくなるとしても」

「もし、三つの実の全てを得たら？」

「人ではなくなるでしょう。私になります。知恵と生命だけなら、彼に。もつとも、私たちの命は神のその紛い物です。螺旋を光から創り上げたあなたには及びもしません」

「あなたたちは」

「はい。紛い物の命を得た者です。私が半分を盗み、彼がもう半分のかたちだけを整えました。ですから、果てしない戦いの果てで、私たちが物理への抵抗を終えた時、どうか私たちを殺して下さい」

その願いに頷きや言葉は返さなかった。答えられなかったわけではないが、そうであるべきだった。死にたがりのユグラならば死を避けないかもしれない、とは思った。

自分はどうだろう。およそ自ら選ぶ死でしか命を断てない自分はいつか自らを飲み込んで消え去ることがあるだろうか。

「おまえはどうする、幼い龍よ」

心を見ていたかのように、ユグラが霧の帳の向こうから尋ねてきた。やはり無言を返した。サファイアも今はもう口を閉ざし、この膝を枕にする少女に視線を向けていた。

安らかな寝顔。俺も見入った。

やがて宇宙の船の鐘が届き、幼子の旅の終わりを告げた。受け入れべき未来と帰るべき家を思い出させる響きだった。

家族が、雛の帰りを待っている。何もない未来はここにはない。白い霧が晴れるまで、あるいは彼女が目覚めますまで、こうして寝顔を見ていよう。

◆
(B a c k t o t h e l i f e ; R a d i a n c i a)

5
— 3 .

「地上が地球と同じような犯罪に塗れていることだけは、まだ教えたくない。惨い目に遭っていた子どもたちが丘の反対側で保護されていたことも」

俺は語った。相手はそれを沈黙で受け止め、やがて口を開いた。

「君だった、ということも？」

「それは、永遠に」

父であるオリオンとの対話。薄い空を仰ぐ最上階層の商業区の一

画で向かい合っていた。

ディアが望んだ都市観光の合間。晚餐の翌日に彼女が望み、両親と姉妹によって直ちに快諾された。行き先はリポラシステム。九百九十六億の人口を誇る、七つの恒惑星の盟主。

星を覆う立体都市が雲を越えて上下に積み重なる光の惑星。空と海、マグマと地核すらも幾何線形で囲み、都市で集積^{ソルタ}経路を造った星。恒惑^{カルラ}星。

今、彼女は母であるエクシと一緒に秘密の買い物に行っている。

男二人は待ち合わせ場所のカフェでこうして休憩をしている。兄妹は疲れて椅子の上で行儀悪く横になっている。

隣で寝られることが多い、という雑感を抱きながら、エクシと対を成す始祖の一人と話をしていた。彼とこうして向かい合うは久しぶりのことだった。今は年若い賢者の面持ち。しかし彼こそが最後の王者。真の幸せを追い求める者。

「僕は一つの仮説を持っている」

真実に対する完結された答えを受け取り、彼は言った。

「事象平行世界は異時間宇宙に等しい、という仮説。そして、人や情報が異なる時間の宇宙に移動すれば、その時点でその宇宙は異世界化する、と考えている。」

過去や未来の無数の球面十次元宇宙は同じ距離を保って十次元目の球面空間上を進んでいて、それぞれの時間を持ち続けている。宇宙の開闢の最後の時、十次元までの空間と全ての並列宇宙層が生まれた後に、全空間の時間上の量子的な幅が生まれたんだと思う。そして、球面十次元方向への膨張が始まったんだ。

秩序が始まるうとしていた直前に宇宙が未来へと伸長していったのなら。時間移動の干渉がない限り、世界は限りなく同じ宇宙の連なりなんだ」

「そう思う。平行世界層の膨張は、十次元の球面上にある宇宙発
生点から同心円状に。つまり、一秒前後や百年前後の時間差の平行
世界があるだけで、それぞれの宇宙の過去と未来はどこにもない」
「じゃあ、シズは？ あの街から彼方の世界に辿り着いた、他の時
間宇宙の君が一体どうなって、君がどうやって帰ってきたのか、僕
にはまだ確信が持てない」

「オリオンが思っている通りだ。真球宇宙での千八百一年は、それ
だけの平行世界の俺が絶え間なく重なり続ける時間の長さだった。
エンデという時間存在の連続を途切れさせて球面宇宙に戻ったのは、
最初の俺から千八百一年後。もう半分の螺旋を創り終えた後だ。

その時、俺はエンデであってエンデではない存在になっていた。
デディゼンドという別の存在として螺旋を創った。でなければ、平
行世界の全てがああの時間座標を通過するまで、果てしなくあの世界
に閉じ込められていた」

「それはつまり、彼女が彼女でないから、シズは」

「違う。俺が、俺でないから。この宇宙の、彼女にとっての本当の
エンデは今頃向こうの宇宙にいる。その俺に神々が何を言うのか、
今度は何年をかけさせるのか、もう俺にも想像がつかない。

それに、俺はニルキナを救える唯一の可能性を捨てた。決して許
されない。度し難い愚者だ」

「それは仕方のないことだった。君は、知らなかったんだから」

「それでも、心から望んで試したなら、知ることのできたことだっ
た。あの宇宙で、俺には天球の球面上に存在している無数の球面宇
宙の全体の模様が分かるだけだった。この球面十一次元宇宙も無数
の球面多次元宇宙の一つに過ぎないと分かるだけだった。

この球面宇宙の、一つ一つの時間宇宙の中は見られないと分かっ
て、本当は安心したんだ。未来を知ることが怖かった。自分がいな
くなった後のあの街の未来を知ることが。それでも俺は見るべきだ
った。その努力をするべきだった。力が欲しくて銃を作ることがで
きたのなら、せめて、自分の宇宙だけでも、見届けるべきだったん

だ」

「シズ、僕はこう思う。宇宙に相応しい新しい人類が生まれたこととは関係なく、そして戦争の行く末なんかにも関係なく、君が来てくれたこと以上の奇跡はないって。君はこの宇宙を選んでくれた。六年前にここに来てくれた。この宇宙だけなんだ。終末しかない実無限の宇宙の中の、この宇宙だけだ。君がいる世界は。だから」

「俺は」

「あの子にとっても、この世界だけなんだ。あの子が君に救われた世界は。必然ではなかったとしても、だからこそ、彼女に起こした奇跡の責任を取って欲しい。責めるつもりはない。君の絶望と希望は想像を絶している。でも、どうか耐え切って、命を懸けて、あの子を幸せにして欲しい」

「オリオン」

「それに、僕にはシズがこの宇宙の君でないなんて思えない。納得できない」

「それは。それだけは」

「シズ」

「そんなことを言うのは、オリオンだけだ。自分で作った仮説が破綻する」

「うん。誰が言わなくても、僕が言うよ。僕は、君がこの世界の君でもあると信じてる。破綻もしない。希望は残されてる」

「だが」

「シズ、君がここに帰ってきてからの別宇宙の君は、世界を超えて、どこに辿り着いて、どうしたんだろう。君の知らない、君にしか分からない、この六年の間の彼方の君が、最後の希望だ」

「それは」

「さあ、どうか奇跡を信じて」

(I n t o t h e —)

奇跡を、信じる。

だからこそ。

だからこそ、辿り着く。球面宇宙への帰還の直前になって置き去りにされた一本の螺旋と、その創造過程で生まれた余剰の宇宙。その場所に、俺たちは辿り着く。

その螺旋と星のような宇宙を見た俺たちは、再び重なっていく俺はそう、分かったはずだ。かつて俺がそこにいて、その二つのものを創り上げ、帰って行ったと、理解した。そして。

「諦めないで。あの子のために。あの子もきっと信じてる」

辿り着く。

世界の果て。

限りある世界。

その片隅で、一本の螺旋と星のような宇宙が輝いている。

エンデ エンジェルは気付く。そして見続けるだろう。それが目的になる。何百年かが過ぎた時、もしくは神々にそそのかされた時、それを模倣しようと思ひ至るかも知れない

しかし、やがて。

螺旋と星は、落ちてゆく。

ああ、そうか。そうだ。俺なら、そうする。躊躇いなく、そうする。断言できる。俺は、そういう人間だ。結局、俺はそのような存在だから。

なぜ気が付かなかったのか。今頃向こう側の宇宙にいる、とどうしてそんな心にもないことを言えたのだろう。過去を終えた、と臆面もないことを言えたのだろう。どうかしている。結局、何も分かっていなかった。自分自身を見捨てていた。

「あの時、この俺に呼ばれて落ちていく螺旋と宇宙を見て、俺は、そう、一緒に」

落ちて、いった。その直前まで重なり続けながら、透明な星のよ
うな宇宙に、六年分のエンデは。

「溶けて、全ては消えずに、この中に」

(I n t o t h e s e l f)

知恵の実をもう一口齧り、遂に理解に至ったならば。
蘇る。量子領域に溶けた千八百七分の六が見たその光景。そして
一人のエンデが辿った最後。

深遠となった海の記憶。螺旋が照らし、光となる。

(I n t o t h e s e l f ; p r e s e n t)

光を虚空に零しながら落ちていく星を追いかける。自分が創った
星が落ちていくのなら。この自分が落ちていけない理由がない。

光を虚空に零しながら落ちていく星を追いかける。それが理由。
それが希望。どこに行こうとも。どこに落ちようとも。

この身を星と同じにしよう。きつと星は呼ばれている。光を虚空
に零しながら、それでも大事に螺旋を抱えて落ちていく。螺旋を虚
空の向こうに届けてゆく。ならば俺も届けよう。

落ちていく。追いかける。星になろう。それが理由。それが希望。
きつと呼ばれている。

星になろう。

螺旋を抱えて落ちてゆこう。

「デイズ。どうしたの？」

「ディア」

「行こう？」

「ああ」

(I n t o t h e s e l f ; p r e s e n t ; r e
a l)

未来の彼方から始まる星に連なり、遂にこの宇宙に帰ってきた。

永遠はここにある。

それは喜び。

しかし、真実を得た今、似て非なるものが再び彼方の宇宙にも存在していると知る。

何も知らない幼い者が命の中の永遠を見つけている。初めて創られた拙い螺旋が融け消え、新しい宇宙星へと生まれ変わっている。今は小さな無色の星。

〈経路接続…当該球面宇宙から真球宇宙…再構成…L・R〉

そして、真実を受け入れた今こそ宿る、星への経路。

両腕に新たなセイレンが刻まれる。核となる複写^{ヒクス}符合は既にここにある。

どれほどか細くとも、それは絶対の死の力。

死に塗れる運命は、今や太陽すら溶かせない小さな海と炉心と共に

に。自らに安樂の死をもたらす代わりに、あらゆる命を蔑むだろう。

星は瞬くだろう。彼方がかつて見ていたように。あの女神の願いを叶えるまで、果てしなく。

これで、構わない。自分はこの程度の存在だと、知る。
悲観はしない。全ての自分を得られたのだから。

(―― r e a l)

自意識の海から飛び立ち、見渡される、大地の灯火。
答えを得たワタシは、あの子の幸せ以外に、何を願う？

「綺麗」

ディアと二人になり、展望台の小道を歩いてゆく。
彼女は淡い月のような髪を光の星の風になびかせ、地球のように
輝く瞳で光の谷の都市を眺めていた。体には月に添う薄黄色のワンピース。

「そう言えば、どうしてみんなディズのことをシズって呼ぶの？」
「アクアが最初にそう呼ぶようになったんだ。ディアも、呼びにくかったらシズでもいい」

「ううん、このままでいい。もうずっとディズって呼んでるから」
「分かった」

「ねえ、ディズ。私、学校に行きたい。うん、もちろん、あなたと一緒に」

「ああ、行こう。丁度、この近くに学校がある」

「いいの？」

「もちろん。実は、働いていた時にこの辺りを任されていたんだ。つまり、そこに行けということだ。いいところのようだから、思惑に乗りうと思う」

「ありがとう。楽しみ。夢みたい。ディズも、楽しみにしててね。私、もう一つ目標ができたから」

「もう一つ？」

「うん。あなたを、幸せにすること。それが、あなたと一緒に生きる、もう一つの方法。私が生きている間にあなたを満足させて、もう死んでもいいって思わせること。あなたを、死なせること。誰にも許されない、私の決意」

「ディア」

「色んなところに行こうね。プルとルクにも会いに行こう。一緒に遊ぼう。大丈夫、ちゃんと勉強もするから。長生きすることだって全然諦めてないよ。だから、楽しみにしてて」

彼女がそう言って振り向いて見せてきたのは、大事なことを秘密にし切れなかった子どものような、心からの笑顔。

「最初のきっかけはね、あなたが来てくれた理由は何だろうっていう疑問。この世界のたくさんの人たちの中から、あなただけが来て

くれた本当の理由を考えないといけないって、気付いたの。無関心に通り過ぎていく人たちを見て。理由がないなんてありえないって」

そして、もう一度前を向いて歩き出す。言葉を返せない。そのまま、彼女を先頭に、二人で光の回路の峰を歩いてゆく。

「そうしたら、すぐにあの人が教えてくれた。理屈はいらなかった。分かったの」

ディアは不思議な笑顔を浮かべた。分かっではいけないことだと分かっている、と伝えるように。

「あなたが私だけをあんなふうに助けてくれた理由。私があなたに連れて行かれないと望む前。始まりの前の、本当の始まり。私のところに来てくれて、あんなふうに優しく触ってくれた理由。」

あれから、あなたは誰にも触らなかった。どうして私なのか、あなたに理由がないなんて、ありえなかった。私を助けたことが偶然だったのなら、なおさら。

私のことを知ってくれていた可能性以外、私だけをあんなふうに助けてくれた理由は、考えられなかった」

「一目で心を奪われたから、とは考えなかったのか？」

その反論に、彼女は立ち止まって微笑みを浮かべた。

姿勢を傾け、小さな手と頭を預けてくる。

消え入るような声が、本当に消える前に届いた。

「私よりも綺麗な子がいたの、憶えてる」

「もう、ディアがいたから、という可能性は？」

愚かな最後の抵抗。それは諦めるために。

「私の目の前で、あんなにも平気に人を殺していたあなたが？」

泣きそうな笑み。それは彼女の地獄。死神の抵抗を払い、諦めさせるために。

「だから、考えないといけなかった。どこかで会ったことがあるかもしれない、いてくれていたのかもしれない、って」

地獄の頂に立ち、ディアは告げた。

「どんなことが起きても、私は私の心と、本当のことを信じてる。それに、青空の見えたあの夜に、私は奇跡も信じられるようになった。どこかに私の知らない奇跡もあることを、知ったから」

それは、天上と接するところで紡がれた、真実を象る尊い意志。奇跡そのもの。

「うん。私は、憶えてる。それでも優しい、あなたの懐かしさを。助けられた時に感じた懐かしさを。私にできるのは、信じること。あなたが来てくれたこと、話してくれたこと、みんなが教えてくれたことの全てが、本当のこのところに連れて行ってくれた。分かったの。どれだけ遠く離れていたとしても、こうしてあなたに会えたから」

「向こうの街で会ったこと、あるよね。デイズ」

そっと、抱きしめられた。もう、目を閉じるしかなかった。

「ごめんね。いつかきつと、ちゃんと思いついてみせるから。約束」

ニルキナの向こう側の街を思い出す。自由の少ない市民たちを生かすための仮想世界。方舟の中の箱庭。孤児のための学校はそこの中にあった。

彼女が思い出せなくても無理はなかった。エンデは仮想現実の数十万の住人の一人でしかなかった。会っていた時の姿は人ですらなかった。

気まぐれで無愛想なロボット。気まぐれで人工知能の受付に成りすまして市民を観察していた時、偶然、彼女と出会った。

初めは単なる子どもとしか見ていなかった。しかしいつしか、彼女の姿をいつも探すようになっていた。

なぜか勇敢な、あの立ち姿に惹かれていた。

「もう、大丈夫」

どこまでも優しい言葉。この世の驚きが溶けているようだった。



一つは、もう一つの答え。彼を一人にしないために。二つの答えを両手に持つ、その決意。

一つは、奇跡。私が私だけである理由。彼が彼だけであること。

私にとっての、その真実。

伝え続けよう。彼と世界に。たとえ世界が揺らいでも、私の命と烈火と共に。

「話をしたのは一度きり。きっかけは、ほとんど偶然だった」

「それだけだったら、思い出せるまで何年かかるか、分からないよ」

「それじゃあ、一つ、願い事を聞いてくれたら、もう一つ」

「なに？」

「ディアも、自分を幸せにすること」

これから毎日、私たちは話をする。夜にはキスを。それ以上の幸せと、私自身の幸せは、ほんの少し先の未来から、末長く、いつまでも。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0677q/>

Radiancia

2011年1月11日12時49分発行